

明星本『正広自歌合』の

本文と校異 (2)

前田雅之*

二、明星本『正広自歌合』の翻刻と校異 (承前)

前稿 (「明星本『正広自歌合』の翻刻と校異 (1)」) を受けて、本稿では、「秋冬」の六一番〜一二〇番、「恋雑」一番〜一二〇番) の翻刻と校異を掲げる。

六十一番左 簾葵
 (国) こすの戸にかくる二葉の草の名よ誰 あふ中に神まつるらん
 (大) こ は 逢 む
 * (大) は「こすのと」が「こすのこ」と読める
 (ノ) と たれ逢 中
 (彰) と たれ逢 中
 (明) こすのどにかくる二葉の草の名よたれ逢 中に神まつるらん
 (伊) と たれ逢

(島) と たれ逢
 (祐) と たれ逢
 (書) たれ逢 中
 (三) みす
 * (三) は「みす」と作る。独自本文だが、おそらく誤読に基づくか。
 (静) 「たれまつ」と作る。独自本文。
 (内) 小簾の まつ 奉 らん
 * (内) は、「小簾の戸に」が「よ」とも読める。また、他本「たれあふ」を「たれまつ」と作る。独自本文。
 (神1) 待 中
 * (神1) も (内) と同じく「たれ待」と作る。
 (統) と たれ 祭 る
 (統書) と たれ 祭 る
 (続内) と たれ 祭 る
 * (続内) は他本「名よ」とあるのに「名に」と作る。「よ」と「に」の混同か。
 (神2) と たれ 祭 る

右 寒草嵐
 (国) いとひこし春 の嵐 の冬にきて又 花ちらす雪のあさちふ
 (大) 吹 に花さく霜
 * (大) は (明) がミセケチをした本文をとる。
 (ノ) ふくに花咲 霜
 * (ノ) は (大) と同文。これで確定。(ノ) 〓 (大) 系。
 (彰) ふくに花さく霜
 (明) いとひこし春 の嵐 の冬にきて又 花ちらす雪のあさちふ
 * (明) は「ふくに花さく霜」ミセケチ「又 花ちらす雪」

* これをみると、(国)は、(明)の後に成立したこととなる。(明)の訂正箇所を反映しているからに他ならない。

(伊) 又 花ちらす霜

* (伊)は(明)のミセケチによって消された「霜」をそのまま写したか。(明)は「花ちらす雪」

(島) はるのあらし

(祐) はるのあらし

(書) また花ちらす

* (書)は「ふくに」に傍線「又」、「さく霜」に傍線「ちらす雪」と傍書。

(書・明)ともに(大)をここで改編。

(三)

* (三) 〓 (静) 〓 (国)。

(静)

* (静)は「又花ちらす雪」にミセケチ「ふくに花さく霜」と傍書。但し、別筆か。先祖返り。これは(大)までに戻ったか。

(内)

* (内)は(大)と同じ。(明)によって改められた前の本文を示す。これをどう考えるべきか。

(神1)

* (神1)・(内)は「吹に花さく」と作る。(大)と同文。

(続)

* (大)・(内)・(明)の原文と同じく「吹に花咲く霜」と作る。(内)と同じと
いうことか。

(続書)

(続内)

(神2)

あらし	来	吹	に花さく霜	浅	茅生
あらし	来	吹	に花さく霜	浅	茅生
あらし	来	吹	に花さく霜	浅	茅生
あらし	来	吹	に花さく霜	浅	茅生

六十二番左 盧橘(ノ)

(国) 風ふけは一村薄 たち花 にこぬ秋まねく袖のかそする

(大) 吹は すゝき 香

(ノ) すゝき橘 香

(彰) すゝき橘 香

(明) 風ふけは一村薄 橘 にこぬ秋まねく袖のかそする

(伊) 橘 橘

(島) むらすゝき橘 橘

(祐) むらすゝきたちはな 香

(書) 吹は 香

(三) 吹は 香

* (三) 〓 (静) 〓 (国)。

(静) 吹は 橘

(内) 吹は 橘

(神1) 吹は 橘

(続) 吹は 橘

(続書) 吹は 橘

* (続書)は「橘に」の「に」にミセケチ「に」と傍書。最初の「に」がやや読みにくいため措置か。

(続内) 吹は 橘

(神2) 吹は 橘

右 冬山(神1)(彰)

(国) 霜しろく先色 かへて楨 ひはらつれなき山も木枯 の声

(大) 白く

(ノ) 真木檜原 ころゑ
 (彰) 真木檜原 からし
 (明) 霜しろく先色 かへて真木檜原 つれなき山も木枯 のころゑ
 (伊) 真木檜原
 (島) まついろ 真木檜原 からし
 (書) 真木檜原 からし
 (静) 真木檜原 からし
 (三) 真木檜原
 (内) 真木檜原
 (神1) 真木檜原
 (統) 真木檜原
 (統書) 真木檜原
 (続内) 真木檜原
 (神2) 真木檜原
 * (神2) は「榿(敷)」にミセケチ「榿」、おそらく「榿」と書こうとしたものの、書き損じか。
 六十三番左 夏雲(大)(内)

(明) うつりきて卯 花山にかゝる也 春は桜 に嶺のしら雲(三六オ)
 (伊) 也 さくら
 (島) さくら
 (書) さくら
 (静) 也 さくら
 (内) 也 さくら
 (神1) 也 さくら
 (統) 移り来 の 白
 (統書) 移り来 の 白
 * (統書) は「しら雪」の「雪」にミセケチ「雲」と傍書。(内) 系を見ての校訂か。
 (続内) 移り来 の 白
 * (続内) は(神2)と同じく「しら雪」と作る。(統) 系はこれが本来の形だったか。
 (神2) 移り来 の 白
 * (神2) は「雪」とするが、題と合わない。(統書) との共通祖本が同一であることを思わせる。おそらく同一本である。
 右 原雪(国)(内)(静)(三)

(伊)	風	まくす	うらみ	はれ	哉	(内)	中		とふ	かな
(島)	風	まくす	うらみ	はれ	哉	(神1)	内			
(祐)	風	まくすはらうらみ	うらみ	はれ	哉	(統)	中	いり	かな	
(書)	風	うらみ	はれ	哉	哉	(統書)	中	いり	かな	
(三)		まくす	はれ	哉	哉	(続内)	中	いり	かな	
(静)		まくす	はれ	哉	哉	(神2)	中	いり	かな	
(内)	風	うらみ	はれ	積る	哉	右 古寺雪(彰)				
(神1)	誰か	うらみ	はれ	積る	哉	* (彰)は「寺雪」と作る。				
(統)	風	はれ	積る			(国) 法師のはらふとみれば笠 松になたる、雪の山 風				
(統書)	風	はれ	積る			(大) 法師の かさきてら				
(続内)	風	はれ	積る			(ノ) 法師の かさきてら				
(神2)	風	はれ	積る			* (ノ)は「法の師」が(大)と同一。				
六十四番左 蛍近飛(島)(祐)										
(国)	ぬるかうちに入	きて	の火をとるやともすは消	て飛	蛍	(明)	法師のはらふとみれば笠	き寺	松になたる、雪の山	かせ
(大)	内	取	とふ	かな	哉	(伊)	法師のはらふとみれば笠	き寺	松になたる、雪の山	かせ
(ノ)	内	取	とふ	かな	哉	(島)	法師のはらふとみれば笠	き寺	松になたる、雪の山	かせ
(彰)	ぬるか内	入	きて	の火をとるやともすは消	て飛	(祐)	法師のはらふとみれば笠	き寺	松になたる、雪の山	かせ
(明)	ぬるか内	入	きて	の火をとるやともすは消	て飛	(書)	法師のはらふとみれば笠	き寺	松になたる、雪の山	かせ
* (明)	は、「と」と「す」の間に「も」と傍書。					(三)	法師のはらふとみれば笠	き寺	松になたる、雪の山	かせ
(伊)	内					(静)	法師のはらふとみれば笠	き寺	松になたる、雪の山	かせ
(島)	ねや	ねや	きえ	ほたる	かな	* (静)は「松になたる」の「る」に「けし」と傍書。つまり、「なたけ				
(祐)	ねや	ねや	きえ	ほたる	かな	し」か。但し、今のところ、この本文もつ伝本はない。				
(書)	取	取	とふ	かな	哉	(内)	法師のはらふとみれば笠	き寺	松になたる、雪の山	かせ
(三)	とふ	とふ	かな	哉	哉	(神1)	法師のはらふとみれば笠	き寺	松になたる、雪の山	かせ
(静)						(続)	法師のはらふとみれば笠	き寺	松になたる、雪の山	かせ

(統書) の かさ
 (統内) の かさ
 (神2) の かさ

六十五番左 滝辺蟬(神1)

(国) 声 涼し 滝 のしら糸 ぬの引をりつゝくるや蟬 のは衣
 (大) すゝ 白 布 ころも
 (ノ) すゝ 白 布 羽 ころも
 (彰) すゝ 白 布 ころも
 (明) 声 涼し 滝 の白糸 布 引をりつゝくるや蟬 の羽衣
 (伊) すゝ 白 布 羽
 (島) すゝ 布 せみ ころも
 (祐) すゝ いたき いと布 せみ ころも
 (書) こゑすゝ 布 羽
 (三) こゑ 布 はころも
 (静) すゝ 布 はころも
 (内) こゑ 白 布 お
 (神1) こゑすゝ 白 布 織 つ はころも
 (統) 布 織 つ はころも
 (統書) 布 織 つ はころも
 (統内) 布 降 つ はころも
 (神2) 布 織 つ はころも

右 網代霰

(国) 關 き夜に後のむくひを先 しるや網 代もる身をうつ霰 哉
 * (国) は「夜に○む」とあり、○の箇所「後の」と傍書。親本のままか。

(大) くら あしろ
 (ノ) くら ゐ かな
 * (ノ) は(大)他「むくひ」を「むくる」と作る。書き損じか。
 (彰) くら
 (明) くらき夜に後のむくひを先 しるや網 代もる身をうつ霰 哉
 (三六ウ)

(伊) くら
 (島) くら
 (祐) くら
 (書) くら
 (三) くら 知るや
 (静) くら 知や
 (内) くら 知や
 (神1) くら 守身
 (統) まつ 守身 打霰 かな
 (統書) まつ 守身 打霰 かな
 (統内) まつ 守身 打霰 かな
 (神2) まつ 守身 打霰 かな

六十六番左 納涼(大)

(国) 松 かもと扇 は風の泉 にて涼 しく匂 ふ庭の遣 水
 * (国) は他本の「むかふ」に対して「匂ふ」と作る。最終形態か。それとも、「向」と「匂」の混同(誤写)か。「涼しく匂ふ」は新古今時代に少し流行る。「涼しく向ふ」も同時にあるが、ここは最終形態と考えるのがよいか。誤写の可能性が高いか。
 (大) あふき すゝしく向 やり

(ノ) 松 かもと扇 は風の泉 にて涼 しくむかふ庭の遣水
 (彰) むか やり
 (明) 伊 松 かもと扇 は風の泉 にて涼 しくむかふ庭の遣水
 (島) あふき
 (祐) あふき
 (書) あふき
 (三) 本
 (静) 本
 (内) 本
 (神1) 本
 (統) まつ あふき
 (続書) まつ あふき
 (続内) まつ 下 あふき
 (神2) まつ あふき
 (国) 春をまつ人の心 を恨 てや世はうき物 と年の行らん
 (大) 待 うらみ
 (ノ) うらみ
 (彰) うらみ
 (明) 春をまつ人の心 をうらみてや世はうき物 と年の行らん
 (伊) うらみ
 (島) こゝろ うらみ
 (祐) こゝろ うらみ
 (書) うらみ
 (神1) うらみ
 (続内) うらみ

(三) うらみ
 (静) 覧
 (内) こゝろ うらみ
 (神1) うらみ
 (統) もの
 (続書) もの
 (続内) もの
 (神2) もの
 六十七番左 新樹
 (国) 草も木もひとつにしける色そき空 は緑 の天 のかく山
 (大) 茂る
 (ノ) あま
 (彰) 草も木もひとつにしける色そき空 は緑 の天 のかく山
 (明) 草も木もひとつにしける色そき空 は緑 の天 のかく山
 (伊) そら
 (島) そら
 (祐) そら
 (書) そら
 (三) そら
 (静) そら
 (内) そら
 (神1) そら
 (続) 茂る
 (続書) 茂る
 (続内) 茂る
 (神1) 茂る
 (続) 茂る
 (続書) 茂る
 (続内) 茂る

(神2) 茂る ひとり あま

右落葉(神1)(ノ)

(国) ときは木も嵐 にはらは谷をうめ嶺 もたひらに山やなりなん

* (国) は末句を「なりなん」と作る。他本は「なるらん」。最終形態か。

(大) 成らん

(ノ) 成らん

(彰) 成らん

(明) ときは木も嵐 にはらは谷をうめ峯 もたひらに山やなるらん

(伊) 峯 るらん

(島) あらし の みね るらん

* (島) は「谷のうめ」と作る。誤読か。

(祐) あらし みね るらん

* (祐) は(島)の「谷のうめ」を意味から「谷をうめ」に変えたか。

(書) 常は 峯 る

(三) × × るらん

* (三) は「嶺も」が脱字。

(静)

* (静) は「谷の」の「の」にミセケチ「を」、「山やなりなん」の「り」にミセケチ「る」と傍書。前者は単なる誤写だが、後者は校訂、先祖返りか。同筆か。

(内) 常葉 ひとつに るらん

* (内) は(大)(明)(国)等本「嵐に」を「ひとつに」と作る。独自本文。

(神1) ひとつに るらん

* (神1) は「ひとつに」で(内)と同文。

(統) 常磐 い るらん

* (統) は「嵐」に「ひとつ」と傍書。異本は(内)と同じ。

(統書) 常磐 い るらん

* (統書) は「嵐」に「ひとつ」と傍書。(内)と同文。

(続内) 常磐 るらん

* (続内) は「谷をうめ」の「め」が「も」に見える。

(神2) 常磐 い るらん

六十八番左 郭公何方(国)(静)

(国) 郭 公いつれの雲そ山 ひこに二声過る村雨の空

(大) るらん

(ノ) ほとゝきす るらん

* (ノ) は「過る」の「る」にミセケチのようなものがある。とすれば、「過雨」と記したかったか。理由は今のところ不明。

(彰) ほとゝきす るらん

(明) ほとゝきすいつれの雲そ山 ひこに二声過る村雨の空

(伊) ほとゝきす るらん

(島) ほとゝきす るらん

(祐) ほとゝきす やまひこ るらん

(書) ほとゝきす るらん

(三) るらん

(静) るらん

(内) の るらん

* (内) は他本「やまひこに」を「やまひこの」と作る。独自本文。

(神1) 時 鳥 ふたこゑ るらん

(統) 彦と るらん

* (統) は「やま彦と」の「と」に「のイ」と傍書。異本は(内)と同じ。

(続書) 彦と むらさめ そら

* (続書) は「山彦と」の「と」に「の」と傍書。(内)と同文。

(続内) 彦と むらさめ そら

(神2) 彦に むらさめ そら

* (神2) は「山彦に」とする。他本と同じ。ほぼ(続書)に等しいのに、どうしてこうなったか。不明。偶然か。

右 古寺夕雪」(彰)

(国) うちほらふ袖に夕 は顕 てすみ染 うすき雪のふる寺

(大) 打は あらはれ 薄き 古

(ノ) 打は あらはれ 墨 染

(彰) うちほらふ袖に夕 はあらはれて墨 染 うすき雪の古寺

(明) うちほらふ袖に夕 はあらはれて墨 染 うすき雪の古寺

(伊) うちほらふ袖に夕 はあらはれ 墨

(島) うちほらふ袖に夕 はあらはれ 墨

(祐) うちほらふ袖に夕 はあらはれ 墨

(書) うちほらふ袖に夕 はあらはれ 墨

(三) うちほらふ袖に夕 はあらはれ 墨

* (三) 〓 (国)。

(静) の 古

(内) は他本「袖に」を「袖の」と作る。 古

* (内) は他本「袖に」を「袖の」と作る。 古

(神1) 打 払らふ 墨

(続) 打 払らふ 墨

(続書) 打 払らふ 墨

(続内) 打は 墨

(神2) 打 払らふ あらはれ 墨 たら

六十九番左 月前蛩」(大)(島)(祐)

(国) さらしなやなくさめかねし思 ひかも月影 みれは行 ほたる哉

(大) さらしなやなくさめかねし思 ひかも月影 みれは行 ほたる哉

(ノ) さらしなやなくさめかねし思 ひかも月影 みれは行 ほたる哉

(彰) さらしなやなくさめかねし思 ひかも月影 みれは行 ほたる哉

(明) さらしなやなくさめかねし思 ひかも月影 みれは行 ほたる哉

(伊) さらしなやなくさめかねし思 ひかも月影 みれは行 ほたる哉

(島) さらしなやなくさめかねし思 ひかも月影 みれは行 ほたる哉

(祐) さらしなやなくさめかねし思 ひかも月影 みれは行 ほたる哉

(書) さらしなやなくさめかねし思 ひかも月影 みれは行 ほたる哉

(三) さらしなやなくさめかねし思 ひかも月影 みれは行 ほたる哉

* (三) 〓 (静) 〓 (内)。

(静) さらしなやなくさめかねし思 ひかも月影 みれは行 ほたる哉

(内) さらしなやなくさめかねし思 ひかも月影 みれは行 ほたる哉

(神1) さらしなやなくさめかねし思 ひかも月影 みれは行 ほたる哉

(続) さらしなやなくさめかねし思 ひかも月影 みれは行 ほたる哉

(続書) さらしなやなくさめかねし思 ひかも月影 みれは行 ほたる哉

(神2) さらしなやなくさめかねし思 ひかも月影 みれは行 ほたる哉

右 古寺冬月」(三)

(国) 寺ふりぬ誰 もむすはて月ひとり水なき池 に氷をそしく

(大) 古ぬ いたれ

(ノ) いたれ

(彰) たれ 敷

(明) 寺ふりぬたれ もむすはて月ひとり水なき池 に氷をそしく

(伊) たれ

(島) たれ

* (島) は「ひひとり」の最初の「ひ」にミセケチで月と傍書

(祐) たれ

(書) たれ

(三)

* (三) || (静) || (国) || (内)。初期から最終段階まで変わらなかったといふことだ。

(静)

(内)

(神1) たれ 結 は

(続) たれ

(続書) たれ

* (続書) は「氷をく」の「く」にミセケチ「そ」と傍書。書き損じ故だろう。

(続内) たれ

* (続内) は「たれ」の「た」は何かを消して上書き。

(神2) たれ

* (神2) は「たれ」の「れ」、「氷をそ」の「そ」が読みにくい。

七十番 左 蚊遣火(神1)

(国) 偽 のありとふすふる妻ならて涙 袖せく宿 のかやり火

(大) いつはり 有 と やと 蚊遣

(ノ) いつはり 蚊遣

(彰) いつはり 蚊遣

(明) いつはりのありとふすふる妻ならて涙 袖せく宿 の蚊遣 火

(伊) いつはり 蚊遣

(島) いつはり 蚊遣

(祐) いつはり 蚊遣

(書) いつはり 蚊遣

(三)

* (静) || (国) || (内)。

(内)

(神1) いつはり

(続)

(続書)

(続内)

(神2)

右 暁爐火(彰)

(国) 寒 わふるうき身にいつかむかひみん其 暁 のうつみ火のかけ

(大) 向 み

(ノ) さえ

(彰) さえ その

(明) さえわふるうき身にいつかむかひみん其 暁 の埋 火のかけ

(伊) さえ

(島) さえ

(祐) さえ

(書) さえ

(三)

む

埋 火

(三セウ)

(三)

* (三) || (国)。

(静)

(内) に

* (内) は他本「わふる」を「にふる」と作る。独自本文。

(神1)

(統) さえ侘

見 その 影

(神1)

(統) は文末「もと」に「かけイ」と傍書。異本は、(内) 他他本と同じ。

(統書) さえ侘

その 埋 もと

* (統書) は「もと」に「かけ」と傍書。異本は(内) と同文。

(続内) さえ侘

その 埋 もと

(神2) さえ侘

埋 もと

* (神2) は「むかひせん」の「せ」にミセケチ「み」と傍書。(統) 系はもと

もと末句は「もと」なのだろう。

七十一番左 水上蛩

(国)

(大)

(ノ)

(彰)

(明)

(伊)

(島) ×

* (島) は誤写か。

(祐) ×

* (祐) は(島) をそのまま承けた。つまり、(祐) は(島) を写した本と見做

しうる。

(書)

(三)

(静)

(内)

(神1)

(統)

(統書)

(続内)

(神2)

(国)

(大)

(ノ)

(彰)

(明)

(伊)

(島)

(祐)

(書)

(三)

* (三) は「あはさりし世々の思ひの蛩 かも岩もる水によるのほたるは」という独

自本文。他例なし。蛩が二度使用されているから、誤写か。

(静) ×

(内)

(神1)

あはさりし世々の思ひの蛩 かも岩もる水によるの光 は

よゝ ほたる

おもひ ひかり

あはさりし世々の思ひの蛩 かも岩もる水によるの光 は

おもひ ほたる

おもひ ひかり

おもひ ほたる

おもひ ほたる

おもひ ほたる

おもひ ほたる

おもひ ほたる

おもひ ほたる

おもひ ほたる

夜々 おもひ ひかり

(統書) 夜、おもひ
 (統内) 夜、おもひ
 (神2) 夜、おもひ

右 遠山雪

(国) 九重にしらぬとこよを日にそへて遠 よせくる嶺の白雲

*私家集大成は「を」と読むが、おそらく「遠」と書こうとしたのではないか。

末句「雲」にしても、最終形態か。「遠く」だから「雲」となる。他本は「近く」

「雪」。

(大) 近く 雪
 (ノ) ちかく しら雪
 (彰) ちかく 雪
 (明) 九重にしらぬとこよを日にそへてちかくよせくる嶺のしら雪
 (伊) ちかく 雪
 (島) ちかく しら雪
 (祐) ちかく しら雪
 (書) ちかく 雪
 (三) 遠く 雪
 * (三)は(国)と同文のはずであった。「遠く」で一致する。
 (静) 近 × 雪
 * (静)は(大)・(明)と同じ。(国)とは異なる。
 (内) ちかく 雪
 (神1) ちかく 雪
 (統) ちかく 雪
 (統書) ちかく 雪
 (統内) ちかく 雪
 (統内) ちかく 雪

(神2) ちかく 雪

七十二番左 夕立(大)

(国) くもりきて過行庭の夕立 をしくれにつくる軒の松風

(大) 時雨 告る

(ノ) 曇り 時雨 まつかせ

(彰) 時雨 風

(明) くもりきて過行庭の夕立を時雨につくる軒の松風

(伊) 時雨 かせ

(島) ゆふ 時雨 かせ

(祐) ゆふたち 時雨 かせ

(書) 来

(三) 来

(静) 来

* (静) || (国)。

(内) 時雨 つもる かせ

* (内)は他本「つくる」を「つもる」と作る。

(神1) 時雨 かせ

(統) 曇り

* (統)は「つくる」の「く」に「もイ」と傍書。異本は(内)と同じ。

(統書) 曇り

* (統書)は「つくる」の「く」に「も」と傍書。異本は(内)と同文。

(統内) 曇り

(神2) 曇り

右 雪(国)(静)(神1)(三)(彰)

(国) 老か身よ冬はいつくもとこよ哉 頭の雪に雪を重て

(大) かなかしら かさね

(ノ) かなかしら かさね

(彰) 世 かしら かさね

(明) 老か身よ冬はいつくもとこよ哉 かしらの雪に雪をかさねて

* (明) は「冬は」の「は」は傍書

(伊) かしら かさね

(島) かなかしら かさね

* (島) は七二番右〜八二番左まで後半に移動している。これについてはいずれ再検討したい。

(祐) かなかしら かさね

(書) かなかしら かさね

(三) かしら かさね

(静) かしら かさね

(内) さなから かしら かさね

* (内) は他本「いつくも」とあるのを「さなから」と作る。独自本文。

(神1) さなから かなかしら かさね

* (神1) は「さなから」が(内)と同文。

(統) かなかしら かさね

* (統) は「いつくも」に「さなからイ」と傍書。異本は(内)と同じ。

(統書) かなかしら かさね

* (統書) は「いつくも」に「さなから」と傍書。異本は(内)と同文。

(統内) かなかしら かさね

(神2) かなかしら かさね

七十三番左 夏鳥(内)(ノ)

(国) なく蟬を時 雨にきけは枝 たはに雪をなひかす鶯 そむれゐる

(大) 鳴蟬の

(ノ) 鳴蟬の

* (ノ) は「鳴蟬の」の「の」が独自本文。書き損じか。

(彰) 啼せみ 鳴蟬を時 雨にきけは枝 たはに雪をなひかく鶯 そむれゐる

(明) 鳴蟬を時 雨にきけは枝 たはに雪をなひかく鶯 そむれゐる

(伊) 鳴 さい

(島) 鳴 さい

(祐) 鳴蟬 しくれ えた

(書) 鳴蟬 しくれ さい

* (書) は「鳴蟬の」の「の」にミセケチ「を」と傍書。

(三) しくれ

(静) しくれ

(内) せみ

(神1) 鳴蟬 しくれ

(統) 鳴蟬 しくれ

(統書) 鳴蟬 しくれ

(統内) 鳴蟬 しくれ

(神2) 鳴蟬 しくれ

右 月前時雨(内)

(国) 月に雲風にまかする空 はれてやすく世をふる村時 雨哉

(大) 晴て 晴て ちら ちら

(ノ) 晴て ちら ちら かな

(彰) 晴て ちら ちら かな

(明) 月に雲風にまかす空 はれてやすく世をふる村 時 雨哉
 (伊) かな
 (島) さら さら むら かな
 (祐) そら さら むら かな
 (書) 晴て かな
 (三) かな
 (静) しくれ
 (内) 晴て
 (神1) しくれ
 (続) むらしくれかな
 (続書) むらしくれかな
 (続内) むらしくれかな
 (神2) むらしくれかな

七十四番左 古郷郭公(島)・(祐)

(国) 故
 (大) 故
 (ノ) 故
 (彰) 故
 (明) 故
 (伊) 故
 (島) 故
 (祐) 故
 (書) 故
 (三) 故
 (静) 故

(内) 錦 たつ昔 の人や郭 公こゑのあやをふるふる郷 の空
 (神1) 故
 (続) 故
 (続書) 故
 (続内) 故
 (神2) 故
 (国) 錦 たつ昔 の人や郭 公こゑのあやをふるふる郷 の空
 * (国) は他本「あやおる」を「あやをる」と作る。仮名遣いでは「をる」が正しい。最終形態か。
 (大) むかし 時 鳥声 お古
 (ノ) にしき ほととぎす を さと
 * (ノ) は(大)と異なり、「あやをる」とする。仮名遣いとしては、「おる(織る)」でよい。
 (彰) にしき むかし 時 鳥 古 そら
 (明) にしきたつ昔 の人や時 鳥こゑのあやおる古郷 のそら
 (伊) にしき ほととぎす お古里 そら
 (島) にしき むかし ほととぎす お古 そら
 (祐) にしき むかし ほととぎす さと
 * (祐) は「こゑのあやをる」とする。(鳥)の「こゑのあやおる」を変えた。
 (書) にしき 時 鳥 を お そら
 (三) むかし 声 お
 (静) * (静) 〓 (国)。
 (内) ほととぎす 古
 (神1) ほととぎす 古
 (続) むかし 時 鳥声 お さと

(統書) むかし 時 鳥声 お さと
 (続内) むかし 時 鳥越え お 里 そら
 (神2) むかし 時 鳥声 お さと

右 寒闇霰(彰)

(国) みかきもつ心 の玉を圍 の戸に知 や霰 の竹を打 声
 (大) しる うつ
 (ノ) こゝろ としる うつ
 (彰) としる うつこゑ
 (明) みかきもつ心 の玉を圍 のとにしるや霰 の竹をうつ声
 (伊) としる うつ
 (島) こゝろ ねや としる うつ
 (祐) こゝろ ねや としる あられ うつこゑ
 (書) しる あられ うつこゑ
 (三) しる あられ うつ
 * (三) は「竹の」の「の」にミセケチ「を」と傍書。書き損じによるか。
 (静) あられ うつこゑ
 (内) しる うつこゑ
 (神1) あられ うつこゑ
 (統) しる うつこゑ
 (続書) しる
 (続内) り しる
 * (続内) は他本「もつ」を「もり」と作る。連想による書き損じか。
 (神2) しる

七十五番左 橘薫袖(大)(神1)

(国) かひなしや花 橘 を墨 のかに半 もてけつ袖 の上 かな
 (大) すみ 香 うへ哉
 (ノ) すみ 香 うへ
 (彰) すみ
 (明) かひなしや花 橘 をすみの香に半 もてけつ袖 の上 かな
 (伊) すみ 香 うへ哉
 (島) すみ 香 うへ
 (祐) はなたちはな すみ 香 そて うへ
 (書) すみ 香 うへ
 (三) うへ
 * (三) は「花橘の」の「の」にミセケチ「を」と傍書。書き損じによるか。
 (静) うへ
 (内) すみ
 (神1) すみ
 (続) 立ち花 すみ なかは
 (続書) たち花 すみ なかは
 * (続書) は「すし(し)」の「し」にミセケチ「み」。書き損じ故だらう。
 (続内) たち花 すみ なかは
 (神2) たち花 すみ なかは
 右 滝辺時雨(三)
 (国) 雪 ちらすなちの太山の滝なみを雹になして降 時 雨哉
 (大) ゆき み 浪 ふる
 (ノ) 浪 しくれかな
 (彰) み ふる かな
 (明) 雪 ちらすなちの太山の滝浪 を雹になして降 時 雨哉(三八ウ)

(伊) 浪
 (島) 〃
 (祐) 浪
 (書) 浪
 (三) 浪
 (静) 浪
 * (静) は、「電」にミセケチ「電」と傍書。同筆か。
 (内) 波
 (神1) 波
 (続) 波
 * (続)「霰」に「電イ」と傍書。異本は(内)他本と同じ。
 (続書) 波
 (神内) 波
 (神2) 波
 七十六番左 夜河篝
 (国) 川
 (大) 川
 (ノ) 川
 (彰) 川
 (明) 川
 (伊) 川
 (島) 川
 (祐) 川
 (書) 川
 (三) 川

(静) 川
 (内) 川
 (神1) 川
 (続) 川
 (続書) 川
 (神内) 川
 (神2) 川
 * (国) は他本「篝火」とするに、「かゝる火」と作る。それとも、これで「かゝり」と読むか。「浪」が「かゝる」と捉えたか。おそらくは本来は「かゝり火」のはず。
 (国) しまつ鳥うき世を浪の上 に見よ魚と水にかゝる火のかけ
 * (内) は「かゝり火」と作る。
 (内) 嶋津 見
 (神1) 嶋津 見
 (続) 嶋津 見
 (続書) 嶋津 見
 (三) 嶋津 見
 (彰) 嶋津 見
 (明) 嶋津 見
 (伊) 嶋津 見
 (島) 嶋津 見
 (祐) 嶋津 見
 (書) 嶋津 見
 (三) 嶋津 見
 (静) 嶋津 見
 (内) 嶋津 見
 (神1) 嶋津 見
 (続) 嶋津 見
 (続書) 嶋津 見

(続内) 嶋津 × 「」

* (続内) は(続)系他本「かゝり火」とするが、「り」が脱字。

(神2) 嶋津 り 陰

右 窓前竹雪「(彰)

(国)

* 他本と題が異なる。歌の内容からは「竹」があったほうがよい。最終形態か。

(大) ×

(ノ) ×

(彰) ×

(明) ×

(伊) ×

(島) ×

(祐) ×

(書) ×

(三)

(静)

* (静) は(国)と同じ。

(内) ×

(神1) ×

(続) ×

(続書) ×

(続内) ×

(神2) ×

(国) 灯

(大) 向ひ

にむかひてね ふる窓 近く又 かたふくや雪のむら竹

(ノ) ねむふる

* (ノ) は「ねむふる」の「む」の下に「本ノママ」と傍書。「む」が不要なことは分かっていたか。(ノ)が見ていた(大)系の本に問題があったか。

(彰) ちか

(明) 灯 にむかひてね ふる窓 ちかく又 かたふくや雪の村竹

(伊) ちか 村

(島) ちか また

(祐) ちか また たけ

(書) ちか

(三) ちか 村 村

(静) ちか 傾 村

(内) われ壁に ちか 傾 村

* (内) は他本「灯」を「われ壁」と作る。独自本文。

(神1) われ壁に ちか 村

* (神1) は(内)と同文。「われ壁」が独自本文。

(続) ちか

* (続) は「灯に」に「われ壁にイ」と傍書。異文は(内)と同じ。

(続書) ちか

(続内) ちか

(神2) ちか

七十七番左 雲外郭公「(国)(静)

(国)

(大)

(ノ)

* (ノ) 〓 (大)。

(彰) 時鳥
 (明) 時鳥
 (伊) 時鳥
 (島) 時鳥
 (祐) 時鳥
 (書) 時鳥
 (三) 時鳥
 (静) 時鳥
 (内) 時鳥
 (神1) 時鳥
 (続書) 時鳥
 (続内) 時鳥
 (神2) 時鳥
 (国) 湊 川雲 しく浪 の郭 公なかすはおなし鳩 の通 路
 * (国) は他本 (内) は「ともに」で独自だが、「ひとつ」を「おなし」と作る。
 最終形態か。
 (大) みなと河 時 鳥 ひとつ かよひち
 (ノ) ひとつ ひとつ ひとつ
 (彰) 時 鳥 ひとつ ひとつ
 (明) 湊 川雲 しく浪 の時 鳥なかすはひとつ鳩 のかよひち
 (伊) ひとつ ひとつ ひとつ
 (島) ひとつ ひとつ ひとつ
 (祐) くも なみ ひとつ ひとつ
 (書) 河 時 鳥 ひとつ ひとつ
 (三) 河 ひとつ ひとつ ひとつ
 (三) 河 ひとつ ひとつ ひとつ

(静) 河
 * (静) は「おなし」にミセケチ「ひとつい」と傍書。異文は(大)・(明)系と同じ。
 (内) 河 波 ともに かよひち
 * (内) は他本(大)(明)系「ひとつ」、(国)「おなし」とするの、「ともに」と作る。独自本文。
 (神1) 河 ひとつきす ともに鳴 かよひち
 * (神1) は他本「鳩」とあるところを「鳴」に作る。書き損じか。
 (続) 河 波 ひとつきす ひとつには通 路
 * (続) は「ひとつ」に「ともにイ」と傍書。異文は(内)と同じ。
 (続書) 河 波 ひとつきす ひとつには通 路
 * (続書) は「ひとつ」に「ともに」と傍書。異文は(内)と本文。
 (続内) 河 波 ひとつきす ひとつにはふかよひ路
 * (続内) は他本「にほの」とするの、「にほふ」と作る。連想による書き損じか。
 (神2) 河 波 ひとつきす ひとつには通 路
 * (神2) は「通」が「辺(へ)」に勘違いされることを嫌って、ミセケチ「通」と傍書。
 右 初冬時雨(神1)
 (国) 山風 やもみちの錦 冬のきてはつるゝ糸 を時 雨にそみる
 (大) 紅葉 にしき
 (ノ) 紅葉 にしき
 (彰) 紅葉 にしき
 * (彰) は「かつる」の「か」にミセケチ「は」と傍書。別筆か。
 (明) 山風 や紅葉の錦 冬のきてはつるゝ糸 を時 雨にそみる

魚のすむおもひこそあれしま津鳥いけるをはなつ浪そはかなき」

(三九才)

* (明) は「こそあれ」の下に「をしらて」が消されている。

(伊) こそあれ

(島) おもひこそあれ嶋

* ここでも (大) は (明) が削除する原案を採用している。(大) の本文の後、(明) ができたと考えてよい。

(祐) おもひこそあれ嶋

(書) 魚のすむ思ひをしらて嶋 つ鳥いけるをはなつ浪そはかなき

* (書) は (明) が書き改めた最初の案 (思ひをしらて) を採用。

(三) ×

* (三) 〓 (静) 〓 (国)。

(静) ×

* (静) は「思をしらて」の「をしらて」にミセケチ「こそあれ」と傍書。先祖返りか。(大)・(明) と同じ。

(内) 津 波 かなしき

* (内) は「おもひをしらて」と (国) と一致するものの、末句が「かなしき」と独自本文。

(神1) うを 津 かなしき

* (神1) は (内) と同文。結句は「かなしき」

(統) おもひ 島 津 波

* (統) は「はかなき」に「かなしきイ」と傍書。「おもひをしらて」と合わせ、異本は (内)・(国) と同じ。

(統書) おもひ 津 波

* (統書) は「はかなき」に「かなしき」と傍書。異文は (内) と同文。

(続内) おもひ 津 波

(伊) 紅葉

(島) 紅葉 にしき しくれ

(祐) 紅葉 にしき いと しくれ

(書) 紅葉 にしき

(三) かせ にしき 見

(静) かせ しくれ

(内) かせ 紅葉 見

(神1) 紅葉 にしき 見

(統) かせ 紅葉 見

(続書) かせ 紅葉 見

(続内) かせ 紅葉 見

(神2) かせ 紅葉 見

七十八番左 鵜河

(ノ) 川

(国) 魚のすむ思ひをしらて嶋 つ鳥いけるをはなつ浪そはかなき

* (国) は (明) が訂正後「おもひこそあれ」とあるのを、「思ひをしらて」と作る。これが最終形態だろう。

(大) 舟出する心にかに鵜かひもりくらきにも篝 火のかけ

(ノ) おもひこそあれ嶋 波

* (ノ) はここでは (大) 系の本文「舟てする」をとっていない。(ノ) が見た(大) 系の本文は「こそあれ」をもつ「静」系の本文によって校訂されていたと思われる。重要な用例である。

(彰) 舟出する心にかに鵜かひもりくらきにもかゝり火の影

(明) 舟てする心にかに鵜飼 守 くらきにも篝 火のかけ

* (明) はこれに線を引いて削除、新たな和歌を傍書。

(神2) おもひ 津 波

右庭上雪(ノ)(三)(彰)

(国) なれもみよ雪にかたふく庭の松つもれば人の老の姿 を

*他本「たれ(誰)」とするも、(国)は「なれ」とする。最終形態か。こちらの方が和歌としてよい。「なれ」と呼びかけになっているからだ。

(彰) たれ 見 すかた

(大) 誰

(ノ) 誰 見 も

* (ノ)は「雪も」と作る。「雪も」型は(三)・(神1)・(内)・(群)系。

(明) たれもみよ雪にかたふく庭の松つもれば人の老の姿 を

(伊) た

(島) た

(祐) た 見 すかた

(書) た すかた

(三) た も年 ふる庭 ■

* (三)は(神1)・(内)・(群)系と同じく、「雪も年ふる」と作る。■は判

読不能。他本は「の松」。

(静)

* (静)は「なれもみよ雪にかたふく」に傍線を引いて消し「たれもみよ雪にかたふく」と傍書。但し、「雪にとしふる」とも書き、「としふる」に傍線を引いて消す。つまり、ここに見られるあらゆる本文「なれもみよ」(国)、「たれもみよ」

(大・明)、「としふる」(内・統)がここに現れる。(静)は大・明系に戻る。

(内) 誰 見 も年 ふる庭 積れ

* (内)は「誰」として古本の形態を有しつつも、他本「雪にかたふく」とあるのに「雪も年ふる」と作る。

(神1) た 見 も年 ふる庭 すかた

* (神1)は「も年ふる」が(内)と同文。

(統) た もとしふる すかた

(統書) た もとしふる すかた

(続内) た もとしふる すかた

(神2) た もとしふる すかた

七十九番左 更衣(島)(祐)

(国) は衣 のうすきにかへて人ことに天にすむ世の夏はきにけり

(大) 羽 住

(ノ) 羽

(彰) 羽 住

(明) 羽衣 のうすきにかへて人ことに天に住 世の夏はきにけり

(伊) 羽 住

(島) ころも 住

(祐) 羽ころも 住

(書) 羽 来

(三) 羽 来

* (三)は「かへす」の「す」にミセケチ「て」と傍書。

(静) 羽 来

(内) 羽 来

(神1) 羽 来

(統) はころも 来

(統書) はころも 来

(続内) はころも 来

(神2) はころも 来

右 落葉風

(国) 遠近 やいつれをみるもあさま山冬は木 葉をはらふ嵐 に

(大)

(ノ)

(彰) こち のは

(明) 遠近 やいつれをみるもあさま山冬は木 葉をはらふ嵐 に

* (明) は「冬は」の「は」は傍書。

(伊)

(島)

(祐)

(書)

(三)

* (三) 〓 (静) 〓 (国)。

(静)

(内) に木のはみたれてしな路や山をあさまになす嵐哉

* (内) は二句め以降「あさま」嵐」はあるが、独自本文にしている。

(神1) に木 葉みたれて信 濃ちや山をあさまになす嵐かな

* (神1) は (内) と同文。

(統) 浅 間 木の葉 払 ぶ

* (統) は「遠近」以後「にこのはみたれて信濃路や山をあさまになすあらしかな」を傍書。異文は (内) と同じ。

(統書) 見 浅 間 木の葉 払 ぶ

* (統書) は「遠近」以後「にこのはみたれて信濃路や山をあさまになすあらしかな」と傍書。異文は (内) と同文。傍書「この」に「は」と傍書。この意味は

不明。

(続内) 見 浅 間 木の葉 払 ぶ

(神2) 見 浅 間 木の葉 払 ぶ

八十番 左 夜橋 (神1)

(国) 木 間よりもる影 匂 ぶ橋 に天津袖 する月の宮 人

(大) かけ

(ノ) のま にほふ

(彰) かけにほふ立 花

(明) 木のまよりもる影 匂 ぶ橋 に天津袖 する月の宮 人

(伊) の間

(島) のま かけにほふ

(祐) のま かけにほふたち花 そて

(書) のま にほふ みや

(三) かけ匂 × みや

(静) にほふ

(内) のま にほふ

(神1) のま かけ にほふ みやひと

(統) のま かけ みやひと

(統書) のま かけ みやひと

(神2) のま かけ みやひと

右 氷初結 (彰)

(国) 今朝みれば暁 をきの花棚 に 雫 もこほるあかの水かな

(大) お しづく 氷 なるあかの

* (大) は「暁」にミセケチ「あか」と傍書。

(ノ) お しづく氷る

* (ノ) は「暁おき」で(大)と同一表記。

(彰) 今朝みれば暁 をきの花棚 に しづくもこほるあかの水哉

(明) 今朝みれば暁 をきの花棚 に しづくもこほるあかの水哉 (三九ウ)

(伊) しつ 哉

(島) あかつき 「しづく

(祐) あかつき たな」 しづく

(書) しづく 哉

(三) しづく 哉

(静) お しづく 哉

* (静) は「うほる」の「う」にミセケチ「こ」。同筆か。

(内) 見 しづく氷る 哉

(神1) けさ見 お しづく 哉

(統) 起のたな 哉

(統書) 起のたな 哉

(続内) 起のたな 哉

(神2) 起のたな 哉

八十一番左 行路夏衣(大)

(国) かすまじる旅 たつ春の夏衣 けさはいかなる色にかふらん

* (国) は他本「かすましな」「かすまじな」「霞まじな」か)とするのに、「かすまじる」(かすまじる)「霞まじる」と作る。「かすまじな」は正徹にある。

正徹の語彙を取るのが正広だから、ここは「かすましな」としたいが、意味的に考えて、「いかなる色にかふらん」といっているのであるから、「かすまじる」の方がよい。最終形態か。新編国歌大観は「かすまじる」と読む。

(大) な ころも今朝

(ノ) な 今朝

(彰) な 今朝はいかなる色にかふらん

(明) かすましな旅 たつ春の夏衣 今朝はいかなる色にかふらん

(伊) な なつ 今朝

(島) なたひ なつころも今朝

(祐) なたひ 今朝

(書) な 今朝

(三) な 今朝

* (三) 〓 (静)。

(静) な 今朝

* (静) も「かすましな」とする。(国) 系の最終段階前の本文に拠るか。

(内) な 今朝

* (内) は夏に「別本」と傍書。

(神1) な 今朝

(統) な 今朝

(続書) な 今朝

(続内) な 今朝

(神2) な 今朝

右 時雨告冬(国)(静)(三)

(国) 世に吹 やなたの塩 風 冬 のきてさらにかまもなき時 雨哉

* (国) は他本「いとま」を「いかま」と作る。ただし、「と」を書こうとして間違った可能性がある。「いかま」では意味が通らないからである。誤写とみない。

(ノ) しほ と
 (彰) と
 (明) 世に吹 やなたのしほ風 冬 のきてさらにいとまちなき時 雨哉
 (伊) しほ と
 (島) しほ と
 (祐) しほかせ と
 (書) しほかせ と
 (三) しほかせ と
 (静) しほ と
 (内) しほかせ と
 (神1) ふく と
 (統) 灘 の ふゆ 来 と
 (統書) 灘 の ふゆ 来 と
 (続内) 灘 の ふゆ 来 と
 (神2) 灘 の ふゆ 来 と
 八十二番左 古郷郭公
 (国) と
 (大) と
 (ノ) と
 * (ノ) 〓 (大)。

(書) 故
 (三) と
 (内) と
 (神1) 難 波 と
 (内) 難 波 と
 (静) 難 波 と
 (三) 難 波 と
 (書) 難 波 と
 (祐) 難 波 と
 (島) 難 波 と
 (伊) 難 波 と
 (明) 難 波かたふるき都 にさくや此 声 を花なる郭 公哉
 (彰) 難 波 と
 (ノ) 難 波 と
 (大) 難 波 と
 (国) 難 波 と
 (神2) 故 と
 (続内) 故 と
 (統書) 故 と
 (統) 故 と
 (静) 故 と
 (神1) 故 と
 (内) 故 と
 (三) 故 と
 (書) 故 と
 (神2) 渦 ふる さく このこゑ 郭 公
 (続内) 渦 ふる さく このこゑ 郭 公
 (統書) 渦 ふる さく このこゑ 郭 公
 (統) 渦 ふる さく このこゑ 郭 公
 (神1) 難 波 ふる さく 此 こゑ 時 鳥 公哉
 (内) 難 波 ふる さく 此 こゑ 郭 公哉
 (静) 難 波 ふる さく 此 こゑ 郭 公哉
 (三) 難 波 ふる さく 此 こゑ 郭 公哉
 (書) 難 波 ふる さく 此 こゑ 郭 公哉
 (祐) 難 波 ふる さく 此 こゑ 郭 公哉
 (島) 難 波 ふる さく 此 こゑ 郭 公哉
 (伊) 難 波 ふる さく 此 こゑ 郭 公哉
 (明) 難 波 ふる さく 此 こゑ 郭 公哉
 (彰) 難 波 ふる さく 此 こゑ 郭 公哉
 (ノ) 難 波 ふる さく 此 こゑ 郭 公哉
 (大) 難 波 ふる さく 此 こゑ 郭 公哉
 (国) 難 波 ふる さく 此 こゑ 郭 公哉
 (神2) 渦 ふる さく このこゑ 郭 公

右 杣寒月」(神1)(彰)

(国) 吹みたす杣 山 風 はさえのほる月をとふさの木 間もるかけ

(大) かせ のま

(ノ) かせ のま

(彰) のま

(明) 吹みたす杣 山 風 はさえのほる月をとふさの木のまもるかけ

(伊) のま

(島) のま

(祐) そまやま のま

(書) のま

(三) のま

(静) のま

(内) かせ すみ のま

* (内) は他本「さえのほる」を「すみのほる」と作る。独自本文。

(神1) かせ すみ 影

* (神1) は(内)と同文。

(統) かせ すみ のま

* (統) は「冴」に「すみイ」と傍書。異文は(内)と同じ。

(統書) かせ すみ 影

* (統書) は「もる」の誤読をおそれてミセケチ「もる」と傍書。

(続内) かせ すみ 影

(神2) かせ すみ 影

八十三番左 江上五月雨」(内)

(国) 影

(大) ×

(ノ) ×

(彰) × ×

* (彰) の題は「五月雨」。

(明) ×

(伊) ×

(島) ×

(祐) ×

(書) ×

(三) × ×

* (三) 〓 (静) 〓 (国)。

(静) ×

* (静) は(国)と同じ。

(内) ×

(神1) ×

(統) ×

(統書) ×

(続内) ×

(神2) ×

(国) あさき江に捨 たる舟のすにゐるもうかふ道 ある五月雨の比

(大) 浅き すと

(ノ) すと

(彰) すと

(明) あさき江にすてたる船のすにゐるもうかふ道 ある五月雨のころ

(伊) すと 船 ころ

(四〇オ)

(島) すて 船を ころ
 *(島)は「船を」とする。誤写か。
 (祐) すて 船 みち ころ
 *(祐)は(島)を写しているが、「船を」は文脈上おかしいので、正しく「の」に変えたか。
 (書) すて みち ころ
 (三)
 *(三) || (国)、おそろく || (静)。
 (静) 五月雨×比
 *(静)は「五月雨比」で「の」が省略されている。おそろく脱字。
 (内) 船 時
 *(内)は他本「うかふ道」とあるのを「うかふ時」と作る。独自本文。
 (神1) すて 時
 *(神1)は(内)と同文。
 (統) 浅き 洲
 *(統)は「道」に「ときイ」と傍書。異文は(内)と同じ。
 (統書) 浅きの 洲
 *(統書)は「浅き江の」とつくる。「道」に「とき」と傍書。(内)と同文。
 (統内) 浅きの 洲
 (神2) 浅きの 洲
 右 駅路雪」(内)
 (国) ぶりつちる山 こそあらめす舟 も浪に雪こす須磨の浦 風
 (大) すま うらかせ
 (ノ) すま かせ
 (彰) すま うら

(明) ぶりつちる山 こそあらめ鈴 舟 も浪に雪こすすまの浦 かせ
 (伊) 鈴 すま
 (島) 鈴ふね すま うらかせ
 (祐) やま 鈴ふね すま うら
 (書) すま うら
 (三) すま うら
 (静) うらかせ
 (内) 船 波 すま かせ
 (神1) 降つ すま
 (統) 降つ 鈴 すま
 (統書) 降つ 鈴 すま
 (統内) 降つ 鈴 す磨 うら
 (神2) 降つ 錫 すま
 八十四番左 新樹露」(大)(島)(祐)(ノ)
 (国) 誰 かきる山 は緑 の雲の袖 さ月の玉 をかくる朝 つゆ
 (大) 露
 (ノ) 露
 *(ノ)は「誰」で(大)と同一表記。
 (彰) 露
 (明) 露
 (伊) 露
 (島) 露
 (祐) 露
 (書) 露
 (三) 露
 (書) 露
 (三) 露

(静) 露
 (内) 露
 (神1) 露
 (統) 露
 (統書) 露
 (続内) 露
 (神2) 露

あさ露
 露
 露
 露
 露
 露

五 五 五 五 五 五

右 古郷初冬「(三)(彰)」

(国) 故
 (大) 故
 (ノ) 故
 (彰) 故
 (明) 故
 (伊) 故
 (島) 故
 (祐) 故
 (書) 故
 (三) 故
 (静) 故
 (内) 故
 (神1) 故
 (統) 故
 (統書) 故
 (続内) 故
 (神2) 故

(国) 秋はいぬ誰 すめとてか古郷 を落葉にかこふ冬のきぬらん
 (大) たれ ふる は
 (ノ) たれ おち
 (彰) たれ おち
 (明) 秋はいぬたれすめとてか故郷 をおち葉にかこふ冬のきぬらん
 (伊) たれ 故 おち
 (島) たれ ふるさと おち
 (祐) たれ ふるさと おち
 (書) たれ ふるさと おち
 (三) * (三) || (国)。
 (静) たれ
 (内) たれ おち
 (神1) たれ
 (統) たれ 故
 (続書) たれ 故
 (続内) たれ 故
 (神2) たれ 故

八十五番左 嶋蛭「(神1)」
 (国) こと問 む闇 ちを照 す種 や是 蛭を浪にまきの嶋 人
 (大) 事 問 んやみ路 てらす これ
 (ノ) 〵は やみ路 たね これ
 (彰) 〵は やみ てらすたね これ
 (明) こと、はむやみちを照 すたねやこれ蛭を浪にまきの嶋 人
 (伊) 〵は やみ たね これ

(島) へは やみ てらすたね これ

(祐) へは やみ てらすたね これ

(書) へはむやみ路 てらす これ しま

* (書) は「てらせ」の「せ」にミセケチ「す」。同筆か。

(三) へはんやみ路

* (三) 〓 (静)。

(静) へはんやみ路

(内) へはん 路 たね これ 波

(神1) へは やみ路 てらすたね

(続) 事とは 路 てらすたね これ 波 槇 島

(続書) 事とは 路 てらすたね これ 波 槇

(続内) 事とは 路 てらすたね これ 波 槇

(神2) 事とは 路 てらすたね これ 波 槇

右 初冬雨

(国) 冬きぬと風 もならしの岡のへに 村雲 かけてふる時 雨かな

(大) 冬きぬと風 もならしの岡のへに 村雲 かけてふる時 雨かな

(ノ) 冬きぬと風 もならしの岡のへに 村雲 かけてふる時 雨かな

(彰) 冬きぬと風 もならしの岡のへに 村雲 かけてふる時 雨かな

(明) 冬きぬと風 もならしの岡のへに 村雲 かけて降 時 雨哉

(伊) 冬きぬと風 もならしの岡のへに 村雲 かけて降 哉

(島) 冬きぬと風 もならしの岡のへに 村雲 かけて降 哉

(祐) 冬きぬと風 もならしの岡のへに 村雲 かけて降 哉

(書) 冬きぬと風 もならしの岡のへに 村雲 かけて降 哉

(三) 冬きぬと風 もならしの岡のへに 村雲 かけて降 哉

(内) 冬きぬと風 もならしの岡のへに 村雲 かけて降 哉

(静) かせ

(内) かせ

(神1) かせ

(続) かせ

(続書) かせ

(続内) かせ

(神2) かせ

八十六番左 納涼」(国) (静)

(国) つくは山 吹こす風 に涼 しさも嶺 よりおつるみなの河 なみ

(大) つくは山 吹こす風 に涼 しさも嶺 よりおつるみなの河 なみ

* 「風に」ではなく (大) は「風も」とする。誤写か。意味的には「に」をよしとする。

(ノ) つくは山 吹こす風 に涼 しさも嶺 よりおつるみなの河 なみ

* (ノ) は (大) と異なり「風に」と作る。他本によるか。

(彰) 筑波

(明) つくは山 吹こす風 に涼 しさも嶺 よりおつるみなの河 なみ

(伊) つくは山 吹こす風 に涼 しさも嶺 よりおつるみなの河 なみ

(書) つくは山 吹こす風 に涼 しさも嶺 よりおつるみなの河 なみ

(島) つくは山 吹こす風 に涼 しさも嶺 よりおつるみなの河 なみ

* (伊) は (明) を写す際に「みなの河」を「みな月」と一旦写し、「月」をミセケチにして「の」を置く。

(祐) つくは山 吹こす風 に涼 しさも嶺 よりおつるみなの河 なみ

(書) つくは山 吹こす風 に涼 しさも嶺 よりおつるみなの河 なみ

(三) つくは山 吹こす風 に涼 しさも嶺 よりおつるみなの河 なみ

(静) つくは山 吹こす風 に涼 しさも嶺 よりおつるみなの河 なみ

(内) つくは山 吹こす風 に涼 しさも嶺 よりおつるみなの河 なみ

* (内) は (大) と同じく「風も」と作る。

(神1) もすしし 河浪

* (神1) は (内) と同文「風も」。

(統) 筑波 落る 河かな

* (統) は「河かな」の「かな」に「なみイ」と傍書。異文は (内) 他と同じ。

(統書) 筑波 落る 河かな

* (統書) は「河かな」の「かな」に「なみ」と傍書。(内) 他と同文。

(続内) 筑波 落る 河かな

(神2) 筑波 落る 河かな

右 神楽「彰」 (国) 雲のうへ 庭火によるの葦 うたへと秋の面影 もなし

* 他本「上の」とするも、(国) は「うへ」で終える。最終形態か。

(大) の おもかけ

(ノ) 上 の かけ

(彰) 上 の きりくす

(明) 雲の上 の庭火によるの葦 うたへと秋の面影 もなし

(伊) 上 の きりくす

(島) 上 の きりくす

(祐) 上 の きりくす

(書) 上 の おもかけ

(三) 上 庭 おもかけ

* (三) 〓 (静) 初期 〓 (国) 「雲の上庭火」とする本文。

(静) 上 庭 おもかけ

* (静) は、「うへ〇庭」の〇に「の」と傍書、「葦こたへ」の「こ」にミセケチ

「う」と傍書。同筆か。

(内) 上 の きりくす

(神1) 上 の きりくす

(統) 上 の おも

(統書) 上 の おも

(続内) 上 の おも

(神2) 上 の おも

八十七番 左 橋蛸「(大) (国) 天の川星の思ひの蛸 かも夏にもわたせかさきのはし

* 私家集大成は「里」と読んでいるが、「星」でよい。

(大) 天×河 × ほたる

(ノ) 天×河ほし おもひ 橋

(彰) 天×河ほし ほたる

(明) 天の川星の思ひの蛸 かも夏にもわたせかさきのはし

(伊) おもひ ほたる

(島) おもひ ほたる

(祐) ほし おもひ ほたる

(書) × おもひ

(三) 河 × ×

(静) × ×

* (静) は「星の光」の「光」にミセケチ「思」と傍書。同筆か。

(内) 河 ほたる

(神1) 河 ほし

(統) 河 おもひ

* (統) は「わたる」の「る」に「せい」と傍書。異文は (内) 他と同じ。

(統書) 河 おもひ

* (統書) (は「わたる」の「る」に「せ」と傍書。(内)と同文。

(統内) 河 おもひ る鶴 の

(神2) 河 おもひ る鶴 の

* (統) 系は本来「わたる」だと思われる。

右 網代 (神1) (三)

(国) 世をうちに誰 もあしるをもる身哉 思 ひのかゝり其 もかはらて

(大) たれ ×

(ノ) 宇治 たれ 網代 おもひ それ

(彰) たれ

(明) 世を宇治にたれも網代をもる身哉 思 ひの簞 それもかはらて

(伊) 宇治 たれ 網代 簞 それ

(島) 宇治 たれ 網代 い おもひ 簞 それ

* (島) がどうして「哉」を「い」としたのかは不明。哉の略体字か。

(祐) 宇治 たれ 網代 かなおもひ それ

* (島) を見た(祐)は文脈上、「い」を「かな」と直したか。

(書) 宇治 かなおもひ それ

(三) かな ×

(静) ×

* (静) は「无」にミセケチ「その」と傍書。おそらく「其」と書こうとして書き損じたものと思われる。同筆。

(内) 宇治 たれ 網代 それ

(神1) 宇治 たれ 網代 守身 それ

(統) 宇治 たれ 網代 守身 おもひの簞 それ

(統書) 宇治 たれ 網代 守身 おもひの それ

(統内) 宇治 たれ 網代 守身 おもひの それ

(神2) 宇治 たれ 網代 守身 おもひの それ

八十八番左 首夏 雲

(国) * (国) がどうして「朝」を抜かしたのかは不明。単なるミスか。

(大) 首夏朝雲

(ノ) 首夏朝雲

(彰) 首夏朝雲

(明) 首夏朝雲

(伊) 首夏朝雲

(島) 首夏朝雲

(祐) 首夏朝雲

(書) 首夏朝雲

(三) 首夏 雲

(静) 首夏朝雲

* (静) は「首夏雲」の「夏」「雲」の間に○をして「朝」を傍書。(大)・(ノ) 系を見て変えたか。

* (三) 〓 (静) 初期 〓 (国)。

(内) 首夏朝雲

(神1) 首夏朝雲

(統) 首夏朝雲

(統書) 首夏朝雲

(統内) 首夏朝雲

(神2) 首夏朝雲

(国) 夏きぬとあくれば誰 も衣 笠 や日影 に薄 き雲そかゝれる

* (国) は他本「薄く」とあるのを「薄き」と作る。「薄き雲」がかかっている

ところか、題から「朝」をはずしたか、不明。とまれ、これが最終形態らしい。

(大) 来 きぬ うすく

(ノ) たれ きぬ うすく

(彰) たれ きぬかさ うすく

(明) 夏きぬとあくればたれもきぬ笠 や日影 にうすく雲そかゝれる

(四一オ)

(伊) たれ きぬ うすく

(島) たれ きぬ かけ うすく

(祐) たれ きぬ かけ うすく

(書) たれ きぬ うすく

(三) うすき

* (三) || (静) 初期 || (国)。

(静) 是

* (静) は「うすき」の「き」にミセケチ「く」。同筆か。

(内) くれ

(神1) たれ うすく

(続) 明 たれ きぬかさ もうすく

* (続) は「かけも」の「も」に「にイ」、「かくれる」の「く」に「ゝイ」と傍

書。異文は(内)と同じ。

(続書) 明 たれ きぬかさ もうすく

* (続書) には傍書なし「かけも」。独自本文。(神2)も同文。

(続内) 明 たれ きぬかさ もうすく

* (続内) は末尾は「かくるゝ」と作る。書き損じもあるか。独自文とも言える。

(神2) 明 たれ きぬかさ もうすく

右 爐火似春 (彰)

(国) 春そこれたく火にあまたまとひして心 を花にひらく盞

(大) む さか月

(ノ) さかつき

(彰) さかつき

(明) 春そこれたく火にあまたまとひして心 を花にひらくさか月

(伊) さか月

(島) こゝろ さか月

(祐) こゝろ さかつき

(書) さか月

(三) 是

* (三) || (静)。

(静) 誰もまゐる 盞

(内) * (内) は他本「あまたまとひ」を「誰もまとゐ」と作る。独自本文。

(神1) たれも こゝろ 春

* (神1) は「たれも」は(内)と同文。但し、「春にひらく」という独自文が

ある。「春」は重複であり、書き損じか。

(続) 焼 火 円 ゐ さかつき

* (続) は「あまた」に「たれもイ」と傍書。異文は(内)と同じ。

(続書) 焼 火 円 ゐ さかつき

* (続書) は「円の」の「の」にミセケチ「ゐ」、書き損じ故だろう。

(続内) 焼 火 円 ゐ し さかつき

* (続内) は他本「ひらく」を「ひしく」と作る。書き損じか。

(神2) 焼 火 円 ゐ さかつき

八十九番左 河夕立 (島) (祐)

(伊) 川
 (国) 天の川水かさよいかに雲 の浪 かた野にあまる夕 立 の声
 (大) × み なみ片
 (ノ) × み なみ片
 (彰) × なみ
 (明) 天の川みかさよいかに雲 の浪 片 野にあまる夕 立 のこゑ
 (伊) み 片
 (島) み くものなみ片
 (祐) み くものなみ 片
 (書) × み 片
 (三) 河
 *(三) || (静) || (国)。
 (静) み なみ くだる
 (内) み くだる
 *(内) は他本「あまる」を「くだる」と作る。夕立故の改変か。独自本文。な
 お、「夕立+くだる」の表現は正徹・正広にある。
 (神1) み
 (統) 河 ゆふたち
 *(統) は「あまる」に「くだるイ」と傍書。異文は(内)と同じ。
 (統書) 河 に よ ゆふたち
 *(統書) は「に」「よ」を混同して書写した可能性が高い。
 (統内) 河 ゆふたち
 (神2) 河 ゆふたち
 (国) 冬の色は草にも木にもむなしくて時 雨ひとつの木枯 の声

* (国) 他本「ひとつに」を「ひとつの」と作る。最終形態か。
 (大) 一 に
 (ノ) に
 (彰) に からし
 (明) 冬の色は草にも木にもむなしくて時 雨ひとつに木枯 の声
 (伊) に
 (島) に からし
 (祐) に からし
 (書) に からし
 (三) しくれ の からし
 *(三) || (静) 初期 || (国)。
 (静) しくれ の からし
 *(静) は「ひとつの」の「の」にミセケチ「に」。同筆か。
 (内) からし
 (神1) に からし
 (統) に からし
 (統書) に からし
 (統内) に からし
 (神2) に からし
 九十番 左 夏草 (大) (神1)
 (国) 鹿 やよるさゆる花開 夕 月夜ゆすゑかくしてとます火のかけ
 *(国) は「さむる」とする。これは正徹にもある用例。最終形態か。たしかに
 「る」としか読めないが、この「る」の字母は「り」にも似た形である。
 (大) り さく 弓 末
 (ノ) さく

* (ノ) は「さゆる」の「る」に「り歟」と傍書。後で(大)系で校訂か。それとも書き損じに気づいたか。

(彰) 　　りさく　　弓すゑ

(明) 鹿　やよるさゆり花さく夕　月夜弓　末かくしてともす火のかけ

(伊) 　　りさく　　弓末

(書) 　　り　　弓末　　影

(島) 　　りさく　　弓末

(祐) 　　りさくゆふ　　弓末

(三) 　　り　　弓末

* (三) 〓 (静)。

(静) 　　り　　影

* (静) は(国)と事なり、「さゆり」と作る。

(内) 　　りさく　　弓末

(神1) 　　さく　　弓末　　影

* (神1) は「さゆる」と作る。

(統) 　　りさく　　へ

* (統) は他本「かくして」を「かへして」と作る。もともとの本文。

(統書) 　　りさく　　へ

(続内) 　　りさく　　へ

* (続内) は「ゆする」に「本ノマ、」と傍書。「ゆすゑ」ではないからだろう。

意味がとれない。

(神2) 　　りさく　　へ

右 冬雲 (国) (静) (三) (彰)

(国) 　　年の暮　　雲も世にふる足　　なみのさらにひまなき雪よ霰　　よ

(大) 　　

(ノ) 　　くれ　　あし　　あられ

(彰) 　　あし　　あられ

* (彰) は「雪に」の「に」にミセケチ「よ」と傍書。別筆。

(明) 年のくれ雲も世にふるあしなみのさらにひまなき雪よ霰　　よ

(伊) 　　あし　　あられ

(島) 　　くれ　　あられ

(祐) 　　くれ　　あられ

(書) 　　あし　　あられ

(三) 　　あし　　あられ

* (三) 〓 (国)、表記同一。

(静) 　　くれ　　隙な

(内) 　　あし　　隙な

(神1) 　　あし　　隙な

(統) 　　あし　　更に

(統書) 　　あし　　更に

(続内) 　　あし　　更に

(神2) 　　あし　　更に

九十一番左 家、納涼

(国) 　　山ふかくすまはや行　　て松　　か本　　谷にくたれは庭のまし水

(大) 　　もと　　もと

(ノ) 　　にきて　　もと

* (ノ) は他本「行て」とあるのに、「にきて」と作る。その前の「や」に「ほ」と傍書。これでよむと、「すまはほにきて」となる。どうしてこうなったかは分からない。(ノ)の底本から間違っていた可能性がある。なんとか意味が通ずる

ようにしたか。「ほ」は「帆」か、まさか。

(彰) ゆき

(明) 山ふかくすまはや行 て松 かもと谷にくたれは庭のまし水

(伊) もと

(島) まつかもと

(祐) まつかもと

(静) ゆき

(書) ゆき

(三) ヽ

* (三) は「すまはゝ行て」と作る。書き損じか。

(内) やり

* (内) は末句を「やり水」と作る。独自本文。

(神1) やり

* (神1) は(内)と同文(やり水)。

(続) もと

* (続) は「まし」に「やりイ」と傍書。異文は(内)と同じ。

(統書) もと

* (統書) は「まし」に「やり」と傍書。(内)と同文。

(続内) もと

(神2) もと

右 池水半水

(国) 水は水 水は水 けさみれはます田の池のます方 そなき

(大) みつ

(ノ) みつ こほり 見 かた

(彰) かた

(明) 水はみつ氷はこほり今朝みれはます田の池のますかたそなき

(伊) みつ こほり今朝 かた

(島) みつ こほり今朝 かた

(祐) みつ こほり 見 かた

(書) みつ こほり今朝

(三) *

(静) *

(内) みつ こほり今朝 かた

(神1) みつ 今朝見 かた

(続) 益 田

(統書) 益 田

(続内) 益 田

(神2) 見 益 田

九十二番左 行路夏衣 布 ひきや滝津岩 ほの苔 衣 かへぬも露の色 そ涼 しき

(国) 布 ひきや滝津岩 ほの苔 衣 かへぬも露の色 そ涼 しき

* (国) は他本「露の上」とするのを「露の色」と作る。最終形態か。

(大) 引 やつ 上 すゝ

(ノ) 引 やつ 上 すゝ

* (ノ) 〓 (大)。

(彰) 引 や 上 すゝ

(明) 布 引 や滝津岩 ほの苔 衣 かへぬも露の上 そ涼 しき

(伊) 引 上

(島) 引 上

(祐) 引 こけころも うへ

(書) こけころも

(三) うへ

(書) 引や ころも 上
 (三) ぬの すゝ
 *(三) 〓 (静) 初期 〓 (国)。
 (静) ぬの すゝ
 *(静) は「ねのひき」の「ね」にミセケチ「ぬ」、「色」にミセケチ「上」。「ぬ」は同筆だろうが、「上」別筆の可能性もあり。先祖返りの一つ。
 (内) 引 うへ すゝ
 (神1) 引 うへ
 (統) 引 いは うへ
 (統書) 引 いは うへ
 (統内) 引 いは うへ
 (神2) 引 いは うへ
 右 時雨清「(神1)(彰) 晴歟
 (国) 晴歟
 *(国) は、他本「晴」とするのに「清」とする。最終案か書き損じだろう。意味的には「晴」でよい。「晴」と「清」は字形が似ている。
 (大) 晴
 (ノ) 晴
 (彰) 晴
 (明) 晴
 (伊) 晴
 (島) 晴
 (祐) 晴
 (書) 晴
 (三) 晴

(静) 晴
 (内) 晴
 (神1) 晴
 (統) 晴
 (統書) 晴
 (統内) 晴
 (神2) 晴
 (国) 衣ほすさほ川はれて行 雲 の山はみかさを ふる時 雨哉
 (大) 河 時 雨
 (ノ) 棹 しくれかな
 (彰) 棹 しくれ
 (明) 衣ほす棹 川はれて行 雲 の山はみかさを 降 時 雨哉
 (伊) 棹 降 かな
 (島) 棹 ゆくくも 降 しくれかな
 *また丁合がずれている。次の丁は九五番右下句から始まる。
 (祐) 棹 ゆくくも しくれかな
 (書) 棹 しくれ
 (三) 河
 *(三) 〓 (静)、「河」以外は(国)も同一表記。
 (静) 河
 (内) 河
 (神1) 棹 かな
 (統) 河 しくれ
 (統書) 河 しくれ
 (統内) ××河 さふるむら時雨
 *(統内) は「さほ」がなく、他本「ふる」が「さふる」、他本「時雨」が「む

ら時雨」と独自本文。

(神2) 河 しくれ

九十三番左 納涼(大)(内)

(国) 滝殿 はさらに氷 室そ結 ふ手の氷 は袖 の上 の月かけ

(大) との 結 て うへ

(ノ) 結 て て こほり うへ 影

(彰) 滝殿 はさらに氷 室そ結 ての氷 は袖 の上 の月かけ

(明) 結 て こほり そて (四二オ)

(伊) 結 て こほり 上の袖の

(島) 結 て こほり 上の袖の

* (島) の異同は目移りによるものか。

(祐) 結 て こほり 上のそての

* (祐) は(島) をそのまま受けたもの。

(書) 結 て こほり うへ 影

(三) 結 て こほり うへ 影

(静) 結 て こほり うへ 影

(内) 結 て こほり うへ

(神1) 結 て こほり うへ

(統) 結 て こほり うへ

(統書) 結 て こほり うへ

(続内) 結 て こほり うへ

* (続内) は他本「氷は」が「、」となっている。本文の乱れ。

(神2) 結 て こほり うへ

右 竹雪(内)(三)

(国) よしや我 千世をこめたるよはひたに雪にかたふく庭の村 たけ

(大) われ 竹

(ノ) われ 竹

(彰) われ 竹

(明) よしやわれ千世をこめたるよはひたに雪にかたふく庭の村 竹

(伊) われ 竹

(島) われ 竹

(祐) われ 竹

(書) われ 竹

(三) われ 竹

* (三) 〓 (静)、「竹」以外は(国) も同一表記。

(静) われ 竹

(内) われ 竹

(神1) われ 竹

(統) わか 代 竹

(統書) わか 代 竹

(続内) わか 代 竹

(神2) わか 代 竹

* (統) 系は「わか」と作る。

九十四番左 雨後夏月(島)(祐)

(国) 心 有て涼 しくほる、村 雨 にまたれて出 る不知 夜の月

(大) ありす、 竹

* (大) のみ末尾が「月」が「空」となっている。校訂の一過程を示すか。当初の段階は「空」だったか。

空

(ノ) ありすゝ

* (ノ) は(大)と異なり、末尾は「月」。他本によるか。他本は下手したら

(静) 系の可能性がある。

(彰) あり あり

(明) 心 ありてすゝしくはるゝ村 雨 にまたれて出る不知 夜の月

* (明) 段階ではすでに「月」と改められたということか。(大)で「空」↓

(明) で「月」。

(伊) ありすゝ

(島) こゝろありすゝ

(祐) こゝろありすゝ

(書) ありすゝ

(三) あり

(静) あり

(内) あり

(神1) あり

(統) ありすゝ

* (統) は「みゆる」の「みゆ」に「いつい」と傍書。異文は(内)他と同じ。

(統書) あり 見ゆる十六夜

* (統書) は「みゆる」の「みゆ」に「いつ」と傍書。(内)と同文。

(統内) あり 見ゆる十六夜

(神2) あり 見ゆる十六夜

* (神1)・(内)・(統) 系は「十六夜」で一致。だが、(統) 系は「見ゆる」と

独自本文。

右 月前深雪」(彰)

(国) 降 つみてかたふく雪にふし待 もはやくそいつる庭の村 竹

(大)

(ノ) あり 出る むら

(彰) あり

(明) 降 つみてかたふく雪にふし待 もはやくそ出る庭の村 竹

(伊) 出る

(島) 出る

(祐) 出る むら

(書) まつ かつ かつ かつ

(三) あり 月

* (三) は「かたふく月」と作る。連想による書き損じか。

(静) あり 傾 かつ かつ かつ

* (静) は「无やく」の「无」にミセケチ「は」と傍書。同筆か。

(内) あり 傾 かつ かつ かつ

* (内) は「雪に」と読んだが、「に」がやや不安。

(神1) あり 出る

(統) あり 出る むら

(統書) あり 出る むら

(統内) あり 出る むら

(神2) あり 出る むら

九十五番左 鵜河篝」(国)(静)(神1)

(国) 鵜舟さすほかけにほへる梅津川花にはあらて闇 そあやなき

(大) う つ やみ

(ノ) やみ

(彰) やみ

(明) 鵜舟さすほかけにほへる梅津川花にはあらてやみそあやなき

(伊) やみ
 (島) やみ
 (祐) やみ
 (書) やみ
 (三) やみ
 *(三) || (静)
 (静) 影
 (内) 影
 (神1) 河
 (続) 河
 (続書) 河
 (続内) 河
 (神2) 河
 右 落葉
 (国) 落葉
 * (国) は他本のような「風」がない。熟慮の末に「風」を削ったか。正徹・松下集に「落葉風」という題はある。最終形態か。

(三) 落葉
 *(三) || (国)
 (静) 落葉風
 *(静) の本文はどの辺にあるか。(ノ)系によるか。但し、ミセケチ等はなし。
 (内) 落葉風
 (神1) 落葉風
 (続) 落葉風
 (続書) 落葉風
 (続内) 落葉風
 (神2) 落葉風
 (国) 山姫の心
 (大) 詞 のちる空 に うへなき風 のすかたをそみる
 (ノ) ことは
 (彰) ことは
 (明) 山姫の心 こと葉のちる空 に 上 なき風の姿 をそみる
 (伊) こと葉 上
 (島) こゝろこと葉 上
 (祐) こゝろこと葉 上
 (書) こと葉 上
 (三) そら
 (静) かせ
 *(静) || (国)
 (内) ことは 上
 (神1) こと葉 上
 (続) 言葉散空 見

(四二ウ)

(統書) 言葉散空
 (統内) 言葉散空
 (神2) 言葉散空
 見 見 見

九十六番左 閨扇(大)

(国) 妻 こかすこれも扇 そ空 たきの煙 に匂 ふ閨 の月かけ
 (大) つま
 (ノ) つま そら
 (彰) つま 影

(明) つまこかすこれも扇 そ空 たきの煙 に匂 ふ閨 の月かけ
 (伊) つま
 (島) つま そら けふり
 (祐) つま そら けふり にほふねや
 (書) 影
 (三) ××
 * (三) は「空」を脱字。

(内) つま も
 * (内) は他本「煙に」とあるに「けふりも」と作る。独自本文。
 (神1) つま もにほふねや
 * (神1) も「煙も」で(内)と同文。

(統) つま 是 もあふき 焼 の も ねや
 * (統) は「煙も」の「も」に「にイ」と傍書。異文は(大)・(明)・(国)と同じ。珍しく異文が(内)と一致しないというか、逆になっている。どうしてそうなったか、(内)の校訂を受け入れなかっただけだろ。

(統書) つま 是 もあふき 焼 の ねや
 「

(統内) つま 是 もあふき 焼 の ねや
 (神2) つま 是 もあふき 焼 の ねや
 * (統) 系はもともと「煙に」である。(統)の編者が早まって最初に(内)系の本文を入れたか。不明。

右 深雪(三)(彰)

(国) 雪たかき天 のかく山 出る日に身のしろ衣 いくへほすらん
 * 私家集大成は「ふかき」と読むが「たかき」でよい。

(大) のみ「ふかき」ではなく「たかき」となっている。
 (ノ) み ころも 重
 (彰) み ころも 重

(明) 雪たかき天 のかく山 出る日にみのしろ衣 いく重ほすらん
 (伊) 雪たかき天 のかく山 出る日にみのしろ衣 いく重ほすらん
 (島) あま いたつ み ころも 重
 (祐) あま やまいつ み ころも 重
 (書) いたつ 白 重
 (三) いたつ 白 重
 (静) いたつ 白 重
 (内) いたつ 白 重
 (神1) いたつ 白 重

(統) 高き
 (統書) 高き
 (統内) 高き
 (神2) 高き

九十七番 左 里蛭

- (国) とふ蛭 一 二 の影 ならば夜はに火をとるうちの里人
- (大) ほたる 一 二 の影 ならば夜はに火をとる宇治のさと人
- (ノ) 一 つ二 つ 半 宇治
- (彰) ひとつふたつ 半 宇治
- (明) とふ蛭 一 二 の影 ならば夜はに火をとる宇治のさと人
- (伊) ほたる かけ は 宇治 さと
- (島) ほたる かけ る 宇治 さと
- (三) ほたる かけ る 宇治 さと
- * (島) は (明) の「夜は」を「夜る」と読んだ。(明) の「は」は「る」に誤読されやすい書き方。
- (祐) ほたる かけ る 宇治 さと
- * (祐) は (島) をそのまま受けた。
- (書) 飛 蛭 かけ 宇治
- (三) かけ 宇治
- (静) ほたる かけ 宇治
- (内) ほたる かけ 宇治 さと
- (神1) 飛 ほたるひとつふたつ 半 宇治 さと
- (統) 飛 ほたるひとつふたつ 半 宇治
- (統書) 飛 ほたるひとつふたつ 半 宇治
- (統内) 飛 ほたるひとつふたつ 半 宇治
- * (統内) は他本「ふたつ」を「ふちつ」と作る。書き損じか。
- (神2) 飛 ほたるひとつふたつ 半 宇治
- 右 松雪「(神1)
- (国) さえくつてもるか上の木からしに雪の声 大きく庭の松 かけ
- (大) うへ 枯 に

- (ノ) さえくつてもるか上の木枯 に 雪のこゑ 大きく庭の松 かけ
- (彰) うへ 枯 に 雪のこゑ 大きく庭の松 かけ
- (明) さえくつてもるか上の木枯 に 雪のこゑ 大きく庭の松 かけ
- (伊) うへ 枯 に 雪のこゑ 大きく庭の松 かけ
- (島) うへ 枯 に 雪のこゑ 大きく庭の松 かけ
- (三) うへ 枯 に 雪のこゑ 大きく庭の松 かけ
- * (三) は「さえくつ」と作る。書き損じによるか。
- (静) 積る 枯 に 雪のこゑ 大きく庭の松 かけ
- (内) 積る 枯 に 雪のこゑ 大きく庭の松 かけ
- (神1) 積る 枯 に 雪のこゑ 大きく庭の松 かけ
- (統) 積る 枯 に 雪のこゑ 大きく庭の松 かけ
- (統書) 積る 枯 に 雪のこゑ 大きく庭の松 かけ
- (統内) 積る 枯 に 雪のこゑ 大きく庭の松 かけ
- (神2) 積る 枯 に 雪のこゑ 大きく庭の松 かけ
- 九十八番左 首夏
- (国) 難 波かた花 鳥 過て 蘆 垣 や誰 も隙 ある夏はきにけり
- (大) なには 鳥 過て 蘆 垣 や誰 も隙 ある夏はきにけり
- (ノ) すき あしかき たれ ひま
- (彰) なにはかた花 鳥 過て 蘆 垣 やたれもひまある夏はきにけり
- (明) すき あしかき たれ ひま
- (伊) なには 鳥 過て 蘆 垣 やたれもひまある夏はきにけり
- (島) なには 鳥 過て 蘆 垣 やたれもひまある夏はきにけり
- (四三才)

(神1)	なには	とりすき	かき	たれ	ひま	(神1)	来	桜	たね	村	哉									
(書)	あしかき	たれ	ひま			(続書)	来	桜	たね	村	哉									
(三)	とり					(続書)	来	桜	たね	村	哉									
* (三)	* (三)は「とり」以外、(静)・(国)と同一表記。																			
(静)	なには					(神2)	来	桜	たね	村	哉									
(内)	かき	たれ																		
(神1)	あしかき	たれ	ひま			九十九番左	夏月涼(大)	(島)	(祐)											
(続)	はなとり	あし	ひま	来		(国)	涼	しとて今	夜はならず風	もなし扇	をあくる月にまかせて									
(続書)	はなとり	あし	ひま	来		(大)	す、	こよひ												
(続内)	はなとり	あし	ひあま	来		(ノ)	す、	こよひ												
(神2)	はなとり	あし	ひま	来		(彰)	す、	こよひ												
						* (彰)	* (彰)は「ことよひ」の「こと」にミセケチ「こ」と傍書。別筆。													
右	初冬時雨(彰)					(明)	す、	しとてこよひはならず風	もなし扇	をあくる月にまかせて										
(国)	冬のきて柳	さくらをひろくへき花の種	まくむら時	雨かな		(伊)	す、	こよひ												
(大)	来て					(島)	す、	こよひ												
(ノ)						(祐)	す、	こよひ												
(彰)						(書)	す、	こよひ												
(明)	冬のきて柳	桜	をひろくへき花のたねまく村	時	雨哉	(三)	す、	かせ												
(伊)		桜				(静)	す、	かせ												
(島)						(内)		かせ												
(祐)		やなきさくら				(神1)		こよひ												
(書)		桜				(続)		今宵	あふき											
(三)						(続書)		今宵	あふき											
* (三)						(続内)		今宵	あふき											
* (三)						(神2)		今宵	あふき											
(静)																				
(内)	桜																			

右 河冬月〔(国)(静)(三)〕

(国) 雲よりひとつに落 てみなの川月は水 のちる嵐 かな

(大) 一 に 哉

(ノ) おち

(彰) をち

(明) 雲るよりひとつにおちてみなの川月は水 のちる嵐 哉

(伊) おち

(島) おち

(祐) おち

(書) おち

(三) 河

(静) 散

(内) おち

(神1) 居

(統) おち

(統書) おち

(統内) おち

(神2) おち

河

散

あらし

あらし

あらし

あらし

あらし

あらし

あらし

あらし

あらし

あらし

あらし

(伊) かき すむ程

(島) かき すむ みしか夜

(祐) たけ かき すむ みしか夜

(書) 我 すむ

(三) *

(三) 〓 (静) 〓 (国)。

(静)

(内) かき すむ程 や よ

* (内) は他本「すむほども」を「すむほどや」と作る。独自本文。

(神1) かき すむ や

* (神1) も (内) と同じく「すむほどや」と作る。

(統) すむ

* (統) は「ほども」の「も」に「や」と傍書。異文は (内) と同じ。

(統書) すむ

* (統書) は「すむほども」の「も」に「や」と傍書。(内) と同文。

(統内) 我 すむ

(神2) すむ

右 月前雪〔(彰)〕

(国) これそのつもれば人のそれならぬ老 その杜 も雪の月影

(大) の かけ

* (大) と (彰) のみ「杜の」とする。(内) では「杜も」であるからここで、

「杜の」に改め、その後(明) 段階で再び「杜も」に改めたか。

(ノ) 此

* (ノ) は「杜も」として、(大) と異なる。他本(静系)によるか。但し、ミ

セケチはない。

(明) はかなしな柴の庵に竹 のかきわかすむほとも短 夜の月

(彰) かき我 すむ みしかよ

(ノ) かき すすむ

(大) かき我 すむ程 みしか夜

(国) はかなしな柴の庵に竹 の垣 わか住 ほとも短 夜の月

百番 左 山家夏月〔(神1)〕

(彰) 此 此
 (明) これそ此 つもれば人のそれならぬ老 その杜 も雪の月影」(四三ウ)
 (伊) 此 此
 (島) 此 此
 (祐) 此 此
 * (祐) の「老そのもり雪」は「も」の脱字。仮名に開いた結果か。
 (書) 此 此
 (三) 是 此 森
 (静) 此 此
 (内) 此 此
 (神1) 此 此
 (統) 此 此
 (統書) 此 此
 (続内) 此 此
 (神2) 此 此
 百一番左 夏夜侍風
 (ノ) 風
 (彰) 風
 (書) 風
 (三) 風
 (静) 風
 (内) 月
 * (神1) (内) は「月」。
 (神1) 月
 (統) 風 (月イ)

* (統) は異本が(内)と同じ。
 (統書) 風(月が傍書)
 * (統書) は傍書が(内)と同文。
 (続内) 月
 (神2) 風
 (国) 秋はいつ月待 ほとどの袖にきてふけかしはしはし 荻の上風
 * (国) は他本「うし」を「いつ」、他本「ふけかししはし」を「ふけかしはし」と作る。書き損じではないか。おそらく「かし」を「しか」と写してしまっただのではないか。
 (大) うし へけかししはし
 (ノ) うし へけかししはし
 (彰) うし へけかししはし
 (明) 秋はうし月待 ほとどの袖にきてふけかししはし 荻の上風
 (伊) うし へけかししはし
 (島) うし へけかししはし
 (祐) うし へけかししはし
 (書) うし へけかししはし
 (三) 来 へけかししはし かせ
 * (三) は「程も」の「も」に「の」と傍書。書き損じか。(三)・(静)・(国)と(内)・(神1)は「秋はいつ」と作る。
 (静) まつ へけかししはし
 * (静) は「いつ」にミセケチ「うし」。先祖返りか。また、「ふけかししはし」となっているので、(静) の見た本は(国) ではない。但し、丁数・区切りは一致する。
 (内) まつ へけかししはし かせ
 * (内) は(国)と同様に「秋はいつ」と作るも、「へけかししはし」は他本と

同じ。

- (神1) まつ つけかししはし かせ
- (統) つけかししはし かせ
- (統書) うし つけかししはし かせ
- (続内) うし 来 つけかししはし かせ
- (神2) うし つけかししはし かせ
- * (統) 系は本来(大)(明)系本文。

右 雪埋山路(ノ)

- (国) うつめよし心 木 葉も道 たえて色なき法 の雪の山 風
- * (国) は、他本「比」を「法」と作る。「色なき」を受けての最終形態か。

- (大) 比
- (ノ) 比
- * (ノ) は「うつめよし」の「よ」に「か敷」と傍書。後筆か。あるいは(内)系を見たか。

- (彰) 比
- (明) うつめよし心 木 葉も道 たえて色なき比 の雪の山 かせ
- (伊) 比
- (島) こころ みち ころ かせ
- (祐) こころ みち ころ やま
- (書) 比
- (三) ころ
- * (三) 〓 (静)。
- (静) 比
- * (静) は「比」と作る。(国)とは異なる。
- (内) か の 比 かせ

- * (内) は他本「うつめよし」とあるのを「うつめかし」と作る。独自本文。
- (神1) 比 そ やま
- (統) に の 比 そ かせ
- * (統) は基本的には(内)に近いが、「うつめかし」「うつめにし」は誤読によるものだろうが、誤読しやすい語排列である。
- (統書) に の 比 そ かせ
- (続内) に の 比 そ
- * (統) 系「うつめにし」は「に」と「よ」が似た形による誤伝か。
- (神2) の 比 そ かせ
- * (神2) は「うつめよし」とも「うつめにし」ともとれる。(神1)・(内)・(統)系は「比そ」と作る。独自本文。

百二番左 雨中廬橋(大)

- (国) 春ならはきゆる水かさを雨にみん花 橋 の雪の山 川
- (大) み む
- (ノ) み 見
- (彰) み たちはな
- (明) 春ならはきゆるみかさを雨にみん花 橋 の雪の山 川
- (伊) み かは
- (島) み 〓
- (祐) み たちはな やまかは
- (書) む 河
- (三) 見 やま河
- (静) 見 河
- (内) 消 るみ 見 かせ
- * (内) は末句が他本「山川」であるのに「山かせ」と作る。独自本文。

- (内) 消 るみ 見 かせ
- * (内) は末句が他本「山川」であるのに「山かせ」と作る。独自本文。

(神1) 見 やま風

* (神1) は「やま風」と(内)と同文。

(統) 消る はな

(統書) 消る はな

(続内) 消る はな

(神2) 消る はな

河 かは
河

右 海辺初雪」(神1)(三)(彰)

(国) 難 波かた今朝こそつゝけしら浪のあわと遥 に嶺の初雪

* (国) の「あわ」(他本「あは」)は通常の歴史的仮名遣いでは正しい。

(大) なには は はるかに

(ノ) 白 は はるかに 峯 はつ

(彰) 白 波 は はるかに

(明) 難 波かた今朝こそつゝけ白 浪のあはと遥 に嶺のはつ雪

(伊) 白 は はるかに

(島) は はるかに はつ

(祐) なみ は はるかにみね はつ

(書) は はるかに

(三) なみ はるかに

* 「あわ」で(国) || (静) || (三)、および(神1)・(内)が同一表記。

(静) なには 白

* (静) は「あわ」として(国)に同じ。

(内) 白 淡 はるかに

* (内) の「淡と」の「と」に「ち也」と傍書

(神1) 白 淡 はるかに

(統) 白 波 は はるかに

* (統) は「あはと」の「と」に「ち敷」とする。「ち」とするのでは(内)と同じ。

(統書) 白 波 は はるかに しら

(続内) 白 波 は はるかに 白

(神2) 白 波 は はるかに しら

* (統) 系は本来「嶺のしら雪」。独自本文。

百三番左 暁郭公」(内)

(国) 庭 津鳥あくるをつくる空に又 をのか時 する郭 公かな

(大) 庭 津鳥あくるをつくる空に又 をのか時 する鳥

(ノ) 庭 津鳥あくるをつくる空に又 をのか時 する鳥

(彰) 庭 津鳥あくるをつくる空に又 をのか時 する郭 公哉

(明) 庭 津鳥あくるをつくる空に又 をのか時 する郭 公哉

(伊) 庭 津鳥あくるをつくる空に又 をのか時 する郭 公哉

(島) 庭 津鳥あくるをつくる空に又 をのか時 する郭 公哉

(祐) 庭 津鳥あくるをつくる空に又 をのか時 する郭 公哉

(書) 庭 津鳥あくるをつくる空に又 をのか時 する郭 公哉

(三) 庭 津鳥あくるをつくる空に又 をのか時 する郭 公哉

* 「哉」の表記以外、(三) || (静) || (国)、さらに、(神1)・(内)も。

(静) 庭 津鳥あくるをつくる空に又 をのか時 する郭 公哉

(内) 庭 津鳥あくるをつくる空に又 をのか時 する郭 公哉

(神1) 庭 津鳥あくるをつくる空に又 をのか時 する郭 公哉

(統) 庭 津鳥あくるをつくる空に又 をのか時 する郭 公哉

(統書) 庭 津鳥あくるをつくる空に又 をのか時 する郭 公哉

(続内) 庭 津鳥あくるをつくる空に又 をのか時 する郭 公哉

(神1) 庭 津鳥あくるをつくる空に又 をのか時 する郭 公哉

(神2) には 明 る 告 る 時 鳥

右 樵路雪 (内)

(国) 山 人そふゝきをかたる都 にはつもらぬ雪を柴 に残 して

(大)

(ノ)

(彰)

(明)

(伊)

(島)

(祐)

(書)

(三)

(静)

(内)

(神1)

(統)

(続)

(書)

(内)

(神2)

(統)

(続)

(内)

(神2)

(百四番左 鵜河) (国) (島) (祐) (静)

(国) 河

(大) 河

(ノ) 川

(彰) 河

(明) 川

(伊) 川

(島) 川

(祐) 川

(書) 河

(三) 河

(静) 河

(内) 河

(神1) 河

(統) 河

(続) 河

(書) 河

(内) 河

(神2) 河

(非明) 系はいずれも「河」。

(国) 嶋 つ鳥うちの網 代によるひをの思 ひを又 やかゝり火のかけ

(大) 嶋 つ鳥うちの網 代によるひをの思 ひを又 やかゝり火のかけ

(ノ) しまつ 宇治 あしろ

(彰) しまつ 宇治 おもひ

(明) しまつ 宇治 おもひ

(伊) しまつ 宇治 おもひ

(島) しまつ 宇治 おもひ

(祐) しま津 宇治 おもひ また 篝
 (書) 津 宇治 おもひ 篝 火影
 (三) 津
 * (三) 〓 (静) 〓 (国)。
 (静) 嶋 津 宇治 影
 (内) 嶋 津 宇治 影
 (神1) 津 宇治
 (統) 嶋 津 宇治 あしろ おもひ また 篝 影
 (統書) 嶋 津 宇治 あしろ おもひ また
 (続内) 嶋 津 宇治 あしろ おもひ また
 (神2) 嶋 津 宇治 あしろ おもひ また 影

右 神楽「彰」
 (国) あふ瀬あらは空 にやめてん天 川星 うたふよの雲の上 人
 (大) せ の ほし
 (ノ) の 夜
 (彰) せ の
 (明) あふ瀬あらは空 にやめてん天の川星 うたふ夜の雲の上 人
 (伊) の の 夜
 (島) の の 夜
 (祐) そら の の 夜
 (書) 逢 津 夜
 (三) せ 津
 * (三) は天津につくる。おそらく川を「つ」と読み、つ〓津と記したのでらう。
 (静) せ 夜
 (内) せ 夜

(神1) せ の 夜
 (統) せ の 河
 (統書) せ の 河
 (続内) せ の 河
 (神2) せ の 河
 百五番左 昌蒲「大」(神1)
 (静) 「補」にミセケチ「蒲」
 (国) かれくに見えつる夢のうき草 やかたしき捨るあやめなるらん
 (大) み すつ
 (ノ) み すつ
 (彰) み すつ
 (明) かれくに見えつる夢のうき草 やかたしきすつるあやめなるらん
 (伊) み すつ 成ら
 (島) み くさ すつ
 (祐) み くさ すつ
 (書) み すつ
 (三) 袖 にかたしきあやめなるらん
 * (三) の本文は、(内)系だが、「かたしき」が異なる。(静)は(内)系も見
 たか。(三)本文が形成される際に、(内)系本文が再び想起されたか。
 (静) 成ら
 * (静) は「かたしき」の「かた」に「袖に」を傍書して消す。「■る」(■判読
 できない)にミセケチ「捨る」と傍書。
 (内) 袖 にかたしきあやめなるらん
 * (内) は他本「かたしきすつる」を「袖にかたしき」と作る。独自本文。
 (神1) 袖 にかたしきあやめなるらん

* (神1) は「袖にかたしく」が (内) と同文。

(続) み 袖 にかたしくあやめなるらん

* (統) は (内) と同じ。

(続書) 袖 にかたしくあやめなるらん

(続内) み 袖 にかたしくあやめなるらん

(神2) 袖 にかたしくあやめなるらん

右 枯野朝風」(三)

(国) 風

(大) 嵐

(ノ) 風

* (ノ) は (大)・(明) 系だが、「風」に作る。(内) 系あたりを見て改めたか。

(彰) 嵐

(明) 嵐

(伊) 嵐

(島) 嵐

(祐) 嵐

(書) 嵐

(三) 嵐

(静) 嵐 嵐

* (静) は (大)・(明) と同じく「嵐」に作る。(ノ) 系の影響によるか。

(内) 風

* (国) と (内)・(統) 系は「風」に作る。意味的には「嵐」がよいか。

(神1) 風

(続) 風

(続書) 風

(続内) 風

(神2) 風

(国) 春日野のかの子に散て朝 あらし山はふるともみえぬ雪哉

(大) こ 嵐

(ノ) こ ちり 嵐

(彰) こ 嵐 見 かな

* (彰) は「ふもと」の「も」にミセケチ「る」と傍書。別筆。
春日野、かのこにちりて朝 嵐 山はふるともみえぬ雪哉 (四四ウ)

(明) こ ちり 嵐

(伊) こ ちり 嵐

(島) こ ちり 嵐

(祐) こ ちり 嵐

(書) こ ちり 嵐 見 かな

(三) こ ちり 嵐 見 かな

* (三) || (静) || (国)、但し、部分的に微小な差異はある。

(静) こ ちり ちり あさ嵐

(内) は ちり ちり 嵐 見 かな

* (神1)・(内) は「春日野は」と作る。独自本文。

(続) こ ちり ちり 嵐 見 かな

* (続) は「春日野の」の「の」に「はイ」と傍書。異文は (内) と同じ。

(続書) こ ちり ちり 嵐 見 かな

(続内) こ ちり ちり 嵐 見 かな

(神2) こ ちり ちり 嵐 見 かな

百六番左 余花

(国) 山桜 人の心 のあかしとて夏くはゝるに猶 匂 ふうらん
 (大) さくら にほ む
 (ノ) にほ
 * (ノ) は「あかし」が「ありし」とも読める。
 (彰) なをにほ
 (明) 山桜 人の心 のあかしとて夏くはゝるに猶 にほふうらん
 (伊) にほ む
 (島) さくら こゝろ にほ
 (祐) さくら こゝろ なをにほ
 (書) さくら こゝろ にほ
 (三) にほ む
 (静) さくら む
 (内) は や なを
 * (内) は、他本「心の」を「心は」、他本「あかしとて」を「あかしとや」と作る。独自本文。
 (神1) は や なをにほ
 * (神1) は「心は」「とや」で(内)と同文。
 (統) なを
 * (統) は「心の」の「の」に「はイ」、「あかしとて」の「て」に「やイ」と傍書。異文は(内)と同じ。
 (統書) なを
 * (統書) は「心の」の「の」に「は」と傍書。(内)と同文。但し、「あかしとて」には傍書はない。
 (神2) は なを む
 (続内) は なを む
 (神2) なを む

右 寒松嵐(彰)
 (国) 寒松嵐
 (大) 寒松嵐
 (ノ) 寒松嵐
 (彰) 寒松嵐
 (明) 寒松嵐
 (伊) 寒松嵐
 (島) 寒松嵐
 * (島) が「嵐」を「風」と読み損なったか。
 (祐) 寒松嵐
 * (祐) は(島) を受けただけ。
 (書) 寒松嵐
 (三) 寒松嵐
 * (三) はなぜ「風」にしたか。不明。
 (静) 寒松嵐
 (内) 寒松嵐
 * (内) は独自題。
 (神1) ×
 (統) 寒松嵐
 * (統) は、「嵐」に「イ无」と傍書。異文は(内)と同じ。
 (統書) 「イ无」と傍書
 (神2)
 * (統) 系は本来「寒松嵐」
 (国) 山かせの松 のははらふ朝霜 に村 くくもる岡 のへのさと
 (大) あさ むら 里

(ノ) 風 葉 むら 里
 (彰) 風 葉 むら
 (明) 山風 の松 の葉はらふ朝 霜 にむらくくもる岡 のへのさと
 (伊) 風 葉 むら
 (島) 風 葉 むら
 (祐) 風 まつ 葉 あさしも むら をか
 (書) 風 葉 むら
 (三) 葉 野 里
 (静) 葉 野 郷 里
 (内) 葉 野 辺の宿
 * (内) は「くもる」の「も」に「別本」?、他本「のへのさと」とあるが「野辺の宿」と作る。独自本文。
 (神1) 風 葉 宿
 * (神1) も「宿」として(内)と同文。
 (統) 葉 むら 野辺 里
 * (統) は文末「里」とし、(内)とは異なる。また、異本注記もない。
 (統書) 葉 むら 野辺 里
 (統内) 葉 むら 野辺 里
 (神2) 葉 むら 野辺 里
 百七番 左 初郭公「(ノ) 郭 公たれまつとてかかへりくるいなはの山 の去年の古 こそ
 (大) 待×と こそ 声
 (ノ) ほととぎす誰 ま 帰り こそ
 (彰) 時 鳥 待×と 帰 ×く ふる
 (明) ほととぎすたれまつとてか帰 りくるいなはの山 のこそ 古 こそゑ

(伊) ほととぎす 帰り こそ 声
 (島) ほととぎす こそ ふる
 (祐) ほととぎす 帰り 稲葉 やま こそ ふる
 (書) ほととぎす 帰り 稲葉 こそ こそ ふる
 (三) 時 鳥 帰り 稲葉 こそ こそ ふる
 * (三) || (静) || (国) は(三)の「時鳥」以外同一表記。
 (内) 誰 待×と 帰り こそ ふる
 (神1) ほととぎす誰 待×と 帰り こそ ふる
 (統) ほととぎす 待×と 帰り こそ ふる声
 (統書) ほととぎす 待×と 帰り こそ ふる声
 (統内) ほととぎす 待×と 帰り こそ ふる声
 (神2) ほととぎす 待×と 帰り こそ ふる声
 右 海辺雪「(神1) わたの原 みぬもろこしも浪にきて面 影 うかふ雪の遠 山
 (国) わたの原 みぬもろこしも浪にきて面 影 うかふ雪の遠 山
 (大) 見 こそ
 (ノ) * (ノ) || (大) 和 田 見 こそ
 (彰) 和 田 見 こそ
 (明) わたのはらみぬもろこしも浪にきて面 影 うかふ雪の遠 山
 (伊) はら かけ やま
 (島) はら かけ こそ
 (祐) はら おもかけ とをやま
 (書) おもかけ かけ
 (三) かけ かけ

* (三) || (静) || (国)、但し、(三)は「面かけ」と表記。

(静)

* (静)は「もみこし」の「み」にミセケチ「ろ」と傍書。同筆か。

(内)

とを

(神1)

(続)

和田

おもかけ

(続書)

和田

おもかけ

(続内)

和田

おも

(神2)

和田

おもかけ

百八番左 夕早苗(大)

(国)

にきわへるいなはの雲の夕 煙 又 弥 つき にとるさなへかな

* (国)は「にきわへる」と作るが、通常の歴史的仮名遣いでは、他本「にきはへる」が正しい。書き損じか。

(大)

は

いや

早苗哉

(ノ)

は

いや

取早苗

(彰)

は

けふり いや

早苗哉

(明)

にきはへるいな葉の雲の夕 煙 又 いやつき に取 早苗哉

(伊)

は

煙 いや

早苗

(島)

は

葉 ゆふけふりまたいや

早苗

(祐)

は

葉 ゆふけふりまたいや

早苗

(書)

は

葉 繼

早苗

(三)

は

かに 早苗哉

* (三)は「弥つきかに」と作る。書き損じによるか。字余り。

(静)

は

哉

* (静)は「にきはへる」と作る。

(内)

は

いや繼 に

(神1)

は

いや繼 に取

(続)

は

いや

(続書)

は

いや

(続内)

は

いや

(神2)

は

いや

右 河水(国)(静)(三)(彰)

(祐) 川

(国) みな川の川雲の浪 まの月なから嶺 より四方に敷 氷 りかな

* (国)は「氷」の次に「り」のごとき字が読める。

(大)

は

峯

しく ×哉

(ノ)

は

峯

しく ×

(彰)

は

峯

しく ×

(明)

みな川の川雲の浪 まの月なから嶺 より四方にしく氷 ×哉

(伊)

は

みね

しく

(島)

は

みね

しく

(祐)

は

なみ

みね

しくこほり

(書)

は

なみ

みね

しく

(三)

は

間

みね

しく ×

(静)

は

なみ

みね

しく ×哉

(内)

は

なみ

みね

しく ×哉

(神1)

は

なみ

みね

しく ×哉

(続)

は

なみ

みね

しく ×哉

(続書)

は

なみ

みね

しく ×哉

* (統書) は「みねより」の「よ」が読みにくいためか、ミセケチして「よ」と傍書。書き損じの類か。

(統内) 河 みね よも しく ×哉
 (神2) 河 みね よも しく ×哉

百九番左 卯花初開 (島) (祐)

(国) つもれなを吹 こす風 も寒 からす卯 花山 の嶺 のはつ雪

(大) 猶 ふき 卯の花 峯 初

(ノ) 猶 かせ さむ みね 初

(彰) つもれ猶 吹 こす風 もさむからす卯 花山 のみねの初 雪

(明) 猶 さむ うの みね 初

(伊) 猶 さむ みね 初

(島) 猶 さむ みね 初

(祐) 猶 さむ はなやま みね 初

(書) 猶 かせ 初

* (書) は「風に」の「に」にミセケチ「も」と傍書

(三) かせ 初

* (三) は「卯花山に」と作る。書き損じか。

(静) 積 れ かせ ての 峯 初

(内) 積 れ かせ ての 峯 初

* (内) は他本「さむからす」を「さむからて」と作る。独自本文。

(神1) 猶 さむ 初

(統) 猶 うの みね 初

* (統) は「さむからす」の「す」に「てイ」と傍書。異文は(内)と同じ。

(続書) 猶 うの みね 初

* (続書) は「寒からす」の「す」に「て」と傍書。(内)と同文。

(続内) 猶 うの みね
 (神2) 猶 うの みね 初

右 遠山初雪

(国) 霞たち霧 のへたつる山を今朝うつみあらはす嶺 のしら雪

* (国) は他本「へたてし」を(内)と同様に「へたつる」とする。最終形態か。

(大) たつ てし けさ埋 あ 白

(ノ) 立霧 てし 埋 あ 峯 白

(彰) 立霧 てし 埋 あ 峯 白

(明) 霞立霧 のへたてし山を今朝埋 あらはず嶺 の白雪

(伊) 立 てし 埋 白 ゆき

(島) 立 てし 埋 白 ゆき

(祐) きり てしやま 埋 みね ゆき

(書) 立霧 埋 みね ゆき

(三) 立霧 埋 みね ゆき

* (三) || (静) 初期 || (国) || (神1) || (内) || (統) 系。

(静) 白

* (静) は「へたつる」の「つる」にミセケチ「てし」で(大)・(明)系と同じ。

先祖返りか。「うつみ」の「うつ」にミセケチ「うつ」。これはどうしたのか。

「うつ」を「かへ」と読んだのか。ミセケチの字はおそらく別筆。校訂の結果か。

(内) 埋 白

* (内) は「へたつる」で(国)と同じ。

(神1) 立 埋 あ

* (神1) は「立」のしたに小さく「ち」と傍書。

(続) 白

(続書) 白

(続内)
(神2)

白

百十番左 水風涼(神1)

(国) さえく〜て冬の嵐 そ袖 に吹 結 ふひみつとならず扇 に

* (国) は私家集大成では、「みつ」とあるものが、原文では「ひみつ」と作る。

「結ひみつ」と書こうとして「結ふひみつ」となってしまったか。「ひみつ」は

「氷水(ひみづ)」のこと。氷水は正徹・正広語彙の一つ。

(大) あらし ふき結 ひ水

(ノ) * (ノ) は「結ひ水」の「ひ」と「水」の間に「し敷」と傍書。後筆だろうが、

誤読している。また、末尾が「と」と作る。書き損じか。

(彰) ふくむすひし水 と

* (彰) は独自本文。「氷水(ひみづ)」が理解できなかったからだろう。

(明) さえく〜て冬の嵐 そ袖 に吹 結 ひ水 とならずあふきに

(伊) 結 ひ水 あふき

(島) あらし 結ひ し水 あふき

* (島) の「結ひし」は意味的に考えて付加したか。但し、誤解している。

(祐) あらし そて 結ひ し水 あふき

* (祐) は(島)をそのまま受けた。

(書) むすふひ水

(三) あらし

* (三) Ⅱ (静) 初期Ⅱ (国)、本文的には、(大)・(明) 系も同じ。

(静)

* (静) は「ふひみつ」を墨で消し、「氷」と傍書。(国) そのものの本文を却け、

(内) 系本文を見て、校訂したか。

(内) 風 こそ 風 こそ つけむすふ氷室と

* (内) は他本「嵐そ」を「風こそ」、他本「吹結ひみつと」を「つけむすふ氷

室と」と作る。独自本文。

(神1) むすふ氷室と

* (神1) は「むすふ氷室」は(内)と同文。

(続) 風 こそ つけむすふ氷と

* (続) は基本的に(内)と同じだが、(内)が「氷室」とするとところを「ひ水」

に作る。

(続書) ふくむすふ氷と

* (続書) は「ふく」の「く」に「け」と傍書。(内)と同文。但し、「氷室」と

はなっていない。

(続内) ふくむすふし水と

* (続内) は続系「ひ水」を「し水」と作る。意味を考えて書き換えたか。

(神2) ふくむすふ氷と

右 暮山雪(彰)

(国) 埋 をく山こそあらめ空晴 て夕暮 かくす四方の雪かな

(大) うつみ

(ノ) うつみ はれ

(彰) うつみ よも

(明) うつみをく山こそあらめ空はれて夕暮 かくす四方の雪哉(四五ウ)

(伊) うつみ はれ 哉

(島) うつみ くれ

(祐) うつみ くれ

(書) はれ くれ

(三) くれ よも 哉

* (三) 〓 (静) 〓 (国) 〓 (内) は「埋をく」と表記。

(静) 〓 (三) 〓 (静) 〓 (国) 〓 (内) は「埋をく」と表記。

(内) 〓 (三) 〓 (静) 〓 (国) 〓 (内) は「埋をく」と表記。

(神1) 〓 (三) 〓 (静) 〓 (国) 〓 (内) は「埋をく」と表記。

(統) 〓 (三) 〓 (静) 〓 (国) 〓 (内) は「埋をく」と表記。

* (統) は、文末は他本と異なり、「山哉」となっている。何故か。「山こそあらめ」と前にも出ているので、明らかにおかしい。

(統書) 〓 (三) 〓 (静) 〓 (国) 〓 (内) は「埋をく」と表記。

(続内) 〓 (三) 〓 (静) 〓 (国) 〓 (内) は「埋をく」と表記。

(神2) 〓 (三) 〓 (静) 〓 (国) 〓 (内) は「埋をく」と表記。

* (統) 系は末句「山哉」となっている。おかしいが。

百十一番左 郭公一声 (大)

(国) 唐崎 の松もややとる郭 公こきゆく舟 の跡 の一声

* (国) は「やとる」とする。最終形態か。但し、「とる」の「る」は「り」に読めないことはない。

(大) から 〓 (三) 〓 (静) 〓 (国) 〓 (内) は「埋をく」と表記。

(ノ) から 〓 (三) 〓 (静) 〓 (国) 〓 (内) は「埋をく」と表記。

(彰) から 〓 (三) 〓 (静) 〓 (国) 〓 (内) は「埋をく」と表記。

* (彰) は他本「松もや」を「松にや」と読んだので、他本「やとり」を「やとる」としたのだろう。

(明) から崎 の松もややとり郭 公こき行 舟 のあとのこゑ

(伊) から 〓 (三) 〓 (静) 〓 (国) 〓 (内) は「埋をく」と表記。

(島) から 〓 (三) 〓 (静) 〓 (国) 〓 (内) は「埋をく」と表記。

(祐) からさき 〓 (三) 〓 (静) 〓 (国) 〓 (内) は「埋をく」と表記。

(書) から 〓 (三) 〓 (静) 〓 (国) 〓 (内) は「埋をく」と表記。

(三) から 〓 (三) 〓 (静) 〓 (国) 〓 (内) は「埋をく」と表記。

* (三) 〓 (静) 〓 (国) 〓 (内) は「埋をく」と表記。

(内) 〓 (三) 〓 (静) 〓 (国) 〓 (内) は「埋をく」と表記。

(神1) 〓 (三) 〓 (静) 〓 (国) 〓 (内) は「埋をく」と表記。

(統) 〓 (三) 〓 (静) 〓 (国) 〓 (内) は「埋をく」と表記。

* (内)・(統) 系を見たか。見たら、ミセケチにするので、誤読の可能性大か。

(内) からさき 〓 (三) 〓 (静) 〓 (国) 〓 (内) は「埋をく」と表記。

(神1) から 〓 (三) 〓 (静) 〓 (国) 〓 (内) は「埋をく」と表記。

(続) 〓 (三) 〓 (静) 〓 (国) 〓 (内) は「埋をく」と表記。

(続書) 〓 (三) 〓 (静) 〓 (国) 〓 (内) は「埋をく」と表記。

(続内) 〓 (三) 〓 (静) 〓 (国) 〓 (内) は「埋をく」と表記。

(神2) 〓 (三) 〓 (静) 〓 (国) 〓 (内) は「埋をく」と表記。

右 雪中爐火 (二三)

(国) さえあかす夜半ともしらすあたゝかに松をは雪の埋 火のもと

(大) は 〓 (三) 〓 (静) 〓 (国) 〓 (内) は「埋をく」と表記。

(ノ) は 〓 (三) 〓 (静) 〓 (国) 〓 (内) は「埋をく」と表記。

* (ノ) は「夜半とは」と作る。書き損じか。

* (彰) は「夜半の」の「の」にミセケチ「と」と傍書。別筆か。

(明) さえあかす夜はともしらすあたゝかに松をは雪の埋 火の本

(伊) は 〓 (三) 〓 (静) 〓 (国) 〓 (内) は「埋をく」と表記。

* (伊) は「あは」をミセケチ「たゝ」。

(島) は 〓 (三) 〓 (静) 〓 (国) 〓 (内) は「埋をく」と表記。

(祐) は 〓 (三) 〓 (静) 〓 (国) 〓 (内) は「埋をく」と表記。

(書) 本

(三) は うつみ 本

* (三) || (静)。

(静) は 本

* (静) は「本(本)」にミセケチ「本」と傍書。別筆。但し、その前に「声」を消して、「本」を書いた形跡あり。そこで改めて「本」を傍書したか。

(内)

* (内) || (国)。

(神1) へ は

(続) 冴 あ

(続書) 冴 あ

* (続書) は「冴」の字がはっきりしないので、ミセケチして「冴」と傍書。

(続内) 冴 あ た

(神2) 冴 あ

百十二番左 鶺鴒河籜 誰 も身をたため後 せをうかひ舟くらきに入 もかゝり火の影

(大) 籜 鶺鴒 籜 火 かけ

(ノ) 鶺鴒 籜 火 かけ

(彰) たれ 鶺鴒 籜 火 かけ

(明) たれも身をたため後 せをうかひ船くらきに入 もかゝり火の影

(伊) たれ 船 かけ

(島) たれ 船 かけ

(祐) たれ 船 かけ

(書) 籜 火 かけ

(三) 籜 火 かけ

(静) 瀬 船 いる 籜 火 かけ

* (静) || (国)。

(内) 瀬 船 いる 籜 火 かけ

(神1) 瀬 船 いる 籜 火 かけ

(続) たれ のち 暗き

(続書) たれ のち 暗き

(続内) たれ のち 暗き

(神2) たれ のち 暗き

* (神2) は「のちせも」の「も」にミセケチ「を」、「暗」にミセケチ「暗」と傍書。書き損じだろう。

右 早梅開「(神1) (ノ) (彰)

(国) 開 つくせ一 の花に初 春 を冬よりひく天 かしかな

* (国) は他本「つくけ」を「つくせ」、「ひらく」を「ひく」と作る。最終形態か。だが、意味的にはどうみても「ひらく」である。私家集大成は「ひく」と読んだが、(国)本は「ら」と読めないわけではない。

(大) さきつくけ ひらく 下 哉

(ノ) さきつくけ ひらく 下

(彰) 咲 天 ×下

(明) さきつくけ一 の花に初 春 を冬よりひらく天 下 哉

(伊) さきつくけ ひらく 下

(島) さきつくけ はつはる ひらく 下

(祐) さきつくけ はつはる ひらく 下

(書) さきつくけ ひらく ×下

(三) ひらく 下

* (三) || (静)。

(静) ひらく 下

* (静) は「つくせ」の「くせ」にミセケチ「つけ」と傍書。別筆か。だが、「ひく」は「ひらく」と作る。但し、「ひく」と「ひらく」は微妙。(静)も「ひく」と読めないわけではない。

(内) つつけ ひらくよもの梅やま

* (内) は末句が「よもの梅やま」は独自本文。

(神1) さきつゝけ ひらく四方の梅山

* (神1) 末句「四方の梅山」は(内)と同文。

(統) さきつゝけひとつ ひらくあめ 哉

* (統) は「あめかした」に「よもの梅山イ」と傍書。異文は(内)と同じ。

(続書) さきつゝけひとつ ひらくあめ 哉

* (続書) は末句「あめかしたかな」に「よもの梅山」と傍書。(内)と同文。

(続内) さきつゝけひとつ ひらくあめ 哉

(神2) さきつゝけひとつ ひらくあめ 哉

百十三番左 水上蛭(国)(内)(静)

(国) うき草にはたるなかるゝうかひ舟ともすかゝりに庭の遣 水

(大) 蛭 鶺鴒 箒

(ノ) 浮草 鶺鴒 箒

(彰) うき草にはたるなかるゝ鶺鴒かひ舟ともす 箒

(明) うき草にはたるなかるゝ鶺鴒かひ舟ともす 箒 に庭の遣 水(四六オ)

(伊) 鶺鴒 箒

(島) 鶺鴒 箒

(祐) 蛭 鶺鴒 箒

(書) 蛭 鶺鴒 箒

(三) 蛭 鶺鴒 箒

* (三) || (静) || (国)、(三) は「かゝり」の「かゝ」にミセケチ「かゝ」と傍書。そうと読みにくい故だろう。

(内) 蛭 鶺鴒 箒

(神1) 鶺鴒 舟 箒

(統) 鶺鴒 舟 箒

(続書) 鶺鴒 舟 箒

(続内) 鶺鴒 舟 箒

(神2) 鶺鴒 舟 箒

右 夕木枯(内) 暮 松にやとりをたのみきて我 名をかくす冬の山 かせ

(国) 夕まくれ松にやとりをたのみきて我 名をかくす冬の山 かせ

(大) 暮 憑 風

(ノ) 暮 憑 風

(彰) 暮 松にやとりをたのみきて我 名をかくす冬の山 風

(明) 夕ま暮 松にやとりをたのみきて我 名をかくす冬の山 風

(伊) 暮 松にやとりをたのみきて我 名をかくす冬の山 風

(島) 暮 松にやとりをたのみきて我 名をかくす冬の山 風

(祐) 暮 松にやとりをたのみきて我 名をかくす冬の山 風

(書) 暮 松にやとりをたのみきて我 名をかくす冬の山 風

(三) 暮 松にやとりをたのみきて我 名をかくす冬の山 風

(静) 暮 松にやとりをたのみきて我 名をかくす冬の山 風

* (静) || (国)。 暮 松にやとりをたのみきて我 名をかくす冬の山 風

(内) 暮 松にやとりをたのみきて我 名をかくす冬の山 風

(神1) 暮 松にやとりをたのみきて我 名をかくす冬の山 風

(続) 暮 松にやとりをたのみきて我 名をかくす冬の山 風

(統書) 暮 わか 風
 (統内) 暮 わか 風
 (神2) 暮 わか 風

百十四番左 郭公一声「鳥」(祐)

(国) 郭 公みのゝを山 の松にきて声 もたくひはなき風 哉

(大) 時 鳥

(ノ) 時 鳥

* (ノ) は「時鳥」で(大)と同一表記。

(彰) ほとゝきす お

(明) ほとゝきすみのゝを山 の松にきてこゑもたくひはなき風 哉

(伊) ほとゝきす

(島) ほとゝきす

(祐) ほとゝきす やま

(書) ほとゝきす

(三) こゑ

(静) こゑ

* (静) 〓 (国)、(静) は「松も」の「も」にミセケチ「に」と傍書。「も」は書き損じではないか。

(内) は も あらし

* (内) は他本「声もたくひはなき」を「声はたくひもなき」と作る。独自本文。

(神1) ほとゝきす

* (神1) は(内)と一致しない。

(統) 郭 公

* (統) は「声も」の「も」に「はい」、「たくひは」の「は」に「もい」と傍書。異文は(内)と同じ。

(統書) 郭 公
 * (統書) は「声も」の「も」に「は」と傍書。但し、後半の「たくひは」には傍書なし。

(統内) 郭 公 来

(神2) 郭 公

右 嶋千鳥「三」(彰)

(国) 立 別 なくや千鳥 のいもか嶋 月を 形 見の在 明 のこゑ

(大) わかれ

(ノ) ちとり

(彰) たちわかれなくや千鳥 のいもか嶋 月を 形 見の在 明 のこゑ

(明) たちわかれなくや千鳥 のいもか嶋 月を 形 見の在 明 のこゑ

(伊) たち

(島) たちわかれ

(祐) たちわかれ

(書) たちわかれ鳴 や

(三) 衡 しま

(静) 衡

(内) わかれ

(神1) わかれ

(統) たちわかれ 妹 か嶋 有 明

(統書) たちわかれ 妹 か嶋 有 明

(統内) たちわかれ 妹 か嶋 有 明

* (統内) の「たち」の「ち」は消した後に上書き。

(神2) たちわかれ 妹 か嶋 有 明 声

百十五番左 馬上蟬 (神1)

(国) 駒とむる一木の陰 になく蟬の雨にはあらて声 そしくるゝ

(大) 時雨るゝ

(ノ) 鳴蟬 こゑ

(彰) かけ 鳴蟬 こゑ

(明) 駒とむる一木の陰 になく蟬の雨にはあらて声 そしくるゝ

(伊) 時雨ゝ

(島) かけ 鳴蟬 こゑ

(祐) かけ 鳴蟬 こゑ

(書) 鳴蟬 こゑ

(三) 時雨ゝ

(静) 時雨ゝ

* (静) は「一木」にミセケチ「一木」と傍書。同筆。おそらく最初に書いた「一木」が「禾」のように読める可能性があるもので、改めて「一木」と記したの
だろう。

(内) かけ 鳴蟬 こゑ

(神1) かけ 鳴蟬 こゑ

(統) かけ 鳴蟬 こゑ

(統書) かけ 鳴蟬 こゑ

(統内) 影 鳴蟬 こゑ

* (統内) の他本「あらて」が「あらさ」と作る。書き損じか。

(神2) かけ 鳴蟬

右 冬雲

(国) 雪あられいつれのためそ中空に先 立 はやき雲 の 一村
* (国) は他本「足」を「立」と作る。最終形態か。それとも、「足」を誤って

「立」と書いたか。他本はいずれも「足」。

(大) 霰 半天 あし むら

(ノ) 足 足 むら

(彰) 天 足 足 むら

(明) 雪霰 いつれのためそ中空に先 足 はやき雲 の 一むら

(伊) 霰 足 むら (四六ウ)

(島) 霰 足 むら

(祐) 霰 足 むら

(書) 霰 足 むら

(三) 足 足 むら

(静) 足 足 むら

* (静) は「足」にミセケチ「足」と傍書。これも読み誤りを防ぐミセケチか。
但し、(静) が「立」をとらなかつたのは注意。「足はやき」は正徹語彙。「立は
やき」は正広のみ。やはり、「足はやき」でよいか。

(内) 霰 半天 足 むら

(神1) 霰 あし むら

(統) まつあし むら

(統書) まつあし むら

(統内) まつあし むら

(神2) まつあし むら

百十六番左 簾中更衣

* (静) 「簾」は傍書。書き間違ひした字を消している。

(国) 立 かへてうすきうちめはこすの戸にしらぬはしるき衣 の音哉
* (国) は他本「しらぬも」を「しらぬは」と作る。最終形態か。

(大) たち 薄
 (ノ) たち 薄
 (彰) たち
 (明) たちかへて薄 きうちめはこすのとしらぬもしるぎぎぬの音哉
 (伊) たち 薄
 (島) たち 薄
 (祐) たち 薄
 (書) たち 薄き
 (三) たち
 (静) たちは「しらぬしるき」と作る。脱字か。
 * (静) は「しらぬは」の「は」にミセケチ「も」。別筆か。先祖返り。(静) 初期(国)。
 (内) 知
 (神1) たち 薄
 * (神1) の「戸」に「外イ」と傍書。
 (続) たち 薄
 (続書) たち
 (続内) たち
 * (続内) は末尾「色哉」とする。独自本文。書き損じか。
 (神2) たち
 右 時雨
 (国) 定 なき嵐 の宿 に声 過 て松に留 まる村 時 雨かな
 (大) さため
 (ノ) さため

(彰) さため やと
 (明) さためなき嵐 の宿 にこゑ過 て松にとゝまる村 時 雨哉
 (伊) さため とゝ
 (島) さため あらし
 (祐) さため あらし
 (書) さため こゑ
 (三) あらし
 * (三)・(静)・(静) は「定なき」で同一表記。
 (内) あらし
 (神1) さため あらし やと こゑ
 (続) さため やと すき
 (続書) さため やと すき
 (続内) さため やと すき
 (神2) さため やと すき
 百十七番 左 卯花似雪(大)
 (国) 松たてる卯 花 山の夕 煙 さらに余所めは雪の炭 籠
 (大) 卯の 更 によそ かま
 (ノ) うの の よそ すみかま
 (彰) の よそ すみかま
 (明) 松たてるうの花 山の夕 煙 さらによそめは雪のすみかま
 (伊) うの 烟 よそ すみかま
 (島) うの ゆふけふり よそ すみかま
 (祐) うのはな ゆふけふり よそ すみかま
 (書) うの よそ すみかま

(三)			よそ	すみかま
(静)		よそ		
(内)	の	けふり	よそ	すみかま
(神1)	の		よそ目	
(統)	うの	けふり	よそ	すみかま
(統書)	うの	けふり	よそ	すみかま
* (統書) は「すえかま」の「え」にミセケチ「み」と傍書。書き損じだろう。				
(統内)	うの	けふり	よそ	すみかま
(神2)	うの	けふり	よそ	すみかま
右 寒草霜 (国) (静) (神1) (三)				
(国)	さえこほる風	もよしや朝	な	かれて花 開 霜の浅茅 生
(大)	氷	る	あらし	
(ノ)			あさ	枯て 咲 霜
(彰)			あさ	枯て さく あさちふ
(明)	さえこほる風	もよしやあさ	なく	枯て花 さく霜のあさちふ
(伊)			あさ	枯 さく あさちふ
(島)			あさ	枯 さく あさちふ
(祐)		あらし	あさ	枯 はなさく あさちふ
(書)	寒	こ		枯て さく ちふ
(三)				あさちふ
* (三)・(静)・(国) は「あさちふ」以外は同一表記。				
(静)				あさちふ
(内)	氷	る	あらし	枯て さく あさちふ
(神1)				枯て さく 浅 ちふ
(統)	氷	る		さく

(統書)			氷	る	さく
(統内)			氷	る	さく
(神2)			氷	る	さく
百十八番左 初郭公					
(国)					
(島)	時	鳥			
(国)	ほととぎす桜	の花	を鶯	の雪のふるすと聞	忍 らん
* (国) は他本「さく卵の花」を「桜の花」、「ふるすとこゑ」を「ふるすと聞(き)」と作る。最終形態か。					
(大)	時	鳥さく卵			
(ノ)	杜	鶉さく卵	×花	うくひす	巢 声 忍 ぶ
(彰)	時	鳥咲	うの	うくひす	声 したふらん
* (彰) は他本「しのふ」を「したふ」に作る。他は(大)と同文。					
(明)	時	鳥さく卵	の花	を鶯	の雪の古 巢とこゑ忍 くらん
(四七オ)					
* (明) は「さくうの花」とする。(明) ↓ (書) か。					
(伊)			さくう	うくひす	古 巢 声 ぶ
(島)			×	うくひす	古 巢 こゑしのふ
* (島) は「うの花」を「う花」とする。これで「うのはな」と読ませたいのだらう。					
(祐)			さくう	はな	うくひす 古 巢 こゑ
* (祐) は「うのはな」と「の」を補った。					
(書)	時	鳥さくら		うくひす	こゑ忍 くらん
* (書) は「さくらの花」を傍線、別筆で「のこるさくら」と傍書。これは(内)と同一本文。					

- (三) も声 忍 ふ
- * (三) は「桜」とあって(国)と同一だが、後半は「声忍ふ」となり、(大)・(明)系と同じ。なお、「ふるすも」と作る。
- (静) 郭 公さくら む
- * (静) は「さくら」の「ら」にミセケチ「う」、「聞忍」の「聞」にミセケチ「声」とそれぞれ傍書。別筆か。先祖返り。
- * (静) 初期Ⅱ(国)
- (内) 郭 公のこる桜を 鶯 の雪のふるすところ忍 ふらむ
- * (内) は他本「さくうの花を」、(国)は「桜の花を」とするが、「のこる桜を」と作る。独自本文。
- (神1) 郭 公のこる桜を うくひす 声 忍 ふらん
- * (神1) は(内)と同文。
- (続) こゑしのふ
- * (続) は「桜の花」に「残る桜イ」と傍書。異文は(内)と同じ。
- (続書) 声 しのふ
- * (続書) は「桜の花」に「残るさくら」と傍書。(内)と同文。
- (続内) 声 しのふ
- (神2) 声 しのふ
- 右 浅雪
- (国) 天津空 くもるはかりをけちめてたゝ朝 霜のふかき雪哉
- (大) 斗 あさ
- (ノ) 斗 あさ
- (彰) 天津空 くもる斗 をけちめてたゝ朝 霜のふかき雪哉
- (明) 斗 かな
- (伊) かな
- (島) かな
- (祐) かな
- (書) かな
- (三) そら 計 斗
- (静) 斗 を
- (内) 斗 を
- (神1) つ
- (続) つ
- * (続) は「朝霜に」の「に」に「のイ」と傍書。異文は(内)他本と同じ。
- (続書) 誰 誰
- * (続書) は他本「たゝ」を「誰」。独自本文。また、「朝霜に」の「に」に「の」と傍書。
- (神2) 誰 誰
- * (続) 系は「誰朝霜に」がもともとの形。
- (続内) 誰 誰
- 百十九番左 湖辺蛩多(島)(祐)
- (国) 風 にちる蛩 か星 かたか嶋 やかちのは袖のくらしき夜もなし
- (大) 高 野
- (ノ) 高 野
- (彰) ほたる ほし しま
- (明) 風 にちる蛩 か星 か高 嶋 やかち野は袖のくらしき夜もなし
- (伊) 高 野
- (島) ほたる ほたる しま
- (祐) ほたる しま
- (書) 高 野

(三) かせ よ

(静) (国)

(内) ほたる 高 野

(神1) 高 野

(統) ほし 高 島

(統書) ほし 高

(続内) ほし 高

(神2) ほし 高

右 爐辺閑談

(国) 問 人もかたりそあかさわか思 ひ世のなけきをはたきもつくさて

(大) とふ 我 おも 焼 も 尽 さ

(ノ) とふ 我 おも

(彰) とふ 我か

(明) とふ人もかたりそあかさわかおもひ世のなけきをはたきもつくさて

(伊) とふ おも

(島) とふ おも

(祐) とく おも

* (祐) の「とく」は「とふ」の写し間違いか。

(書) とふ 我かおもひ

(三) とふ 我思 × か

* (三) は他本「なけき」を「なかき」と作る。誤読によるか。

(静) とふ 我思 ×

(内) とふ 我思 焼 も

(神1) とふ 我思

(統) とふ 我思 焼 も 尽 さ

(統書) とふ 家思 焼 も 尽 さ

(続内) とふ 家 × 燃 も 尽 さ

* (続内) は「世の」が脱字。ためか「なけき」に「本ノマ、」と傍書。

(神2) とふ 家思 焼 も 尽 さ

* (統) 系は「我」を「家」と書いていたのではないか。

百廿番左 六月祓「大」(神1)

(国) 御 祓川あさちすかぬくはては又 我 身にこゆる老の浪 かな

(大) × わか なみ哉

(ノ) みそき わか

(彰) みそき わか なみ哉

* (彰) は「まては」の「ま」にミセケチ「は」と傍書。別筆か。

(明) みそき川あさちすかぬくはては又 我 身にこゆる老の浪 哉

(伊) みそき み なみ哉

* 「そ」ミセケチ「は」 またわか

(島) みそき またわか なみ

(祐) みそき またわか 我か 哉

(書) みそき 我か なみ

(三) * (三)・(静)・(国) は「浪かな」以外は同一表記。

(静) みそき 哉

(内) みそき 波 哉

(神1) みそき 波 哉

(続) みそき河浅 茅 わか 越る 波 哉

(統書) みそき河浅 茅 わか 越る 波 哉

* (統書) は「浅茅ぬかつく」の「ぬかつ」にミセケチ「すかぬ」と傍書。(内) 系に基づく校訂か。

(続内) みそき河浅 茅 わか 越る 波 哉

(神2) みそき河浅 茅ぬかつく わか 越る 波 哉

* (統) 系は「浅茅ぬかつく」がもともとの形。

右 歳暮「(三)(彰)

(国) 夢かさは昨 日の春を明日からは 送りむかふる年 の暮 哉

* (国) は他本「あすか川」を「明日からは」と作る。最終形態か。但し、「明日かゝは」と読めないこともない。おそらく、「明日かゝは」であったと思われる。「明日からは」では意味的におかしいから。

(大) あすか川 をく 「

(ノ) きのみ あすか川 をく かな

* (ノ) は(大)と同様に、「をくり」とする。仮名遣いでは「おくり」が正しい。

(彰) あすか河 をく くれかな

(明) 夢かさは昨 日の春をあすか川 おくりむかふる年 の暮 哉 (四七ウ)

(伊) あすか川 おく とし

(島) あすか川 「おく かな

(祐) あすかかは「をく とし かな

(書) あすか川 かな

(三) あすかゝは をく くれかな

* (三) 〓 (静)。

(静) あすかかは をく くれ

* (静) は(国)のように、「明日からは」とは読んでいない。「明日からは」と

いう歌ことばはある。

(内) あすか川 をく くれかな

* 「夢か、さは」という表現であり、『古今和歌六帖』から見られる。この場合、

意味的に異に異って「明日からは」の方がよいと正広が最終判断したということ

だろう。

(神1) あすか川 をく くれかな

(統) きのみ あすか河 とし

(続書) きのみ あすか河 とし

(続内) きのみ あすか河 とし

(神2) きのみ あすか河 とし

恋雑(国) 一番 左 初恋

(国) 恋雑

(大) 恋雑

(ノ) 恋雑

(彰) ××

* (彰) には「恋雑」という記述はない。

(明) 恋雑

(伊) 恋雑

(島) 恋雑

(祐) 恋雑

* (大) (明) 系は、一番の後に「恋雑」と記す。

(書) 恋雑

* (書) は「恋雑」と記して、行替えをし、「左 初恋」となる。

(三)

(静)

* (静)の「恋雑」は貼紙、書き損じによる訂正か。

(内)

*表記の違いのみ。

(神1)

* (神1)は「恋雑」と最初に記し、それから「一番左 初恋」となる。

(統)

(統書)

(統内) 三百六十番自歌合 下 松下正広 一番 左初恋

(神2)

* (統)系は「恋雑」の表記なし。

(国) 都 をは今朝そ旅 たつ我 思 ひ忍 ふも遠 きあまのたくなは

(大)

(ノ) わか し の 縄

(彰)

(明) 都 をは今朝そ旅 たつ我 思 ひしのふも遠 きあまのたくなは

(伊)

(島) たひ し の 縄

(祐)

(書) たび し の 縄

(三) 我かおもひしのふ とをき

(静)

(内) おもひしの 縄

(神1)

(統) 我かおもひ ×も 焼 縄

(統書)

(統書) みやこ けさ わか 焼 縄

* (統書)は「ぬまの」の「ぬ」にミセケチ「あ」と傍書。(内)系との校訂による。(神2)系統の本が原形。

(統内)

(神2) みやこ けさ わか

* (神2)の「ぬま」は書き損じか。

右 暁鷄

(国) 心 なきなにの恨 そ立 田山ゆふ付 鳥 に雲のわかるゝ

(大) うらみ 夕 つけ

(ノ) つけとり

(彰) 心 なきなにの恨 そ立 田山ゆふつけ鳥 に雲のわかるゝ

(伊) つけ

(島) うらみ つけ

(祐) うらみ たつた つけとり

(書) うらみ

(三) つけ

* (三)・(静)・(国)は「つけ」以外は同一表記。

(内) 何の思ひ たつた 夕 つけ

* (内)は他本「何の恨そ」とあるのを「何の思ひそ」と作る。独自本文。

(神1) おもひ つけ

* (神1)も(内)と同じく「おもひ」とする。

(統) 龍 夕 つけ

* (統)は「恨」に「思ひ」と傍書。異文は(内)と同じ。

(統書) 龍 夕 つけ

* (統書) も「恨」に「思」と傍書。異文は(内)と同文。

(統内) 思 × 龍 夕 つけ

(神2) 龍 夕 つけ

二番 左 寄天恋(内)

(国) さてこそは空をは人のなかむらめ天 と地 との恋のはしめは

* (国) は他本「恋をはしめは」を「恋のはしめは」と作る。最終形態か。「を」

よりも「の」の方が意味はすっきりと分かる。

(大) を

(ノ) を

(彰) を

(明) さてこそは空をは人のなかむらめ天 と地 との恋をはしめは

(伊) を

(島) を

(祐) を

(書) を

(三) を

* (三) 〓 (静) 初期 〓 (国)。

(静) * (静) は「恋のはしめは」の「の」に「をイ」と傍書。異本は(大)(明)系

か。同筆か。

(内) を

(神1) を

(統) を

(統書) を

(統内) んあめ つち を

んあめ つち を

(神2) んあめ つち を

* (統・神2) は「ながむらん」と作る。独自本文。単に間違いに気がつかな

かったか。

右 山家雲(内)(書)(彰)

(国) いていらはあらしなはてそ嶺の雲半 床 かす庵 の篠 ふき

(大) 入は 峯 さゝ

(ノ) と 峯 さゝ

(彰) と 峯 さゝ

* (彰) は「いはは」の「は」にミセケチ」とと傍書。よって、「いとは」と

いう不思議な本文になっている。

(明) いていらはあらしなはてそ嶺の雲半 床 かす庵 の篠 ふき

(伊) を

(島) を

(祐) を

(書) なかは

(三) なかは

* (三) 〓 (静) 〓 (国)。

(静) 〓

(内) 〓

(神1) 入は 〓

(統) 入は 〓

(統書) 入は 〓

* (統書) は「はては」の後の「は」にミセケチ「そ」と傍書。(内)系で校訂

か。

(統内) なかはとこ いほ さゝ

(神2) は なかはとこ いほさゝ

三番 左 伝聞恋(神1)

(国) 水上の山路よいかに菊の水末のなかれも袖そ匂へる

(大) みな すゑ にほ

(ノ) みな すゑ にほ

(彰) みな すゑ にほ

(明) みな上の山路よいかに菊の水末のなかれも袖そにほへる

(四八オ)

(伊) みな そて にほ

(島) みな きく にほ

(祐) みなかみ きく にほ

(書) みなかみ すゑ にほ

(三) * (三) || (静) || (国)

(静) * (三) || (静) || (国)

(内) 草に露すゑ

* (内) は「菊」を「草」に読んだか。他本「菊の水」とあるのを「草に露」と作る。独自本文。

(神1) みなかみ 露 にほ

* (神1) は(内)と同じく「露」とする。ただし、「菊の露」であり、「菊に露」ではない。

(統) すゑ そて

* (統) は(内)の「草に露」の異本表記をしていない。珍しい例。

(続書) すゑ そて

(続内) すゑ そて

(神2) すゑ そて

右 旅宿見月(ノ)(三)

(国) 月はさそやとりかねてや曇らんいふせや土に賤かすかこも

(大) くもる くもる む

(ノ) くもる くもる む

(彰) くもる くもる む

(明) 月はさそやとりかねてやくもるらんいふせや土にしつかすかこも

(伊) くもる しつ

(島) くもる しつ

(祐) くもる しつ

(書) くもる む しつ

(三) くもる む

* (三) || (静)

(静) くもる

* (静) の「土」の字は何かを書いて消した後に記されている。書き損じによるか。

(内) 覽 む

(神1) 曇る 管こ

(統) 曇る 管こ

(続書) 曇る 管こ

(続内) 曇る 管こ

(神2) 曇る 管こ

四番 左 寄月恋(島)(祐)

(国) 天津空袖の涙に雲とめて心の道にまよふ月かな

* (国) は他本「とちて」をあるのを「とめて」と作る。意味的改変。最終形態か。それとも単なる誤記か。「雲とめて」はこの用例のみ。「雲とちて」は正徹に二例、誤記の可能性大。

(大) ち
 (ノ) ち なみた
 (彰) ち
 (明) 天津空 袖の涙 に雲とちて心 の道 にまよふ月哉
 (伊) ち みち
 *まとふの「と」ミセケチ「よ」。
 (島) つそら なみた ち こゝろ
 (祐) つそら なみた ち こゝろ みち
 (書) ち こゝろ
 (三) そら ち
 (静) ち
 (内) ち みち
 (神1) ち
 (続) ち みち
 (続書) ち みち
 (続内) ち みち
 (神2) ち みち
 右 岩松「(彰)」
 (国) 巖
 (大) 巖
 (ノ) 巖
 * (大)・(明)系は「巖」。

(彰) 巖
 (明) 巖
 (伊) 巖
 (島) 巖
 (祐) 巖
 (書) 巖
 (三) 巖
 * (書) は岩 やはり、(明) ↓ (書) か。
 (静) 巖
 (内) 巖
 (神1) 巖
 (続) 巖
 (続書) 巖
 (続内) 巖
 (神2) 巖
 (国) すむ水もおなし緑 の岩 ね松 よせこし浪や種 と成 けん
 (大) みとり
 (ノ) 巖
 (彰) 巖
 * (彰) は「成らん」と作る。理由は不明。
 (明) すむ水もおなし緑 の岩 ね松 よせこし浪や種 と成 けん
 (伊) たね
 (島) いはねまつ たね なり
 (祐) みとり いはねまつ たね なり
 (書) 根 らん
 (三) む

* (三) は末尾が「成らん」と作る。(内)・(統) 系と同一。

(静)

みとり

たね

ら

* (内) は、「すみ水も」の「も」は「も」以外はない。他本「成けん」とあるのに「成らん」と作る。独自本文。

(神1)

みとり

根

* (神1) 「すみ水も」の「も」は「に」に似ている。

(統)

に同 しみとり

たね

ら

* (統) は「水に」の「に」に「もイ」と傍書。異文は文末「らん」と共に(内)と同じ。

(統書)

に同 しみとり

たね

ら

* (統書) は「水に」の「に」に「も」と傍書。

(統内)

同 しみとり

根

たね

ら

(神2) に同 しみとり

たね

ら

* (神2) は「たねに」の「に」にミセケチ「や」と傍書。これは書き損じか。(内) (統) 系は、「成らん」と作る。独自本文。

五番 左 忍恋「(国) (静)

(国) 日にそへて身のおとろへそます鏡 我 にしらせぬ心

ともかな

(大)

(ノ)

われ

(彰)

(明) 日にそへて身のおとろへそます鏡 われにしらせぬ心

ともかな

(伊)

われ

共

(島)

われ

共

(祐)

かゝみわれ

こゝろ

(書)

われ

(三)

* (三)・(静)・(国) は「哉」以外は同一表記。

(静)

(内)

われ

* (内) は「しられぬ」に作る。

(神1)

われ

* (神1) も(内)と同じく「しられぬ」に作る。

(統)

れ

* (統) は(内)と同じく「しられぬ」とする。

(統書)

かゝみ

(統内)

かゝみ我

(神2)

かゝみ我

* (統書)・(神2) は、「我」ではなく「家」に見える、そして、「しらせぬ」とつくる。「我」を「家」に近く書いたものと思われるが。

右 旅行鐘「(神1) (書)

(国) 鐘 の声 いつの契 にしたふらんとまらて過る道 のへのやと

* 私家集大成は「とまして」と読むが、ここは「とまらて」でよい。また、文末を「雪」と読む。題からして意味は「やと」の方がよい。そして、(明) をみると、「やと」と「雪」が実に似ているのである。おそらく、(国) も「雪」に見えるが「やと」と書こうとしたものと思われる。よって、「やと」に改めた。「宿」の可能性もある。

(大)

覧

(ノ)

かね こゑ

宿

(彰)

(明) かねの声 いつの契 にしたふらんとまらて過る道のへのやと

(四八九)

(伊) 契り やと

(島) かね やと

(祐) かね ちきり 「 すく みち やと

(書) かね こゑ む 宿

(三) こゑ 宿

(静) こゑ 宿

(内) こゑ したふ 宿

* (内) は他本「とまらて過る」とするのを「とまらてしたふ」と作る。独自

本文。 したふ 宿

(神1) こゑ したふ 宿

* (神1) は「したふ」が(内)と同文。

(続) 契り 宿

(続書) 契り 宿

(続内) 契り 宿

(神2) 契り 宿

六番 左 寄山恋

(国) いにしへの思 ひや猶 もあさま山 煙 たえても見えん恋 かは

* (国) は他本「煙たて」を「たえて」と作る。煙がなくなっても見えるとい

う意味では、「たえて」がよい。最終形態か。

(大) おも たてゝ

(ノ) おも 浅間 たてゝ

(彰) なを みむ 「

* (彰) は「かな」の「な」にミセケチ「は」と傍書。別筆か。

(明) いにしへのおもひや猶 もあさま山 煙 たてゝもみえむ恋 かは

(伊) おも たてゝ みむ

* あさかの「か」ミセケチ「ま」

(島) おも なを けふりたてゝ みむ

(祐) おも なを やまけふりたてゝ 宿

(書) おも たてゝ みむ

(三) おも み

(静) おも み

* (静) は「たえて」に「たてゝイ」と傍書。異文は(大)・(明)・(内)・(続)

と同じ。 けふりたてゝ こひしさ

(内) 古 の なを けふりたてゝ

* (内) は末句を「こひしさ」と作る。独自本文。

(神1) おも たてゝ みむ

(続) おも 浅ま けふりたてゝ み

* (続) の末尾は(内)と異なる。

(続書) おも 浅ま けふりたてゝ み

(続内) おも 浅ま けふりたてゝ み

(神2) おも 浅ま けふりたてゝ み

右 閑居松風(三)(彰)

(国) 松の風 古 葉みたれて板ひさし音 もさなからふる時 雨哉

(大) おも をと かな

(ノ) おも をと かな

* (ノ) 〓 (大)

(彰) おも をと

(明) 松の風 ふる葉みたれて板ひさしをともさなからふる時 雨哉

(伊) ふる をと
 (島) ふる をと かな
 (祐) ふる をと しゅくれかな
 (書) ふる をと
 (三) 〃
 *(三) 〃(国)、(静)も「かな」以外は同一表記。
 (静) かな
 (内) かせ
 (神1) ふる おと
 (統) ふる 乱れ 降時
 (統書) ふる 乱れ 降時
 (統内) ふる 乱れ 降時
 (神2) ふる 乱れ 降時

(伊) とを わか身 海ま
 (島) とを わか身 船
 (祐) とを わか身
 (書) とを
 (三) 〃
 *(三) 〃(静) 〃(国)。
 (静) 碓 お
 (内) 碓 お 海士
 (神1) 碓 お
 (統) 浅に 海士
 (統書) 浅に
 (統内) 浅に
 (神2) 浅に

七番 左 憑媒恋

(国) 遠 あさにいかりおろして人はこす我 身こしてよあまのはし舟
 (大) とを われを
 *(大) は、「我身」ではなく「われを」とする。初期形態「我身」を「われ」に改めたのだろう。
 (ノ) とを われを 蟹
 *(ノ) は「われを」で(大)と同一表記。(ノ) 〃(大)。
 (彰) を 我を や蟹
 *(彰) は他本「こしてよ」を「こしてや」と作る。連想に基づく誤読か。
 (明) とをあさにいかりおろして人はこすわか身こしてよあまのはし船
 *(明) は、「われを」の「れを」にミセケチ、「か身」と小書き傍書。(大)が古い形を持ち、それを改めたのが(明)、そして、(国)がそれを受けた。

右 旅宿嵐

(国) みし夢やふもとの野へに迷 らん枕 をこゆる嶺の嵐 に
 (大) の まよふ
 (ノ) まよふ あらし
 (彰) 麓 まよふ
 (明) みし夢やふもとの野へにまよふらん枕 をこゆる嶺の嵐 に
 (伊) まよふ
 (島) まよふ まくら
 (祐) まよふ まくら
 (書) まよふ む
 (三) 〃
 *(三) 〃(静) 〃(国)。

(静)

見 麓 の野 まよふ

(内)

見 まよふ

(神1)

見 まよふ

(統)

見 まよふ

(統書)

見 まよふ

(続内)

見 まよふ

(神2)

見 まよふ

(神1)

見 まよふ

(内)

見 まよふ

(神1)

見 まよふ

(統)

見 まよふ

(統書)

見 まよふ

(続内)

見 まよふ

(神2)

見 まよふ

(神1)

見 まよふ

(書)

うら風

(三)

うらかせ

(静)

風

(三・静・国)

は「猶捨舟」では同一表記。

(神1)

風

(内)

すて

(神1)

すて

(統)

風

(統書)

すて船

(続内)

すて船

(神2)

すて船

(神1)

く

(神1)

く

(統)

く

(続内)

く

(書)

うら風

うらかせ

風

すて

すて

すて

すて

すて

すて

すて

すて

すて

すて

すて

すて

すて

すて

すて

すて

すて

すて

すて

すて

すて

すて

すて

すて

すて

すて

明星本『正広自歌合』の本文と校異(2)

前田雅之

(三)

* (三)・(静)・(国)は「原」以外同一表記。

(内) 静 玉 見 おもふ 哉 かせ 心
原 原 原 原

* (内)は(明)がミセケチにした「しけき」と作る。

(神1) 有 ふ 繁 み よ ゐ さく原 原

(統) 有 ふ 繁 み よ ゐ さく原 原

(統書) 有 ふ 繁 み よ ゐ さく原 原

(統内) 有 ふ 繁 み よ ゐ さく原 原

(神2) 有 ふ 繁 み よ ゐ さく原 原

九番 左 誓恋「(島)(祐)(ノ)

(国) 玉くしけ鏡 をみても思 ふかなつらき松 浦 の神の恵 を

* 私家集大成は「思」と読んでいるが、「恵」であろう。(国)は他本「神の心を」を「神の恵を」と作る。最終形態か。

(大) 運 哉 まつら 浦 の神の心を

(ノ) 運 哉 まつら 浦 の神の心を

(彰) 運 哉 まつら 浦 の神の心を

(明) 玉 運 鏡 をみても思 ふかなつらき松 浦 の神の心を

(伊) 運 哉 まつら 浦 の神の心を

(島) 運 哉 まつら 浦 の神の心を

(祐) 運 見 おもふ 哉 かせ 心

(書) 運 見 おもふ 哉 かせ 心

(三) 運 見 おもふ 哉 かせ 心

* (三) || (静) || (国)。

(静) おもふ

* (静)は「神の恵」をそのままうけて、異文注記がない。

(内) 玉 運 見 おもふ 哉 かせ 心

(神1) 運 見 おもふ 哉 かせ 心

* (神1)は他本「松浦」を「松かせ」に作る。書き損じか。

(統) 有 ふ 繁 み よ ゐ さく原 原

(統書) 有 ふ 繁 み よ ゐ さく原 原

* (統書)は「つらき枕」の「枕」にミセケチ「まつら」と傍書。(内)系を見て校訂か。

(統内) 有 ふ 繁 み よ ゐ さく原 原

(神2) 有 ふ 繁 み よ ゐ さく原 原

* (神2)は他本「まつら」(松風)を「まくら」とする。松浦明神の伝説を踏まえているから、「枕」ではおかしい。「まつら」を「まくら」と読んだことによると思われる。

右 慶賀「(国)(静)(三)

(国) 尋 みよ蓬 か嶋そ和哥の道心 をのへて人は老せず

(大) 尋 みよ蓬 か嶋そ和哥の道心 をのへて人は老せず

(ノ) 尋 みよ蓬 か嶋そ和哥の道心 をのへて人は老せず

(彰) たつね 尋 みよもきか嶋そ和哥の道心 をのへて人は老せず

(明) 尋 みよもきか嶋そ和哥の道心 をのへて人は老せず

(伊) 尋 みよもきか嶋そ和哥の道心 をのへて人は老せず

(島) たつねみよもき 尋 みよもきか嶋そ和哥の道心 をのへて人は老せず

(祐) たつねみよもき 尋 みよもきか嶋そ和哥の道心 をのへて人は老せず

(書) たつねみよもき 尋 みよもきか嶋そ和哥の道心 をのへて人は老せず

(三) たつねみよもき 尋 みよもきか嶋そ和哥の道心 をのへて人は老せず

* (三) || (静) || (国) || (神1)。

(静) 尋ね 島 わか
 (内) か こゝろ
 (神1) 尋ね
 (統書) 尋ね
 (統内) 尋ね 和か
 (神2) 尋ね 和か

十番 左 寄笠恋
 (国) 結 をく契 なりともいかゝせむ笠 のかりてのかくれはてすは
 (大) むすひ
 (ノ) むすひ ん
 (彰) むすひ ん
 (明) むすひをく契 なりともいかゝせん笠 のかりてのかくれはてすは
 (伊) むすひ 契 んかさ
 (島) むすひ ちきり ん
 (祐) むすひ ちきり ん
 (書) 結 ひ ん
 (三) 結 ひ
 * (三) || (静) || (国)。

(静) は「かりて」の「か」と「り」の間にミセケチ「下」を傍書。読みは変
 わらないか。
 (内) 共 手 手
 (神1) 手 手
 (統) むすひ ん 手 隠れ

右 月前鐘「(神1)(彰)」
 (国) はつせ山すみのほる月を朧 夜の春にかすむる鐘 の声 かな
 (大) 泊せ 哉
 (ノ) 泊瀬 おほろ こそ
 (彰) 泊瀬 おほろ こそ哉
 (明) 泊瀬山すみのほる月をおほろ夜の春にかすむる鐘 のこそ哉「(四九ウ)」
 (伊) 泊瀬 おほろ 哉
 (島) 泊瀬 おほろ かねのこそ
 (祐) 泊瀬 おほろ かねのこそ
 (書) 泊瀬 おほろ 哉
 (三) 泊瀬 こそ
 * (三)・(静)・(国) は「声かな」以外は同一表記。

(静) 泊瀬 よ め 哉
 (内) 泊瀬 おほろ 哉
 * (内) は他本「かすむる」を「かすめる」に作る。独自本文。
 (神1) 泊瀬 おほろ こそ哉
 (統) 初せ おほろ め 哉
 * (統) も「かすめる」で(内)と同じ。
 (統書) 初せ おほろ 哉
 * (統書) は「かすむる」の「む」に「め」と傍書。(内)と同文。
 (統内) 初せ おほろ め 哉
 (神2) 初せ おほろ 哉

十一番左 契久恋

(国) 夢かとよたのめしなから久 かの月もその夜はくもりはてゝき
 (大) 方 堅 其夜
 (ノ) 方 堅 其夜
 (彰) 方 堅 其夜
 (明) 夢かとよたのめしなから久 堅 其 其 夜はくもりはてゝき
 (伊) 堅 其
 (島) 堅 其
 (祐) ひさかた 堅 其夜
 (書) 堅 其
 (三) 其
 * (三) も「其」以外は(静)・(国)と同一表記。
 (静) * (静) 〓 (国)。
 (内) 堅 よ 霞 は
 * (内) は他本「くもり」を「霞」と作る。
 (神1) 堅 其 霞 は
 * (神1) は「霞」で(内)と同文。
 (統) 堅 よ 曇 り
 (統書) 堅 よ 曇 り
 (続内) 堅 よ 曇 り
 (神2) 堅 よ 曇 り
 右 夜過閑路「(書) 我 にみる衣の閑 よいかにともこゆる道 なくまよふ闇 かな」

(大) われ やみ哉
 (ノ) われ やみ哉
 (彰) われ やみ哉
 (明) われにみる衣の閑 よいかにともこゆる道 なくまよふやみ哉
 (伊) われ やみ
 (島) われ やみ哉
 * (島) は「いかにせ」の「せ」ミセケチで「と」
 (祐) われ 見 せき みち やみ
 (書) われ 見 せき やみ
 (三) 哉
 * (三) 「衣の閑に」の「に」にミセケチ「よ」と傍書。「哉」以外は(三)・
 (静)・(国)は同一表記。
 (静) 哉
 (内) われ やみ
 (神1) われ やみ
 (統) 哉
 (統書) 哉
 (続内) 哉
 (神2) 哉
 十二番左 寄貝恋「(内) 見 哉
 * 歌の内容からしてもここは「貝」でなければいけない。「貝」と書こうとして「見」となったのだろう。書き損じと認定する。なお、「寄貝恋」は『林葉集』からある。新編国歌大観は校訂して「貝」とした。次が「僅見恋」なので、目移りを起こしたか。

(大) 貝
 (ノ) 貝
 (彰) 貝
 (明) 貝
 (伊) 貝
 (島) 貝
 (書) 貝
 (祐) 貝
 (静) 貝
 (内) 貝
 (神1) 貝
 (続) 貝
 (続書) 貝
 (続内) 貝
 (神2) 貝
 (国) 真 砂山くたけてまじる忘 貝いつの世までか浪かゝりけん
 * (国) は(大)(明)系が「もかけ」とするのを「かゝり」と作る。最終形態か。
 (大) もかけ
 (ノ) もかけ
 (彰) もかけん
 (明) 真 砂山くたけてまじる忘 貝いつの世までか浪もかけけん
 * (明) 「山」小書き傍書。
 (伊) もかけ
 (島) わすれ
 もかけ
 「

(祐) わすれ
 (書) もかけ
 (三) ま 砂
 * (三) 〓 (静) 初期 〓 (国)
 (静) ま 砂
 * (静) は「かゝり」にミセケチ「もかけ」。先祖返りか。
 (内) にか
 * (内) は(大)(明)系の「もかけ」ではなく「にかけ」と作る。独自本文。
 (神1) もかけ
 (続) 忘れ
 * (続) は(大)(明)系と同じく「浪もかけ」と作る。(内)と一致しない。
 (続書) 忘れ
 (続内) 忘れ
 (神2) 忘れ
 右 海路(内)(三)(彰)
 (国) 我 おきつ浪をはこかて磯 物 に命 をつなく舟そはかなき
 (大) 我かお もの
 (ノ) われ
 (彰) いそ
 (明) われおきつ浪をはこかて磯 物 に命 をつなく船そはかなき
 (伊) われ 船
 (島) われ 船
 (祐) われ
 (書) われ
 (三) われ
 「

(静)

* (静) || (国)。

(内) われ

(神1) われ沖津

(続) われ

(続書) われ

(続内) われ

* (続内) の「こかて」の「て」は「み」に見える。
 (神2) われ いそ いのち

十三番左 僅見恋〔神1〕

(国) 立つく道 行 なりにさはかりをかへりみすれは人そまきるゝ

(大)

(ノ)

(彰)

(明) 立つく道 ゆきふりにさはかりをかへり見すれは人そまきるゝ

(伊)

(島)

(祐)

(書)

(三)

(静)

(内)

(神1)

(続)

(続)

(続書) たち

(続内) たち

* (続内) は他本「さはかり」の「は」を脱字。

(神2) たち

右 山中滝

(国) 山姫の思ひを高くみくま野や水の煙 に滝の岩なみ

(大)

(ノ)

(彰)

(明) 山姫のおもひをたかくみ熊野や水の煙 に滝の岩浪

(伊)

(島)

(祐)

(書)

(三)

(静)

(内)

(神1)

(続書)

(続内)

(神2)

(国)

十四番左 寄花別恋〔国〕(島)(祐)(静)
 (国) 心 なき夜はの嵐 に人そみん花に雪ふむ衣 くのみち

見

見

見

* (国) は、「夜はの嵐に」と「に」に作る。字母からして「に」としてか読めない。また、末句を他本「衣くの跡」ではなく、「衣くのみち」と作る。共に最終形態か。

(大) 半 あらしよ や む く 跡

(ノ) 半 あらしよ や見 きぬ 跡

* (ノ) 「人や見ん」は(大)と同一本文。なお、「あらしよ」の「よ」に「と」歟」と傍書。後人か。

(彰) 半 よ や あと

(明) 心 なき夜はの嵐 よ人そみん花に雪ふむ衣 々の跡

* (明) は、「人や」の「や」にミセケチ「そ」。(明)は(大)の「や」を「そ」に改訂。

(伊) ころ よ 々 あと

(島) ころ あらしよ 々 々 あと

(祐) ころ あらしよ 見 きぬ あと

(書) ころ 見 々 跡

(三) 半 あらし 道

* (三) 〓 (静) 〓 (国) 道

(静) 半 よ 道

* (静) は「風よ」となっているのみならず、「人そみん」の「そ」にミセケチ「や」、「道」にミセケチ「跡」。こうなると、(静)が校合した本は、(大)系か。

* (国) 以外、「風よ」と作る。

(内) あらしよ あと

* (内) は他本「あらしに」を「あらしよ」と作る。

(神1) 半 よ 々 々 あと

(統) 半 よ きぬ 々 々 あと

(統書) 半 よ きぬ 々 々 あと

* (統書) は「みん」が読みにくかったのか、ミセケチにして「みん」と傍書。

(続内) 半 よ きぬ 々 々 あと

(神2) 半 よ きぬ 々 々 あと

右 松樹増色 (ノ) (書) (彰)

(ノ) 蟬

* (ノ) は「蟬」に「本ノママ」と傍書。書き損じによると思われる。後筆。

(国) 二葉よりそめていくよの霜の松今 年も春にそふ緑 哉

(大) 世 ことし かな

(ノ) 世 ことし かな

(彰) 世 ことし かな

(明) 二葉よりそめていく世の霜の松ことしも春にそふ緑 哉

(伊) 世 ことし かな

* この葉の「この」ミセケチ「二」。

(島) 世 ことし かな

(祐) 世 ことし かな

(書) 世 ことし かな

(三) 染て 世 ことし かな

* (三) 〓 (静) 〓 (三) 〓 (静) 〓 (国) は「ことし」以外は同一表記。

(静) ことし

(内) 染て 世 ことし かな

(神1) 世 ことし かな

(統) 幾世 ことし かな

(統書) 幾世 ことし かな

(神2) 幾世 ことし かな

十五番左 忍逢恋

- (国) 道 のくや忍 ふのおくにこえそ行ありともきかぬ逢 坂 の関
 (大) みち
 (ノ) みち ×
 (彰) みち を あふさか
 (明) みちのくや忍 ×のおくにこえそ行ありともきかぬ逢 坂 の関
 (伊) みち
 (島) みち
 * (島) は「こえず」の「す」に「そ」と傍書
 (祐) みち しの あふさか
 (書) みち しの 山
 * (書) は「逢坂の関」の「関」にミセケチ「山」と傍書。但し、山とあるのは(書) だけである。別筆か。
 (三) しの
 * (三) 〓 (静)、(しの) 以外は (三)・(静)・(国) は同一表記。
 (静) しの せき
 (内) みち
 (神1) みち 忍 ふ
 (統) 陸 奥やしの
 (統書) 陸 奥やしの
 (統内) 陸 奥やしの
 (神2) 陸 奥やしの
 右 旅店 (神1) (三)
 (国) 古郷もおなしはにふのす×筵 身はならはしのいふせくもなし

* (国) は「す筵」と作る。「か」がないと意味が通じず、字足らずになるので、脱字だろう。

- (大) 故 か
 (ノ) か
 (彰) か
 (明) 故郷もおなしはにふのすか筵 身はならはしのいふせくもなし (五〇ウ)
 (伊) 故 か
 (島) 故 かむしろ
 (祐) 故 × かむしろ
 * (祐) は「はにふ」の「ふ」が脱字。
 (書) か
 (三) か
 * (三) 〓 (静) 〓 (国)。
 (静) か
 (内) 故に か
 * (内) は他本「故郷も」とあるのに「故郷に」と作る。独自本文だが、意味的にはよくない。
 (神1) か
 (統) 故 か
 (統書) 故 か
 * (統書) は「身をならはし」の「を」にミセケチ「は」と傍書。(内) 系による校訂。
 (統内) 故 かむしろ
 (神2) 故 を
 * (神2) は「身をならはし」と作る。(統) はこれがもとの形態だろう。

十六番左 寄潟恋

(国) 立 かへりいつ浪 かけむ遠干かた真 砂の上 の海士の捨 舟
 (大) なみ ひ うへ あま
 (ノ) 帰り なみ ん ひ あま
 (彰) ん ひ まさこ うへ あま すて
 (明) 立 かへりいつ浪 かけん遠ひかたまさこの上 のあまのすて舟
 (伊) ん ひ まさこ あま すて
 (島) たち まさこ あま すて
 (祐) たち ん ひ まさこ うへ あま すて
 (書) たち ん ひ あま あま
 (三) たち ん ひ ま 砂 あま
 (静) たち ん ひ ま 砂 あま
 (内) 立 帰り 波 潟 あま
 (神1) 立 帰り ひ あま すて
 (続) たち ん ひ あま すてふね
 (続書) たち ん ひ あま すてふね
 (続内) たち ん ひ あま すてふね
 (神2) たち ん ひ あま すてふね
 右 岸頭待舟(彰)
 (国) 岸頭待舟
 *他本は「岸頭竹」であるが、(国)は「岸頭待舟」の四字題にした。最終形態
 だろう。
 (大) 岸頭竹
 (ノ) 岸頭竹

(彰) 岸頭竹
 (明) 岸頭竹
 (伊) 岸頭竹
 (島) 岸頭竹
 (祐) 岸頭竹
 (書) 岸頭竹
 (三) 岸頭待舟
 (三) || (静) || (国)
 * (三) || (静) || (国)
 (静) 岸頭待舟
 * (静) は(国)と同じ。
 (内) 岸頭竹
 (神1) 岸頭竹
 * (神1)の岸は「峯」に近い。書き損じか。
 (続) 岸頭竹
 (続書) 岸頭竹
 (続内) 岸頭竹
 (神2) 岸頭竹
 (国) いそぎゝて舟待 ほとんやすらひに駒の鞭 きる岸 のさゝ竹
 *他本は「やすらひに」と読む。私家集大成は「よ」と読んでいるが、こども
 「に」と読むべきだろう。
 (大) むち
 (ノ) むち
 (彰) き むち
 (明) いそぎぎて船待 ほとんやすらひに駒の鞭 きる岸 のさゝ竹
 (伊) き 船
 (島) き 船まつ

(祐) き まつ

(書) き きし

(三) まつ 篠

* (三) || (静)。 まつ 篠

(静) まつ 篠

(内) *

(神1) || (神1) || (国)。

(統) むち

(統書) むち

(続内) むち

(神2) むち

十七番左 時々見恋

(国) 身をうらにはかなやあまのかいつ物 塩 のみちひにひろふ斗 は

(大) 身をうらにはかなやあまのかいつ物 塩 のみちひにひろふ斗 は

(ノ) 身をうらにはかなやあまのかいつ物 塩 のみちひにひろふ斗 は

(彰) 身をうらにはかなやあまのかいつ物 塩 のみちひにひろふ斗 は

(明) 身をうらにはかなやあまのかいつ物 塩 のみちひにひろふ斗 は

(伊) 身をうらにはかなやあまのかいつ物 塩 のみちひにひろふ斗 は

(島) 身をうらにはかなやあまのかいつ物 塩 のみちひにひろふ斗 は

(祐) 身をうらにはかなやあまのかいつ物 塩 のみちひにひろふ斗 は

(書) 身をうらにはかなやあまのかいつ物 塩 のみちひにひろふ斗 は

(三) 身をうらにはかなやあまのかいつ物 塩 のみちひにひろふ斗 は

(静) 身をうらにはかなやあまのかいつ物 塩 のみちひにひろふ斗 は

* (静) || (国)。

(内) 浦 浦

(神1) 浦 浦

(統) 蟻 蟻

(続書) 蟻 蟻

(神内) 蟻 蟻

(神2) 蟻 蟻

右 眺望日暮(書)

(国) 富士のねはのこる日影 を暮 はてゝたかふす雲そさ夜の中山 (伊)

(大) 富士のねはのこる日影 を暮 はてゝたかふす雲そさ夜の中山 (伊)

* (大) は「雪」にミセケチで「雲」。

(ノ) 誰か

(彰) 根

(明) 富士のねはのこる日影 を暮 はてゝたかふす雲そさ夜の中山

(伊) 富士のねはのこる日影 を暮 はてゝたかふす雲そさ夜の中山

(島) かけ

(祐) かけ

(書) かけ

(三) ふし

(静) ふし

* (静) は「たりふ」の「り」にミセケチ「か」。書き損じだろう。同筆か。

(内) 根 誰か

* (内) は「誰か」の「か」は「カ」と傍書。

(神1) 根

(統) 根 残る

(続書) 根 残る

(神1) 根 残る

(続) 根 残る

(続書) 根 残る

小夜

小夜

小夜

(続内) ふし 根 残る
(神2) ふし 根 残る
小夜
「

十八番左 寄雲恋

(国) 夕まくれしはしたなく雲消 て心 のやとる契 たになし

(大) 暮し

(ノ) 間暮し 引雲

(彰)

(明) 夕まくれしはしたなく雲消 て心 のやとる契 たになし

(五一オ)

(伊)

(島) こゝろ

(祐) こゝろ

(書) 引雲 こゝろ

(三) 引雲きへて

* (三) は「きへて」と作る。

(静) きえて

(内) 暮し

(神1) 引雲きえて

(続) 引雲きえて

(続書) 引雲きえて

(続内) 引雲きえて

(神2) 引雲きえて

右 暮雲 (国) (静) (三) (彰)

(国) ゆふは山 うきて世にふる人心さそひかねてや雲帰 るらん

(大) かへる 「

(ノ) かへる

(彰) かへる

(明) ゆふは山 うきて世にふる人心さそひかねてや雲帰 るらん

(伊) かへる

(島) かへる

(祐) やま かへる

(書) やま かへる

(三) やま かへる

(静) かへる

(内) 夕は 帰る 「

(神1) 夕は かへる

(続) かへる

(続書) かへる

* (続書) は「心心」の最初の「心」にミセケチ「人」と傍書。(内) 系による

校訂。

(続内) かへる

(神2) 心心 かへる

* (神2) の「心心」の最初の「心」は「人」と書こうとして誤ったのではない

か。

十九番左 契恋 (島) (祐)

(国) 結 へとも心 の秋のみたれは、またふしわふる露の下 萩

(大) むす

(ノ) むす 葉は

(彰) むす は

(明) むすへとも心 秋のみたれ葉はまたふしわふる露の下 荻

(伊) むす 葉は をき

(島) むす こゝろ 葉は

(祐) むす こゝろ 葉は した

(書) むす 葉は した

(三) むす した

(静) むす した

* (静) は「萩」にミセケチ「萩」。この本は「萩」をだいたい「萩」と書き、ミセケチで訂正する傾向がある。(静) 〓 (国)、(三) も「した」以外は同一表記。

(内) むす

(神1) むす 葉、

(統) むす 乱れ 又

(統書) むす 乱れ 又

(続内) むす 乱れ 又

(神2) むす 乱れ 又

右 里竹

(国) 呉 竹の垣よりあれて家もなしたれ世をうしと住はなれけん

* (国) は他本「垣内あり」を「垣よりあれ」と作る。こちらの方が意味がよく通る。最終形態か。

(大) 垣内 あり 離 けん

(ノ) 垣内 あり

(彰) 垣内 あり

(明) 呉 竹の垣内 ありて家もなしたれ世をうしと住はなれけん

(伊) 垣内 あり

(島) 垣内 あり

(祐) くれ 垣内 あり

(書) うちあり

(三) うちあれ よ

* (三) 〓 (静)。「垣内ありて」(大・明) ↓ 「垣うちあれて」(三・静) ↓ 「垣よりあれて」(国) という図式か。

(静) うちあれ

* (静) は「呉」にミセケチ「無呉」、「あれ」の「れ」にミセケチ「り」。(静) は(国)の「垣より」はとっていない。

(内) 垣内 あり

(神1) 垣内 あり

(統) うちあり

(統書) うちあり

(続内) うちあり

(神2) うちあり

甘番 左 寄虫恋」(ノ)

(国) なく蟬の涙 しくる、袂にてよるは蜜 の胸 そくるしき

(大) せみ なみた ほたる むね

(ノ) せみ ほたる むね

(彰) 鳴 せみ ほたる むね

(明) なくせみの涙 しくる、袂にてよるは蜜 のむねそくるしき

(伊) せみ むね

(島) せみ なみた のほたる むね

* (島) は(明)の「よるは」を「よるの」と誤読したか。 のほたる むね

(祐) せみ なみた のほたる むね

* (祐) は (島) を受けたか。

(書) 鳴 蟬

(三) なみた

* (三) は「杖にそ」と作る。誤記か。

(静)

(内) 鳴 せみ

* (内) は末句が「胸の苦しき」と作る。ある種の独自本文だろう。

(神1) せみ

* (神1) は「むねの」とつくり、(内) と同文だが、文末は、「くるしき」と他

本と同文。

(統) 鳴 蟬

(統書) 鳴 蟬

(統内) 鳴 蟬

(神2) 鳴 蟬

右 樵夫雪 (神1) (書) (彰)

(国) 夕 まくれ帰 るや木こりいき杖 の石に音 する山 の下道

(大) 暮 帰

(ノ) ゆふ

(彰) 暮 かへる

(明) ゆふまくれ帰 るや木こりいき杖 の石にをとする山 の下みち

(伊) ゆふ

(島) ゆふ

(祐) ゆふ

(書) 暮

(三) 間暮 かへる

(静) 暮 かへる

(内) 暮 き

(神1) 暮

(統) 暮 かへる

(統書) 暮 かへる

* (統書) は歌の欄外上部に「息杖」と記す。

(続内) 暮 かへる

(神2) 暮 かへる

廿一番左 難忘恋

(国) 月をめて花をみるにも面 影 の先 さき立 てそふ思 ひ哉

(大) かけ

(ノ) かけ

* (ノ) は「先まち」の「ま」に「た敷」と傍書か。もともとは書き損じによる

(彰) 月をめて花をみるにも面 影 の先 さき立 てそふ思 ひ哉

(明) 月をめて花をみるにも面 影 の先 さき立 てそふ思 ひ哉

(伊) 月をめて花をみるにも面 影 の先 さき立 てそふ思 ひ哉

(島) 月をめて花をみるにも面 影 の先 さき立 てそふ思 ひ哉

(祐) 月をめて花をみるにも面 影 の先 さき立 てそふ思 ひ哉

(書) 月をめて花をみるにも面 影 の先 さき立 てそふ思 ひ哉

(三) 月をめて花をみるにも面 影 の先 さき立 てそふ思 ひ哉

* (三)・(静)・(国) は「おもひ」以外は同一表記。

(静) 月をめて花をみるにも面 影 の先 さき立 てそふ思 ひ哉

(内) 月をめて花をみるにも面 影 の先 さき立 てそふ思 ひ哉

見

(神1)									
(統)									
(統書)									
(統内)									
(神2)									
右 嶋松「(三)									
(国)	つらき世をはなれこ嶋	の	一	松われ宿	からむ陰	な隔	そ		
(大)									
(ノ)									
(彰)									
(明)	つらき世をはなれこしまの	一		松われ宿	からむ陰	なへたてそ			
(伊)									
(島)									
(祐)									
(書)									
(三)									

* (三) が他本「陰(かけ)」とあるのに「たち」と作る。理由は不明。次の歌に「たて」とあるので、目移りか。

廿二番左 寄杖恋「(内)									
(国)	くるしさをしはしやすめよ鳩の杖よはり行身の声	立	すとも						
* (国)	は他本「やめて」を「やすめ」と作る。最終形態か。								
(大)									
(ノ)									
(彰)									
* (彰)	は独自本文。								
(明)	くるしさをしはしやすめよ鳩の杖よはり行身の	こゑたて	すとも						
(伊)									
* (明)	の「よ」を(伊)は「も」と読んだか。								
(島)									
* (島)	は「たてつ」の「つ」に「す」と傍書。								
(祐)									
(書)									
(三)									
* (三) (静) (国)	「やすめよ」が共通本文。								
(静)									
* (静)	は「やすめ」の「すめ」にミセケチ「めて」、「立す共」にミセケチ「た								
ですとも」と傍書。(大)系によって校訂か。									
(内)									
(神1)									
(統)									
(統書)									
(統内)									
(神2)									

右 鞆中舟」(内) (彰)

(国) 一夜ぬる川への舟 のあさのまに里 の子いて、先 そ おりのる

(大) 辺

(ノ) 出て

(彰) 河辺

(明) 一夜ぬる川辺の舟 のあさのまにさとの子出 て先 そ おりのる

(伊) 出て 居 のる

* 「居ゐる」の「ゐる」にミセケチ「のる」。

(島) 辺

(祐) 辺

(書) 河辺

(三) 河

(静) 河

* (静) 〓 (国)。

(内) 河辺

* (内) は末句は他本「おりのる」ではなく「おりぬる」となっている。独自本文。

(神1) 辺

(統) 河辺

(統書) 河辺

* (統書) は「海」にミセケチ「河は」と傍書。(内) 系によって校訂か。

(続内) 河辺

(神2) 海辺

* (神2) は「海辺」に作る。こちらがこの系統では原形。

廿三番左 折恋」(国) (静) (神1)

(国) いつかさてうき身をかへん生 きてたま〜 祈 道そはかなき

(大) 適

(ノ) む

(彰) いつかさてうき身をかへん生

(明) きて適

(伊) 適

(島) むまれきて

(祐) むまれきて

(書) 祈る

(三) 祈る

* (三)の「いのる」以外、(静) 〓 (国) と同一表記。なお、(神1)・(内) 〓

(国) 祈る

(静) 祈る

(内) いのる

(神1) 憂身

(統) 生れ

(統書) 生れ

(神2) 生れ

右 海辺松」(書)

(国) あまの焼煙

(大) たく

(ノ) たく

も空に立

そそふこや浦

鳴か箱崎

のまつ

松

松

(彰) 蝨 たくけふり
 (明) あまのたく煙 も空 に立 そそふこや浦嶋 嶋 か箱 崎 の松
 (伊) たく 嶋 さき 松
 (島) たくけふり うら嶋 松
 (祐) たくけふり うら嶋 はこさき 松
 (書) たく そら 松
 (三) たく そら たち うら 松
 (静) たく そら たち うら 松
 (内) たく 波 はこさき 松
 * (内) は他本「空に立そ」を「波に立そ」と作る。独自本文。
 (神1) たく 浪 さき
 (統) 海士 たく なみ 島 はこ
 (統書) 海士 たく なみ はこ
 * (統書) は「そら」にミセケチ「なみ」と傍書。(内)系による校訂か。
 (統内) 海士 たく そら 〃 はこ
 (神2) 海士 たく そら はこ
 * (神2) は「そら」とする。こちらが原形。
 廿四番左 寄遣水恋(島)(祐)
 (国) はるけやる庭の遣 水やる方 も涙 に袖は草かくれつゝ
 (大) 〃 〃 〃 〃
 (ノ) 〃 〃 〃 〃
 (彰) やり 〃 〃 〃
 (明) はるけやる庭の遣 水やるかたも涙 に袖は草かくれつゝ
 (伊) 〃 〃 〃 〃
 (島) 〃 〃 〃 〃

(祐) やり 〃 〃 〃
 (書) かた 〃 〃 〃
 (三) かた 〃 〃 〃
 (静) かた 〃 〃 〃
 (内) 涙 〃 〃 〃
 (神1) かた 〃 〃 〃
 (統書) やり 〃 〃 〃
 (統内) やり 〃 〃 〃
 (神2) やり 〃 〃 〃
 右橋上苔(三)(彰)
 (国) 苔 きさむ石にはあらて石 の橋 哥 かたとむる浪 の下水
 (大) 〃 〃 〃 〃
 (ノ) 〃 〃 〃 〃
 (彰) こけ はしうた
 (明) 苔 きさむ石にはあらて石 のはしうたかたとむる浪 の下水
 (伊) こけ はしうた
 (島) こけ はしうた
 (祐) こけ はしうた
 (書) 〃 はしうた
 (三) いし 哥
 (静) 〃 哥
 * (静) は「きまむ」の「ま」ミセケチ「さ」、「哥」ミセケチ「うた」、「ま」は書き損じ、「うた」は(大)系による校訂か。(静)初期(国)。
 (内) うた なみ

(神1) うた 波
 (統) うた 波
 (統書) うた 波
 (統内) うた 波
 (神2) うた 波

廿五番左 秋久恋

(国) 秋をへてまさきのきつな身のために又 長月のそふ思 ひ哉
 (大) 思 ×
 (ノ) かな
 (彰) かな
 (明) 秋をへてまさ木 きつな身のために又 長月のそふ思 哉
 (伊) 為 思 ×
 (島) 木 また おもひかな
 (祐) 木 また おもひかな
 (書) 木 また おもひかな
 (三) かな
 * (三)・(静)・(国) は「思ひ哉」以外は同一表記。

(静) ×
 (内) 正木 綱 思 かな
 (神1) 正木 綱 思 かな
 (統) 正木 おもひかな
 (統書) 正木 おもひかな
 (統内) 正木 おもひかな
 (神2) 正木 おもひかな

右 古郷路「(神1) (ノ) 古郷路」

(国) ふる郷 と問ひしはいつそみちの草駒かふのみのあけまきの声
 (大) 故 と 道
 (ノ) と 道
 (彰) 古 と 道
 (明) 古郷 ととひしはいつそ道の草駒かふのみのあけまきのこゑ
 (伊) さと と 道 卷
 (島) 古 と 道
 (祐) と 道
 (書) 古 と 道
 (三) 古 と 道
 (静) 古 と 道
 (内) 古 と 道
 (神1) 古 と 道
 (統) さと と 道
 (統書) さと と 道
 * (統書) は「そ角」にミセケチ「あけまき」と傍書。(明)系による校訂か。
 (統内) さと と 道
 * (統内) は他本「いつそ」を「いつと」に作る。書き損じか。
 (神2) さと と 道 所角 の
 * (神2) は「駒かふのみそ角の声」となっているが、「角」の前に「総」が脱字したのではないか。本来、「駒かふのみそ総角の声」だったのでないか。
 廿六番左 寄柏木恋
 (国) 朽ぬへき後の落葉や思ひをく其世に消し柏木の露

* (大) は「落葉は」とし、(明) の段階で「落葉や」としたのが、(国) でも継承されていることが分かる用例。

(大)	くち	は思	きえ
(ノ)	くち	その	
(彰)	くち	その	
(明)	くちぬへき後	の落葉や思	をく其世に消し柏木の露
(伊)	くち	思	
(島)	くち	おもひ	
(祐)	くち	おもひ	その
(書)	くち	おもひ	きえ
(三)	くち	のち	×
* (三) (静) 同一表記。			
(静)	くち	のち	×
(内)			
* (内) (国)。			
(神1)	くち	おもひ	
(統)	のち	おちは	おもひ
(統書)	のち	おちは	おもひ
(統内)	のち	おちは	おもひ
(神2)	のち	おちは	おもひ

右 旅人休橋「(書) (彰)

(国) 岩つたふ水のなかれをしはしみて跡の人まつ山川の橋

(大) 待山

(ノ) 待山

* (ノ) と (大) は「待山川の橋」が同一表記。

(彰) 跡 河

(明) 岩つたふ水のなかれをしはしみて跡の人まつ山川の橋

(伊) はし

(島) はし

(祐) 見 あと やまかは はし

(書) 待山 はし

(三) しつく 河 はし

* (三) は他本「なかれ」を「しつく」に作る。連想による誤記か。

(静) 河

* (静) || (国)、但し、「河」の表記は異なる。

(内) あと 待 河 はし

(神1) 見 河 はし

(統) あと 河 はし

(統書) あと 河 はし

(統内) あと 河 はし

(神2) あと 河 はし

廿七番左 逢恋

(国) こすの戸にひとりや月の深 ぬらん日比 の袖の涙 たつねて

* (国) は、(大) が「消ぬらん」を「ふけぬらん」と改め、(明) がそれを受けたとをそのまま受けているが、他方、(大)・(明) が「夜ころ」とするのを「日比」と改めた。最終形態だろう。

(大) ふけ 夜比

* (大) は「消ぬらん」の「消」に「ふけい」、「夜比」の「夜」に「日イ」とする。

(大) の奥書に引かれる歌は、「ふけ」であり、「日比」である。

(ノ) 待簾 と ふけ 夜ころ なみた尋 て

* (ノ) は「夜ころ」が (大) と同一本文。「待簾」で「こす」と読ませるのでろう。

(彰) 消ぬ 夜比 尋て

* (彰) は (大) が消した本文を維持している。

(明) こすのくにひとりや月の深 ぬらん夜ころの袖の涙 尋て

(伊) と 夜比 尋て

(島) と 日ころ なみた尋て

* (島) はどうして (明) に「夜ころ」とあるのに、「日ころ」と変えたのか。意味的にか。

(祐) と 日ころ なみた

* (祐) は (島) を受けた。

(書) と 日ころ なみた

(三) と 尋て

* (三)・(国) は「戸」以外同一表記。その他、(神1) も。

(静) と 尋て

* (静) は「日比」の「日」にミセケチ「夜」。(大) 系によるか。

(内) と 独 や なみた尋て

(神1) と 更ぬ

(続) 外 更ぬ

* (続) は (内) と同じく「日比」とする。

(続書) 外 更ぬ

(続内) 外 更ぬ

(神2) 外 更ぬ

* (神2) は「戸」にミセケチ「外」と傍書。同筆。

右 山家花「(国) (静)

明星本『正広自歌合』の本文と校異 (2)

前田雅之

(国) めかれせぬうき世やいとふ花までも開てひまある山の奥かな

(大) さき 哉

(ノ) さき おく

(彰) 咲て 哉

(明) めかれせぬうき世やいとふ花までもさきてひまある山の奥 哉

(伊) さき 哉

(島) さき やま 哉

(祐) さき 哉

(書) さき 哉

(三) * (三) は「世を」の「を」にミセケチ「や」と傍書。(三) の「哉」以外、(三) 〓 (静) 〓 (国)。

(静) 迄 さき 隙 あ おく哉

(内) あ さき おく哉

(神1) * (神1) は他本「めかれ」を「あかれ」と作る。書き損じか。

(続) 咲て 哉

(続書) 咲て 哉

* (続書) は「咲く」の「く」に近い「て」にミセケチ「て」と傍書。(内) 系による校訂だろう。

(続内) 咲て 哉

(神2) 咲て 哉

* (神2) は「咲て」の「て」は「く」と混同しやすい形。

廿八番左 寄松恋「(神1)

(国) 杜敷

*正広・正徹は「寄松恋」・「寄杜恋」を数首詠んでいる。但し、「月よみの松」は本歌しかないが、「月よみの杜」は四五例を数えるので、書き損じとみる。

- (大) 杜
- (ノ) 杜
- (彰) 杜
- (明) 杜
- (伊) 杜
- (島) 杜
- (祐) 杜
- (書) 杜
- (三) 杜
- (静) 杜
- * (国) (内) (統) 以外は「松」ではなく「杜」。
- (内) 松
- (神1) 杜
- (統) 松
- (統書) 松
- (統内) 松
- (神2) 杜
- * (神2) が杜となっているのは注意。(内) による校訂が(統書) では行われ
た。
- (国) 契 こし我 世もつるに月よみの松のはうすき在 明のかけ
- * (国) は「松」につくる。但し、「松」と「杜」は紛らわしい。「杜」と書こう
として「松」になったものと思われる。「月よみの杜」は歌語。
- (大) 杜
- (ノ) わか

- (彰) 契り 杜
- (明) 契 こしわか世もつるに月よみの杜の葉薄 明の影 (五三オ)
- (伊) わか 杜
- (島) わか 杜
- (祐) ちきり わか 杜
- (書) わか 杜
- (三) わか 杜
- (静) 杜
- * (静) は(国) と異なり「杜」に作る。
- (内) わか 松 葉薄 有
- (神1) 我か 杜 葉 有
- (統) わか 読 の 有
- (統書) わか 読 の 有
- (統内) わか 読 の 有
- (神2) 契り わか 読 の 有
- 右 不破関(彰)
- (国) あらせよし人の心 もことのはもあはぬうき世そ不破の関守
- (大) 葉
- (ノ) 葉
- (彰) 葉
- (明) あらせよし人の心 もことのはもあはぬうき世そ不破の関守
- (伊) 葉 か
- * (明) 本「あはぬ」を(伊) は「あかぬ」と読んだか。
- (島) こゝろ 葉
- (祐) こゝろ 葉

(書) 言 葉 葉
 (三) 言 葉 葉
 (静) 言 葉 葉
 (内) 言 葉 葉
 (神1) 言 葉 葉
 (統) 言 葉 葉
 * (統) が「あらせかし」とする理由は不明。「か」は誤読か。
 (統書) 言 の
 (統内) 言 の
 (神2) 言 の
 廿九番左 冬待恋(島)(祐)
 (国) 人心 さためなき世を中空 にをしへて過る村時 雨かな
 (大) なか 村時 雨かな
 (ノ) 村時 雨かな
 (彰) 天 村時 雨かな
 (明) 人心 さためなき世を中空 にをしへて過る村時 雨哉
 (伊) 村時 雨哉
 (島) こころ 村時 雨哉
 * (島) は「さたる」の「る」に「め」と傍書。
 (祐) こころ そら 村時 雨哉
 (書) そら 村時 雨哉
 (三) よ 村時 雨哉
 (静) 村時 雨哉
 (内) 定 な 半天
 (神1) 定 な 半天

(統) 村時 雨哉
 (統書) 村時 雨哉
 (統内) 村時 雨哉
 (神2) 村時 雨哉
 右 河橋(書)
 (国) 八橋やくもてにかけて誰も世の一すちならぬ道 そくるしき
 (伊) 八橋やくもてにかけて誰も世の一すちならぬ道 そくるしき
 (祐) 八橋やくもてにかけて誰も世の一すちならぬ道 そくるしき
 (大) 八橋やくもてにかけて誰も世の一すちならぬ道 そくるしき
 (ノ) 八橋やくもてにかけて誰も世の一すちならぬ道 そくるしき
 (彰) やつ 八橋やくもてにかけて誰も世の一すちならぬ道 そくるしき
 (明) 八橋やくもてにかけて誰も世の一すちならぬ道 そくるしき
 (伊) 八橋やくもてにかけて誰も世の一すちならぬ道 そくるしき
 (島) 八橋やくもてにかけて誰も世の一すちならぬ道 そくるしき
 (書) 八橋やくもてにかけて誰も世の一すちならぬ道 そくるしき
 (三) 八橋やくもてにかけて誰も世の一すちならぬ道 そくるしき
 * (三) 〓 (静) 〓 (国)。
 (静) 八橋やくもてにかけて誰も世の一すちならぬ道 そくるしき
 (内) 八橋やくもてにかけて誰も世の一すちならぬ道 そくるしき
 * (内) は末句を「かなしき」と作る。独自本文。
 (神1) 八橋やくもてにかけて誰も世の一すちならぬ道 そくるしき
 * (神1) は末句「かなしき」。(内) と同文。

(統) ひと
 (統書) ひと
 (統内) たれ ひと
 (神2) たれ ひと

三十番左 寄鐘待恋

(国) 契 きやひとつ嵐 の松にきて面影 はこふ入 相 のこゑ
 (大) 契 きやひとつ嵐 の松にきて面影 はこふ入 相 のこゑ
 (彰) 契 きやひとつ嵐 の松にきて面影 はこふ入 相 のこゑ
 (明) 契 きやひとつ嵐 の松にきて面影 はこふ入 相 のこゑ
 (伊) 契 きやひとつ嵐 の松にきて面影 はこふ入 相 のこゑ
 (島) 契 きやひとつ嵐 の松にきて面影 はこふ入 相 のこゑ
 (祐) 契 きやひとつ嵐 の松にきて面影 はこふ入 相 のこゑ
 (書) 契 きやひとつ嵐 の松にきて面影 はこふ入 相 のこゑ
 (三) 契 きやひとつ嵐 の松にきて面影 はこふ入 相 のこゑ
 (静) 契 きやひとつ嵐 の松にきて面影 はこふ入 相 のこゑ
 * (静) 〓 (国)
 (内) 契 きやひとつ嵐 の松にきて面影 はこふ入 相 のこゑ
 * (内) は歌の右上に「上」と記す。書く順を間違えたからである。
 (神1) 契 きやひとつ嵐 の松にきて面影 はこふ入 相 のこゑ
 (統) 契 きやひとつ嵐 の松にきて面影 はこふ入 相 のこゑ
 (統書) 契 きやひとつ嵐 の松にきて面影 はこふ入 相 のこゑ
 (統内) 契 きやひとつ嵐 の松にきて面影 はこふ入 相 のこゑ
 (神2) 契 きやひとつ嵐 の松にきて面影 はこふ入 相 のこゑ

右 鞆中懐都(神1)(三)(彰)
 (国) 懐
 * (国) だけ「懐」。最終形態か。但し、意味的には「憶」ではないのか。
 書き損じの可能性もある。

(大) 憶
 (ノ) 憶
 (彰) 憶
 (明) 憶
 (伊) 憶
 (島) 憶
 (祐) 憶
 (書) 憶
 (三) 憶
 (静) 憶
 (内) 憶
 (神1) 憶
 (統) 憶
 (統書) 憶
 (統内) 憶
 (神2) 憶
 (国) すみた川昔 はさそな我 かたを 問へき鳥 も浪 のうへ哉
 (大) 隅田 方 わか とふ 波 上かな
 (ノ) 角田 むかし 方 とふ 波 上かな
 (彰) 角田 むかし 方 とふ 波 上かな
 (明) すみた川むかしはさそなわか方を とふへき鳥 も浪の上哉

(伊) むかし わか方 とふ なみ 上 (五三ウ)
 (島) むかし 我か方 「とふ とりもなみのうへかな
 (祐) むかし 「とふ とりもなみのうへかな
 (書) わか方 とふ かな
 (三) 河 とふ かな
 (静) * (静) || (国)。
 (内) 方 とふ なみ 上
 (神1) わか方 とふ 上
 (統) 田河むかし わか、 とふ なみ
 (統書) 田河むかし わか、 とふ なみ
 * (統書) は「な」に「ゝ」にミセケチ「み」と傍書。書き損じだろう。
 (続内) 田河むかし わか、 とふ なみ
 (神2) 田河むかし わか、 とふ なみ
 卅一番左 逢不遇恋」(ノ)
 (国) 板 ひさし昔 は月やもらさらむあれてくるしき不破の山かせ
 (大) 荒て ふは
 (ノ) むかし ん ふは
 (彰) ん ふは
 (明) いたひさしむかしは月やもらさらんあれてくるしきふはの山かせ
 (伊) いた ん 風
 (島) いた ん 風
 (祐) いた ん 風
 (書) ん 風

(三) むかし ん
 (静) * (静) || (国)、(三)も「むかし」「ん」以外は同一表記。
 (内) * (内)は「もらすらん」の「す」ミセケチ「さ」とする。
 (神1) むかし ん 風
 (統) むかし ん 風
 (統書) むかし ん 風
 (続内) むかし ん 風
 (神2) むかし ん 風
 右 江上舟
 (明)は「江上舟」に練引、「水郷鷺 川風におほくむれるる鷺を立さらせる布
 を跡にのこして」、「松下集」には「水郷鷺 九四四 河かせにひろくおりる鷺
 ぞたつさらせる布を跡にのこして」とある)
 (国) 江上舟
 * 正広は最終形態にするときに、この歌については、(大)まで戻ったのだろう。
 つまり、(明)での改訂を再改訂したということになる。
 (大) 江上舟
 (ノ) 江上舟
 * (ノ) || (大)
 (彰) 江上舟
 (明) 水郷鷺
 (伊) 水郷鷺
 (島) 水郷鷺
 (祐) 水郷鷺

* (明) 系のみ「水郷鷺」

(書) 江上舟

(三) 江上舟

* (三) 〓 (静) 〓 (国)

(静) 江上舟

(内) 江上舟

(神1) 江上舟

(続) 江上舟

(続書) 江上舟

(続内) 江上舟

(神2) 江上舟

(国) なには江や浪

に釣 するあまを舟うかふはしつむ道そはかなき
* (国) は、(大)・消された(明)と比較して「はななきあまの小舟にも」を「浪に釣りするあまを舟」に、さらに「うかふ道しる浪の上哉」を「うかふはしつむ道そはかなき」と改訂した。つまり、題を元に戻しただけではなく、歌の改訂して新たにしたのである。よって、(明)は中間形態を示すといっただろう。推敲の跡が偲ばれる好例である。

(大) 難 波江やはかなきあまの小舟にもうかふ道しる浪の上 哉

* (大) は改訂前の原文と考えてよいのではないか。

(ノ) 難 波 はかなきあまの小舟にもうかふ道しる浪の上 かな

* (ノ) 〓 (大) 〓 (彰)、(大)は(続)系が同一本文。

(彰) 難 波 はかなきあまの小舟にもうかふ道しる浪の上 かな* (彰)

〓 (大)

(明) 川風におほくむれある鷺 そ立 さらせる布を跡 にのこして

*消された本文は

難 波江やはかなきあまの小舟にもうかふ道しる浪の上 哉

であり、和歌全体に傍線で消去跡、(大)と同じ本文である。

(伊) むれいる

(島) むれるる

(祐) むれるるさき たつ

(書) 難 波 はかなきあまの小舟にもうかふ道しる浪の上 哉

* (書) はおそらく他筆で「はかなきあまの」にミセケチ「浪につりする」、「にも」道しる浪の上かな」にミセケチ「はしつむ道そはかなき」と傍書。(内)による訂正か。

(三)

(三)

* (三) 〓 (静) 〓 (国) 〓 (神1) 〓 (内)。

(静)

* (静) は「なにや江や」以降「浪に釣」にミセケチ、以後「するはかなき」まで傍線で消去し、「はかなきあまのをふねにもうかふ道しる波の上哉」と傍書。これは(大)と同じ。やはり、(大)系で校訂していると見てよい。(大)を選んだ理由は最古の写本だからか。今のところ不明である。(大)は(ノ)にも絡んでおり、独自の伝来・享受をもったと考えられる。

(内) なには江や波 に釣 するあま小舟浮 ふはしつむ道そはかなき

* (内) の本文は、(国)と同じである。やはり、(内)が(明)と(国)に間に成立したことを物語る。

(神1) 難 波江や浪 につりするあま小舟うかふはしつむ道そはかなき

* (神1)は(内)・(国)と同文。

(続) 難 波江やはかなきあまの小舟にもうかふ道しる波のうへかな

* (続) 「はかなきあまの小舟にもうかふ道」に「波に釣するあま小舟うかはしつむ道そはかなき」と傍書。異文は(内)・(国)と同じ。

(続書) 難 波江やはかなきあまの小舟にもうかふ道しる波のうへかな

(続内) 難 波江やはかなきあまの小舟にもうかふ道しる波のうへかな

(神2) 難 波江やはかなきあまの小舟にもうかふ道しる波のうへかな
* (統) 系は(大)と同文。

卅二番左 寄山恨恋(国)(内)(静)

* (神1) は「根」にミセケチ「恨」。書き損じだろう。

(国) 色かはる人の心 のあわた山中 くこえし関 の岩 かと

* (国) は「あわた山」と作るが、通常の歴史的仮名遣いでは、「あはた山」が正しい。

(大) は

(ノ) は

* (ノ) 〓 (大)

粟田

(明) 色かはる人の心 のあはた山中 くこえし関 の岩 かと

(伊) は せき

(島) は せき

(祐) は せき

(書) は せき

(三) は せき

(静) は せき

* (静) 〓 (国)。

(内) は いは

(神1) は いは

(統) は なか

(続書) は なか

* (続書) は「かは」が「見」に見えるのでミセケチ「かは」と傍書。書き損じだろう。

(続内) は なか
(神2) は なか
* (神2) は「心の」の「心」にミセケチ「人」と傍書。書き損じだろう。

右 山館杉(内)(書)(彰)

(続書) 「山路杉」の「路」にミセケチ「館」。(内)系による校訂か。

(続内) 山館杉

(神2) 山路杉

(国) 山川やまへになかれてひとりすむかり庵におしき杉 の村 立

* (国) は「かり庵」は「かりいほ」と読ませるか、それとも「かりほ」か。おそらく後者だろう。

(大) 前 ほ たち

(ノ) 前 ほ を

(彰) 前 ほ を

(明) 山川や前 になかれてひとりすむかりほにをしき杉 の村 立

(伊) 前 ほ を

(島) 前 ほ を

(祐) 前 ほ を すき むら

* (祐) は(島)の「をしき」を「おしき」と作る。

(書) 河 独 す ××庵 を むら

(三) 河 独 す ××庵 を むら

* (三) 〓 (静)。こちらは「庵」〓いほりと読んでいるのだろう。

(静) ××庵

* (静) は「庵」にミセケチ「かり庵イ」と傍書。書き損じか。不明。(大)は「かりほ」(国)は「かり庵」。

(内) 前

* (内) は(国)と同じく「おしき」(他本「をしき」と作る。

(神1) 前

(統) 前

* (統) は(内)と同じく「おしき」。

(統書)

(統内)

(神2)

ほ

ほを

ほ

ほ

ほ

ほ

たち

たち

たち

たち

たち

たち

卅三番左 稀問恋(神1)

(国)

(大)

(ノ)

(彰)

(明)

(伊)

(島)

(祐)

(書)

(三)

(静)

(内)

* (内) は他本「花橘の」とするに対して「花橘に」と作る。一種の独自本文か。

(神1)

* (神1) は「橘に」と(内)と同文。

限 あれは花 たち花 の雪の袖 又 露はらふよもきふのやと

はな 橘 はな 橘 また 宿 宿

かきり 橘 また 宿

かきり 橘 また 宿

かきり 橘 また 宿

かきり 橘 また 宿

かきり 橘 また 宿

かきり 橘 また 宿

かきり 橘 また 宿

かきり 橘 また 宿

かきり 橘 また 宿

かきり 橘 また 宿

かきり 橘 また 宿

かきり 橘 また 宿

かきり 橘 また 宿

かきり 橘 また 宿

(統) 限り はな に

(統書) 限り はな に

* (統書) は「たち花の」の「の」にミセケチ「に」と傍書。(内)系による校訂か。

(統内) 限り はな に

(神2) 限り はな に

* (神2) は「たち花の」と作る。これが原形。

右 夕鳥(三)

(国) 村 すゝめ声 あつまりて又 そ立 ねくらや浅 き庭のさゝ竹

(大) 村 すゝめ声 あつまりて又 そ立 ねくらや浅 き庭のさゝ竹

* (大) は「竹」の字が本の「喉」の箇所故よく読めない。

(ノ) 雀 こゑ たつ

(彰) 村雀 こゑ たつ

(明) 村雀 こゑ たつ

(伊) 村雀 こゑ たつ

(島) 村雀 こゑ たつ

(祐) 村雀 こゑ たつ

(書) 村雀 こゑ たつ

(三) 雀 こゑ たつ

* (三) 〓 (静)。

(静) 雀 こゑ たつ

(内) 雀 こゑ たつ

* (内) は他本「庭のさゝ竹」とするのを、「雪のさゝ竹」と作る。独自本文。

(神1) 雀 こゑ たつ

* (神1) は「雪のさゝ竹」と作り、(内)と同文。

あさ 雪の

(統) むら雀 また たつ あさ
 *(統) は他本同様「庭のさゝ竹」
 (統書) むら雀 また たつ あさ
 (統内) むら雀 また たつ あさ
 (神2) むら雀 また たつ あさ
 卅四番左 寄衣恋(鳥)(祐)
 (国) たち初 し月日はいつそさ夜衣 恨 をそへてひとり臥ぬる
 (大) 立
 (ノ) そめ 長 ふし
 *(ノ) は他本「衣」とするのに、「長」と作る。書き損じか。(大)も「衣」
 (彰) 立 そめ うらみ 独 ふし
 (明) たちそめし月日はいつそさ夜衣 恨 をそへてひとりふしぬる
 (伊) そめ うらみ 添 て ふし
 (鳥) そめ うらみ ふし
 (祐) そめ ころもうらみ ふし
 (書) そめ ふし
 (三) よ ふし
 (静) よ ふし
 (内) そめ よ ふし
 (神1) そめ うらみ ふし
 (統) そめ うらみ 独 ふし
 (統書) そめ うらみ ふし
 (統内) たちそめ うらみ ふし
 (神2) そめ うらみ ふし

右 河上鳥(彰)
 (国) 夢の世をしるや江 川の臥柳 ふさてねふれる鷺の心 は
 (大) 知 や ふし
 (ノ) ふし
 (彰) 夢の世をしるや江 川の臥柳 ふさてねふれる鷺の心 は
 (明) 夢の世をしるや江 川の臥柳 ふさてねふれる鷺の心 は
 (伊) ふさてねふれる鷺の心 は
 (鳥) ふしやなき ころろ
 (祐) ふし ころろ
 (書) ふし ころろ
 (三) 河 ふし
 (静) ふし
 (内) ふし
 (神1) えかは ふし
 (統) えかは ふし
 (統書) えかは ふし
 (統内) えかは ふし
 (神2) えかは ふし
 卅五番左 卜恋
 (国) おとろふる末 いかならん石 神 もあかりての世のうらやまさしき
 *(国) は他本「世はうらやまさしき」を「世のうらやまさしき」と作る。(静) が「世の」なので、最終形態か。だが、「あかりての世」ときて、また「の」がくるのはやや不自然。書き損じの可能性も否定できない。
 (大) は
 (ノ) は

(彰) を

(明) おとろふる末 かならん石 神 もあかりての世はうらやまさしき

(伊) は

(島) は

(祐) すゑ

(書) む

(三) は

(静) は

* (静) は(国)と異なり、「世は」と作る。

(内) すゑ

* (内) も「世はうらやまさしき」とする。(国)の段階で先祖返りⅡ初期形態返りをしたか。

(神1) む

(続) かみ

(続書) いしかみ

* (続書) は「いしかえや」の「えや」にミセケチ「みも」と傍書。(内)系による校訂か。

(続内) いしかみを

* (続内) は「いしかみを」と作る。(続)系は(続内)・(神2)でここに乱れがある。

(神2) いしかみや

* (神2) は「いしかみや」とする。(続書)は「み」を「え」と読んだか。

右 山居夕(神1)(書)

(国) さひしさもうきも限りはなき世哉 太山おろしに夕 暮 の雨

(大) かきり

(ノ) かきり

(彰) かきり

(明) さひしさもうきもかきりはなき世哉 太山おろしに夕 暮 の雨

(伊) な

(島) かきり

(祐) かきり

(書) かな

* (祐) は「おろし」を「をろし」と作る。仮名遣いでは「おろし」でよい。

(三) ×

* (三) Ⅱ(静)。

(静) ×

(内) ×

(神1) かきり

(続) 深

(続書) 嵐

(続内) くれ

(神2) くれ

卅六番左 寄海松恋

(国) わか思 ひ入 ぬる磯 のいつまてかよる浪しらて人をこふらん

(大) 我思

(ノ) おも

(彰) 我思

(明) わかおもひ入 ぬる磯 のいつまてかよる浪しらて人をこふらむ

(伊) おも

恋ふ

(島) おも いそ

(祐) おも いそ

(書) 我かおも 恋らむ

(三) × 波

* (三)と(静)は共に「思入ぬる」と表記。

(静) × 恋ら

(内) 我 迄か 波

(神1) おも 波

(統) おも 波

(統書) おも 波 と

* (統書)は末句が「とふらん」となっている。独自本文。書き損じか。

(統内) おも 波

(神2) おも 波

* (神2)の「こふらん」の「こ」の字母が「古」、これを「と」と読み誤ったのが(統書)か。

右 樵路日暮(国)(静)(ノ)(三)(彰)

(国) 山人のましはやつく夕日影 雲のはうこく岩のかけ道

*私家集大成は「雲のはら」と読む。たしかにそうも見えるが、それでは意味がとれない。(大)・(明)のように「雲のはう」と読み、「こく」と続けることにする。この字は「う」にも読める。

(大) 柴

* (大)は「はうふく」の「ふ」ミセケチ「こ」とする。

(ノ) 葉

(彰) 山人のまし葉やつく夕日影 雲のはうこく岩のかけ道

(伊) 葉 う

* (伊)は「うすく」の「す」ミセケチ「こ」とする。連想による誤写。

(島) 葉 かけ

(祐) 葉 かけ

(書) 葉

(三) 葉

* (三) || (静) || (国)。

(静) 真柴 ま暮 のみ

(内) 真柴 ま暮 のみ

* (内)は他本「夕日影」を「夕ま暮」、「雲のはうごく」を「雲のみうこく」と作る。独自本文。

(神1) 葉 まくれ

* (神1)は「夕まくれ」が(内)と同文。但し、「雲のは」は他本と同文。

(統) 真柴 みち

* (統)は「日影」に「聞くれイ」、「雲のは」の「は」に「みイ」と傍書。異文は(内)と同じ。

(統書) 真柴 みち

* (統書)は「日影」に「聞くれ」、「雲のは」の「は」に「み」とそれぞれ傍書。

(内) 系と同文。

(統内) 真柴 みち

* (統内)は「日影」に「聞くれイ」と傍書。「雲のみ」には傍書なし。

(神2) 真柴 みち

卅七番左 契経年恋

(国) 昔 たに猶 其 上 分る路

(大) 昔 たに猶 其 上 分る路

(ノ) なを 上 路
 (彰) その 分る 路
 (明) 昔 たに猶 其上 の草の名よわくる山路の露のまもなし
 (伊) むかし 上 路
 (島) むかし なをそのうへ
 (祐) むかし なをそのうへ
 (書) 上 路
 (三) その 分る 路
 *(三) || (静)、但し「その」以外。
 (静) 分る 路
 (内) その 分る 路
 (神1) その 路
 (統) むかし なをその 分る 路
 (統書) むかし なをその 分る 路
 *(統書) は「そのうへ」の「うへ」にミセケチ「かみ」と傍書。(内)系による校訂。
 (統内) むかし なをその 分る
 (神2) むかし なをそのうへ 分る 路
 右 河水清
 (国) 神 も身を合 て君 と清 くすめ心 の水に宮 川のなみ
 *(国) は、(大)・(明)系本「神に」を「神も」、「誰も」を「君と」と作る。
 (内) も同じ。最終形態か。「君戸」の「戸」にミセケチで「と」と傍書。これも親本をそのまま透写したか。神が身を合わせて君と、という解釈だ。
 (大) に たれもきよ みや 波
 (ノ) に 誰 も みや

(彰) に あはせてたれも 波
 (明) 神 に身をあはせて誰 も清 くすめ心 の水にみや川の浪
 (伊) に あはせて誰 も みや 波
 (島) に あはせて誰 も みや 浪
 (祐) に あはせて誰 も こゝろ みや 浪
 (書) に 誰 も みや 浪
 (三) に あはせて誰 も × 河 波
 *(三) || (静)。
 (静) に あはせて誰 も 浪
 *(静) は(国)と異なり、(大)・(明)と同じ。
 (内) * (内) || (国)。
 (神1) も 浪
 (統) かみに あはせてたれもきよく 波
 *(統) は「神に」の「に」に「もイ」、「たれも」に「君とイ」と傍書。異文は(内)・(国)と同じ。
 (統書) かみに あはせてたれもきよく 波
 *(統書) は「かみに」の「に」に「も」、「たれも」に「君と」と傍書。(内)系と同文。
 (統内) かみも あはせてたれもきよく 波
 *(統内) は、「たれも」に「君とイ」と傍書。また、「かみも」とする。(内)と同じ。
 (神2) かみに あはせてたれもきよく 波
 *(神2) が(統)系の原文。
 卅八番左 寄涙恋(神1)

(国) 涙 川 人のかよはぬ中絶て紅 なかす袖の上かな
 (大) 涙 たえ うへ
 (ノ) なみた たえ くれなる
 (彰) たえ くれなる
 (明) 涙 川 人のかよはぬ中たえて紅 なかす袖の上かな
 (伊) 泪 かは たえ そて うへ
 (島) なみた たえ くれなる うへ
 * (島) は(明)の「かよはぬ」を「かよはん」と誤写した。
 (祐) なみた む たえ くれなる そて うへ
 * (祐) は(島)を受けた。
 (書) そて うへ
 (三) 河 も たえ そて うへ
 * (三) は他本「人の」を「人も」と作る。(静)はミセケチで消しているが、「人も」とあった本を写したのか、書き損じ(誤写)かは不明。
 (静) たえ うへ
 * (静) は「人も」の「も」にミセケチ「の」。同筆か。
 (内) なみた 終 てくれなる うへ哉
 (神1) たえ くれなる
 (続) 泪 河 ん たえ くれなる そて うへ
 * (続) の「かよはん」は(島)同様誤写・書き損じだろう。
 (続書) 泪 河 ん たえ くれなる そて うへ
 (続内) 泪 河 ん たえ くれなる そて うへ
 (神2) 泪 河 ん たえ くれなる そて うへ

(国) もる人はいなはかりほの冬されに独 時 雨をはこふ雲 哉
 (大) ひとり かな
 (ノ) ひとり かな
 (彰) ひとり
 (明) もる人はいな葉かりほの冬されにひとり時 雨をはこふ雲 哉
 (伊) 葉 ひとり
 (島) 葉 ひとり かな
 (祐) 葉 ひとり くもかな
 (書) 葉 ひとり
 (三) ひとり
 * (三) 〓 (国)。但し「ひとり」以外。
 (静) 葉
 * (静) 〓 (国)。但し、「葉」以外。
 (内) 守人 つ
 * (内) は他本「ひとり」を「ひとつ」と作る。「り」を「つ」を読んだか。
 (神1) 守人 葉 ひとりしくれ
 (続) 守人 ひとりしくれ
 * (続) は「ひとり」の「り」に「つイ」と傍書。異文は(内)と同じ。
 (続書) 守人 ひとりしくれ
 (続内) 守人 ひとりしくれ
 (神2) 守人 ひとりしくれ
 卅九番左 前世恨恋(島)(祐)
 (国) しらすわれ真葛 か原 に捨 し身の露や涙 に消 帰 ららん
 (大) 我 まくす はら
 (ノ) まくす 涙 かへ

* (ノ) の「はらに」の「に」は「も」にも見える。

(彰) まくす すて かへ

(明) しらすわれまくすか原 にすてし身の露や涙 に消 かへるらん

(伊) まくす すて かへ

(島) まくす すて かへ

(祐) まくす はら すて なみた きえかへ

(書) ま すて かへ

(三) 我 まくす きへかえ

* (三) は「きへかえる」と表記。(三) には仮名遣いの間違いが多い。

(静) 我 まくす きえかへ

(内) きえ

(神1) すて きえかへ

(統) か きえかへ

(統書) か きえかへ

(続内) か 泪 きえかへ

(神2) か 泪 きえかへ

右 古寺夕嵐 (三)

(国) 今も世にさそはましかは鷺の山鐘 を嵐 の夕暮 のこゑ

* 私家集大成は「銭」と読んでいるが、「鐘」でよい。

(大) いま

* (大) は「こゑ」の二字が薄いかつ喉で実に読みにくい。

(ノ) いま あらし

(彰) いま

(明) いまも世にさそはましかは鷺の山鐘 を嵐 の夕暮 のこゑ

(伊) いま あらし 声

(島) いま かね あらし くれ

(祐) いま かね あらし くれ

(書) いま

(三) あらし 声

(静) あらし 声

* (静) は、「鐘」にミセケチし、「童」と傍書。どこかで勘違いしたか。

(内) いま あらし くれ

(神1) あらし

(統) かね

(統書) かね

(続内) かね

(神2) かね

四十番 左 寄柳恋

(国) くしのはを心 に引 てかよへともわかてにかくる黒髪もなし

(大) 我 て くるかみ

(ノ) 手 くるかみ

(彰) 我か手 くるかみ

(明) くしのはを心 に引 てかよへともわかてにかくるくるかみもなし

(伊) くるかみ

(島) こゝろ くるかみ

(祐) こゝろ くるかみ

(書) こゝろ くるかみ

* (書) は「かへる」の「へ」にミセケチ「く」と傍書。同筆か。

(三) 我手 くるかみ

* (三) 〓 (静)。

(静) 櫛の 我手 くらかみ
 (内) 櫛の 我手 くらかみ
 (神1) 櫛の ひき 我手 くらかみ
 (統) 手 手 くらかみ
 (統書) 手 手 くらかみ
 (続内) 手 手 くらかみ
 (神2) 手 手 くらかみ

右 樵夫婦 (神1) (彰)

(国) なげきこるうき世のさかよ山人もいきつく程 はやすむ習 を
 *私家集大成は「なげ木」とし、「木」と記されるが、「なげきこる」は「歎き」と「木こる」の掛詞だから、表記は仮名の「き」でよしとする。(国) は「さかよ」。最終形態か。但し、(大)・(明) は「うき世の坂に」と作る。(国) は「さかよ」。

(大) 坂に 休むならひ
 (ノ) 坂に 休むならひ
 * (ノ) と (大) は「休む」で同一表記。

(彰) 坂に ほと ならひ
 (明) なげ木こるうき世の坂に山人もいきつく程 はやすむならひを」
 (五五ウ)

(伊) 木 坂に ほと ならひ
 (島) 木 坂に ほと ならひ
 (祐) 木 坂に ほと ならひ
 (書) 坂に ほと ならひ
 (三) は ほと ならひ
 * (三) は末尾が「は」となる。(静) 初期本と同じ。(三) 〓 (静) 初期。

(静)

* (静) は「習は」の「は」にミセケチ「を」。同筆か。
 「さかよ」としているのは、(国)・(内)・(統)・(静)。

(内) 坂 ならひ
 * (内) は「うき世の坂よ」と作る。これはこれでよい。

(神1) 息つ ほと 休むならひ
 (統) 息つ ほと 休むならひ
 * (統) は (内) と同じ本文。

(続書) 息つ ほと ならひ
 (続内) 息つ ほと ならひ
 (神2) 息つ ほと ならひ

四十一番左 憚人不逢恋」(国) (静)

(国) かよひしはいつれの年 そ文 をさへ安くとをさぬ文字の関守
 * (国) は (大) (明) 系が「あけて」とするのを「安く」とする。(内) (神1) も同じ。

(大) あけて もし
 (ノ) あけて もし
 (彰) ち あけて もし
 * (彰) は他本「かよひし」を「かよひち」と作る。書き損じか。

(明) かよひしはいつれの年 そふみをさへあけてとをさぬもの関守
 (伊) ふみ あけて もし
 (島) ふみ あけて もし
 (祐) ふみ あけて もし
 (書) ふみ あけて もし
 (三) あけて もし
 (静) あけて もし

* (静) は (国) の「安く」ではなく、(大)・(明) 系の「あけて」

(内)

* (内)・(神1) 〓 (国)。

(神1)

(統) 思ひ

* (統) は「思ひ」に「かよイ」、「明て」に「やすくイ」と傍書。異本は(内)と同じ。

(続書)

(続内)

* (統内) は「ふみ」の「み」が「し」に読める。

(神2)

* (統) 系は「おもひし」となっている。独自本文。

(大)

(ノ)

(彰)

* (彰) は「一むら」の「むら」にミセケチ「つれ」と傍書。同筆か。

(明)

(伊)

(島)

(祐)

(書)

(三)

(静)

(内) むか

(神1) むか

(統) むか

(続書) むか

(続内) むか

(神2) むか

え

いり

むら

むら

むら

吹れて

かへ

かへ

かへ

かへ

さき

四十二番左 寄鳥恋(内)(ノ)

(国) はね かはすためしにはあらて鳥の子をなとてかさぬる中 と成け

ん

* (国) は (大) (明) 系末句「契なりけ」を「中と成けん」と作る。(内) も同

じ。最終形態か。「契」か「中(〓仲)」で悩んだのだろう。「かさぬ」+「中」

は正徹にあるが、「かさぬ」+「契」はない。これが決定打か。

(大) 羽ね

(ノ) を

* (ノ) がどうして字余りの「はねをかはす」としたのか。書き損じ故だろう。

(彰)

* (彰) は語尾が(三)と同じく、「なるらん」と作る。理由は不明。

(明) はね かはすためしにはあらて鳥の子をなとてかさぬる契 なりけん

(伊) 羽×

* (伊) は「契なりけん」を「契成らん」と誤写したか

(島)

(祐)

(書)

(三)

* (三) は末句が(大)・(明) 系に近いが、末尾は「らん」と独自本文。

(静) 羽× 契成けん

* (静) は末尾が(大)(明)と同じ。

(内) 羽×

* (内) 〓 (神1) 〓 (国)。

(神1) 羽×

* (神1) は(内)・(国)と同文。末句は「中と成けん」

(統) 羽×

* (統) は「契なる覧」に「中と成けんイ」と傍書。異本は(内)と同じ。

(統書)

(続内)

(神2)

* (統) 系は末句「契りなるらん」と作る。

右 旅宿夕(内)(三)(彰)

(国) 日暮 たりよし宿 からむ空 山蔦ちる嵐 夢ち吹 とも

(大) くれ

* (大) 「空」に「ムナシ」という左注

(ノ) くれ

* (ノ) は「穴」に「空」敷」と傍書。「穴」と「空」はくずし字が似ている故

か。「空」でよし。

(彰) くれ

(明) 日くれたりよしやとからむ空 山蔦ちる嵐 夢路吹 とも

(伊) くれ

(島) くれ

(祐) くれ

* (祐) は(島)の「空山」を「空の山」と作る。訓みはどの本も「うつのや

ま」だろう。

(書) くれ

(三) くれ

* (三) 〓 (静)。

(静) くれ

(内) やと

* (内) は他本「空山」「空の山」を「うつの山」と作る。(静)・(三)と同一表

記。

(神1) くれ

* (神1) は「やとまらん」と作る。「よしやとまらん」と読んだ。

(続書) は「やとまらん」と作る。「よしやとまらん」と読んだ。

(続内) やとまらんうつの山

(神2) やとまらんうつの山

* (統) 系は「よしやとまらん」と作る。独自本文。

四十三番左 逢後増恋(神1)

(国) 漕 向 ふ人の心 のたかせ舟 こえて中くしつむ浪 かな

(大) こきむか

(ノ) むか

(彰) こきむか

(明) 漕 むかふ人の心 のたかせ舟 こえて中くしつむ浪 かな

(伊) こきむか

(島) むか

(祐) こきむか

こきむか ころろ かね なか

(書) むか
 (三) こき 哉
 (静) こき
 * (静) は「たかせ」の「せ」にミセケチ「せ」と傍書。「たかせ」の「せ」の上に消し跡があるので、誤写としたのだろう。
 (内) こきむか 船 し 中 哉
 * (内) は「こえて」を「こして」と作る。末句、他本「しつむ浪」を「しつむ中」と作る。独自本文。
 (神1) こきむか こゝろ 船 へ 中
 * (神1) は末句「中かな」が(内)と同文。但し、(内)は「こして」を(神1)は「こへて」に作り、他本と同文。
 (統) むか 高 しなか
 * (統) は(内)と同じ。
 (統書) むか 高 し なみ
 * (統書) は末句「なみ」とする。
 (統内) むか 高 し なみ
 (神2) むか 高 し なみ
 * (統) 系は「なみかな」が原形。(統) 系は「こして」となる。独自本文。

右 嶺上雲深
 (国) わたつ海にみれはいく重そ立 田山 峯こす雲の奥 つ白 浪
 (大) へ 嶺
 (ノ) へ 津しら
 (彰) 見 へ 嶺 津
 (明) わたつ海にみれはいくへそ立 田山 嶺こす雲の奥 津白 浪
 (伊) 嶺

(島) へ 嶺 しら
 (祐) へ やまみね おき しら
 (書) へ
 (三) つく 嶺 おき 波
 * (三) も「いつく」とする。(三) = (静)。
 (静) つく たつた 嶺 おき 波
 * (静) は他本「いくへ」に作るのを「いつく」とする。独自本文。
 (内) 津 嶺 おき 波
 (神1) 見 嶺 沖津
 (統) み見 へ龍 嶺 沖 しら
 (統書) み見 へ龍 嶺 沖津 しら
 (統内) み見 へ龍 嶺 沖津 しら
 (神2) み見 へ龍 嶺 沖津

四十四番左 寄月逢恋(島)(祐)
 (国) しるらめやねよとのかねを先 立て今夜は出ぬ山のはの月
 * (国) は、(明) の「よこひ」を正しく「こよひ(今夜)」と改めたか。
 (大) 鐘 こよひ
 (ノ) 鐘 こよひ いて ×端
 (彰) 鐘 こよひ いて
 (明) しるらめやねよとの鐘 を先 立てよこひはいてぬ山のはの月
 * (明) が「よこひ」としたのは誤写か。意味的には「こよひ」しかない。(明) は「よ」は「今」と書こうとして、途中で「よ」に変えたとも読める。すべてはこの書き損じに始まるか。
 (伊) 鐘 よ本ノひ いて
 * (伊) は「よひ」を変だと感じて「本ノ」と傍書した。(明) の書き損じであ

ろう。

(島) は(明)の「よこひ」と訓み、そのまま記した。 よこひ いて

(祐) * (祐)は(島)を受けた。 よこひ いて

(書) * (祐)は(島)を受けた。 こよひ いて

(三) * (三) || (静)、「立て」以外は(国)とも同一表記。 たてゝ

(静) * (静)は「先立」の「立」にミセケチ「たて」と傍書。「立」をやや書き誤ったか。 たてて

(内) * (静)は「先立」の「立」にミセケチ「たて」と傍書。「立」をやや書き誤ったか。 鐘 鐘

(神1) * (神1)は「先立」の「立」にミセケチ「たて」と傍書。「立」をやや書き誤ったか。 さきたてゝ今宵 いて

(続) * (続)は「いなり」の「り」に「はい」と傍書。異本が(内)と同じ。 さきたてゝ今宵

(続書) * (続書)は「いなり」の「り」に「はい」と傍書。異本が(内)と同じ。 さきたてゝ今宵

(神2) * (神2)系は「いなり山」と作る。(神2)は「あらしに」とあるが、「に」は「よ」とも読める。(続書)は「に」と読んだ。(続)は「よ」と読んだか。 さきたてゝ今宵

右 山家嵐(書)(彰)

(国) 山家嵐(書)(彰) しかりとて又 いつくにかいなは山 松の嵐 にわれないさめそ

* (国) は他本「嵐よ」を「嵐に」に作る。最終形態か。 よ我

(大) * (大)は「いなり」の「り」に「はい」と傍書。異本が(内)と同じ。 よ

(ノ) * (ノ)は「いなり」の「り」に「はい」と傍書。異本が(内)と同じ。 あらしよ我

(彰) * (彰)は「いなり」の「り」に「はい」と傍書。異本が(内)と同じ。 あらし

(伊) * (伊)は「いなり」の「り」に「はい」と傍書。異本が(内)と同じ。 しかりとて又 いつくにかいなは山 松の嵐 よわれないさめそ

(島) * (島)は「いなり」の「り」に「はい」と傍書。異本が(内)と同じ。 また 又

(祐) * (祐)は「いなり」の「り」に「はい」と傍書。異本が(内)と同じ。 また 又

(書) * (書)は「いなり」の「り」に「はい」と傍書。異本が(内)と同じ。 あらしの我

(三) * (三)は「あらしの」と作る。書き損じか。 あらしの我

(静) * (静)は「いなり」の「り」に「はい」と傍書。異本が(内)と同じ。 よ

(大) * (大)は「いなり」の「り」に「はい」と傍書。異本が(内)と同じ。 あらしの我

(ノ) * (ノ)は「いなり」の「り」に「はい」と傍書。異本が(内)と同じ。 あらしの我

(彰) * (彰)は「いなり」の「り」に「はい」と傍書。異本が(内)と同じ。 あらしの我

(明) * (明)は「いなり」の「り」に「はい」と傍書。異本が(内)と同じ。 あらしの我

(伊) * (伊)は「いなり」の「り」に「はい」と傍書。異本が(内)と同じ。 あらしの我

四十五番左 聞恋

(国) * (国)は「いなり」の「り」に「はい」と傍書。異本が(内)と同じ。 いかにしてかりにも人を三瀬川ひとりわたらぬ道はあれとも

(大) * (大)は「いなり」の「り」に「はい」と傍書。異本が(内)と同じ。 いかにしてかりにも人を三瀬川ひとりわたらぬ道はあれとも

(ノ) * (ノ)は「いなり」の「り」に「はい」と傍書。異本が(内)と同じ。 いかにしてかりにも人を三瀬川ひとりわたらぬ道はあれとも

(彰) * (彰)は「いなり」の「り」に「はい」と傍書。異本が(内)と同じ。 いかにしてかりにも人を三瀬川ひとりわたらぬ道はあれとも

(明) * (明)は「いなり」の「り」に「はい」と傍書。異本が(内)と同じ。 いかにしてかりにも人を三瀬川ひとりわたらぬ道はあれとも

(伊) * (伊)は「いなり」の「り」に「はい」と傍書。異本が(内)と同じ。 いかにしてかりにも人を三瀬川ひとりわたらぬ道はあれとも

(島)

(祐)

(書)

(三)

(静)

(内)

(神1)

(続)

(続書)

(続内)

(神2)

右 鞆中衣(国)(静)(神1)(三)

(国) 草枕露しく野へのぬれ衣 身をうらならは名にや立まし

*「身をうらならは」という表現は、この歌のみ。正徹語彙でもない。

(大) の た、

(ノ) の た、

(彰) の た、

(明) 草枕露しく野へのぬれ衣 身をうらならは名にやたまし(五六ウ)

(伊) た、

(島) ころも た、

(祐) ころも た、

(書) た、

(三) た、

(静) た、

(内) た、

(内)

(神1)

(続)

(続書)

(続内)

(神2)

四十六番左 寄塵恋

(国) この葉に塵をたにともえそかけぬとこ夏 しらぬ中の垣 ほは

(大) は ちり なつ

(ノ) ちり なつ

(彰) ちり なつ

* (彰) は「はそかけぬ」の「は」にミセケチ「え」と傍書。同筆か。

(明) ことの葉にちりをたにともえそかけぬとこ夏 しらぬ中のかきは

(伊) ちり なつ

(島) ちり なつ

(祐) ちり なつ

(書) ちり なつ

(三) ちり なつ

* (三) || (静) ちり なつ

(静) は ちり ほとか

(内) は ちり ほとか

* (内) は「塵」のくずし字が特殊である。他本「えそかけぬ」は「ほとかけぬ」としか読めない。だが、まだ未確定である。「えそかけぬ」として失敗した

のかもしれない。

(神1) かき

(統) 言のは なつ
 (統書) 言のは ちり なつ
 (統内) 言のは ちり なつ
 (神2) 言のは ちり なつ

右 田家鳥(彰)

(国) 旅人の行 ての小田のなるこ縄 引にまかせてたつる鳥かな
 (大) ゆく ひく 哉
 (ノ) ゆく ひく

(明) 旅人のゆくての小田のなるこ縄 ひくにまかせてたつる鳥哉

(伊) ゆく ひく 哉
 (島) ゆく ひく 哉
 (祐) ゆく ひく 哉
 (書) ゆく ひく 哉
 (三) 手 哉
 (静) 手 哉
 (内) 立る 哉
 (神1) ひく 哉
 (統) 鳴子なは 立る 哉
 (統書) 鳴子なは 哉
 (統内) 鳴子 哉
 (神2) 鳴子なは 哉

四十七番左 契待恋
 (国) 深にけり秋を田面にくる鴈の声にもいとそふ涙かな

(大) こゑ なみた哉
 (ノ) こゑ なみた哉
 (彰) ふけ 深にけり秋を田面にくる鴈のこゑにもいとそふ涙哉

(明) 深にけり秋を田面にくる鴈のこゑにもいとそふ涙哉
 (伊) こゑ なみた哉
 (島) かり こゑ なみた
 (祐) かり こゑ なみた
 (書) こゑ なみた哉
 (三) なみた哉
 (静) なみた哉

(内) こゑ 泪 哉
 (神1) かり こゑ 泪 哉
 (統) ふけ たのも 泪 哉
 (統書) ふけ たのも 泪 哉
 (統内) ふけ たのみ 泪 哉
 * (統内) は他本「たのも」を「たのみ」と作る。(神2)の「たのお」同様、書き損じか。
 (神2) ふけ たのお 泪 哉
 * (神2) は「たのお」につくる。

右 関路雲(鳥)(祐)(ノ)(書)
 (国) 引とむる袖にはあらてたつか弓紀の関山に雲そかゝれる
 (大) ひき き
 (ノ) ひき き
 (彰) ひき き

(明) ひきとむる袖 にはあらたつか弓紀の関山に雲そかゝれる

(伊) ひき

(島) ひき

(祐) ひき そて き

(書) ひき

(三)

* (三) || (静) || (国) 他、(神1)・(内)・(続) 系も同一表記。

(静)

(内)

(神1)

(続)

(続書)

(続内)

(神2)

四十八番左 寄竹恋 (神1)

(国) 風ふけはむなし契 を待 かほになれておき臥 庭の村 竹

* (国) は他本「なれて」を「なれも」と作る。最終形態か。但し、「も」を「て」と誤写した可能性はなきとしない。他本を見ると、誤写か。

(大) まち

(ノ) まち

* (ノ) と (大) は「おき」と表記。

(彰)

(明) 風ふけはむなし契 をまちかほになれもをきふす庭の村 竹 (五七オ)

(伊) まち

(島) まち

(祐) ちきり まち

(書) まち

(三) 吹は まち

(静) まち

(内) まち

* (内) は「なれも」とする。

(神1) まち

* (神1) は末句を「呉竹」と作る。独自本文。勘違いか。誤読か。「なれて」とするのは、(神1) と (国) だけ。

(続) 吹は

(続書) 吹は 契り

(続内) 吹は 契り

(神2) 吹は 契り

右 羈旅 (三) (彰)

(国) 旅 の空 駒にまかするあよみたにくるしや後の身をいかせん

* (国) は (大)・(明) 系末句「いかにせん」を「いかせん」と作る。最終形態か。

(大) 如何に

* (大) 「如何にせん」はやや読み取りにくい。

(ノ) 如何に

* (ノ) は「あよみ」の「よ」に「ゆ敷」と傍書。後筆か。

(彰)

(明) 旅 の空 駒にまかするあよみたにくるしや後の身をいかにせん

(伊) いた

(島) いた

(祐) たひ そら
(書) いかにか
(三) 如何に
*(三) 〓 (静)。
(静) 如何に
*(静) は「如何にせん」の「如何に」が(大)と共通。(大)系でやはり校訂したか。
(内) ゆ
*(内) は他本「あよみ」を「あゆみ」とするが、末句は(国)と同じ。「あよみ」は正徹・正広語彙。
(神1)
(統) に む
*(統) は「あよみ」では(内)・(国)と同じだが、末句は(大)・(明)と同じ。
(統書) に
(統内) に
(神2) に

四十九番左 折逢恋
(国) 袖 ゆくはいのるにたえて初 瀬川ひとつなかれに帰る 浪 かな
*(国) は「いのるにもたえて」の「も」ミセケチ。
(大) 祈 に 泊 かへ
(ノ) 祈 に 泊 かへ
(彰) 祈 に 泊 かへ
(明) 袖 ゆくは祈 にたえて泊 瀬川ひとつなかれにかへる浪 哉
(伊) そて 祈 泊 かへ
(島) 祈 泊 〓 かへ

(祐) 祈 泊 〓 かへ
(書) 祈る 泊 〓 かへ
(三) 行は はつせ河 かへ
(静) 行は はつせ 波 なみ
(内) 行は へ はつせ
(神1) 行は 祈 に 〓 かへ
(統) 〓 せ河 かへ
(統書) 〓 せ河 かへ
(統内) 行は 〓 せ河 かへ
(神2) 〓 せ河 かへ

右 古 幽 栖
(国) 古 幽 栖
*(国) が「山」を省略した理由は「山もうし」となっているからではないか。最終形態か。しかし、山が入っていないとおかしいか。脱字の可能性大。
(大) 古 山 幽 栖
(ノ) 古 山 幽 栖
(彰) 古 山 幽 栖
(明) 古 山 幽 栖
(伊) 古 山 幽 栖
(島) 古 山 幽 栖
(祐) 古 山 幽 栖
(書) 古 山 幽 栖
(三) 古 山 幽 栖
(静) 古 山 幽 栖
(内) 古 山 幽 栖

(神1) 古山幽栖
 (統) 古山幽栖
 (統書) 古山幽栖
 (統内) 古山幽栖
 (神2) 古山幽栖
 (国) 山もうしさていかさまに椎 のはのまきるゝ方 もなき夕 かな
 * (国) と (内) が (大)・(明) 系末句「嵐哉」を「夕かな」と作る。「嵐」を「夕」に変えたのは、「幽栖」のイメージだろうか。
 (大) しる 端 かつ 嵐 哉
 (ノ) しる 端 かつ 嵐 哉
 (彰) しる 端 かつ 嵐 哉
 (明) 山もうしさていかさまにしゐの葉のまきるゝ方 もなき嵐 哉
 (伊) しる 葉 かつ 嵐 哉
 (島) しる 葉 かつ 嵐 哉
 (祐) しる 葉 かつ 嵐 哉
 (書) しる 葉 かつ 嵐 哉
 (三) しる 葉 かつ 嵐 哉
 (静) 嵐 哉
 * (静) は末句「嵐哉」とする。(国) のほんの少し前の本に拠るか。
 (内) かつ かな
 * (内) 〓 (国)。
 (神1) × 葉 哉
 * (神1) は「いかさま」の「さ」が脱字。書き損じか。
 (統) 嵐 哉
 * (統) は「あらし」に「タイ」と傍書。異本は (内) と同じ。
 (統書) 嵐 哉

(統内) 嵐 哉
 (神2) 嵐 哉
 五十番 左 寄篷窓 (国) (静)
 (国) なみ風 のとまにしたゝる灯 思 かもひもけたぬ袖の雨 哉
 (大) 浪 かせ 篷 思 かな
 (ノ) 浪 篷 かな
 (彰) 波 篷 かな
 (明) 浪 風の篷 にしたゝる灯 思 かもひもけたぬ袖の雨 かな
 (伊) 波 篷 思 かな
 (島) 浪 篷 ともしひ かな
 (祐) 浪 篷 ともしひ かな
 (書) 浪 篷 ともしひ かな
 (三) 浪 かせも 思 かもひもけたぬ袖の雨 かな
 * (三) は「かせも」と作る。書き損じか。
 (内) 篷 思 かな
 (神1) 浪 篷 心 ほそしや にちるつゆ
 * (神1) は下句「心ほそしや袖にちるつゆ」という独自本文。この表現を持つ和歌を今のところ見出せない。この本文こそ不思議な本文である。いつ作られたのであろうか。
 (統) 浪 苦 ともしひ あめ
 (統書) 浪 苦 ともしひ あめ
 (統内) 浪 苦 ともしひ あめ
 (神2) 浪 苦 ともしひ あめ

右 名所松「(神1)(書)(彰)

(国) 唐崎 やたれを恨 のそひはてすつみに一木の松と成 けん

(大) から うらみ

(ノ) から うらみ

(彰) から うらみ なり

(明) から崎 やたれをうらみのそひはてすつみに一木の松と成 けん

(五七ウ)

(伊) から うらみ

(島) から うらみ 葉 なり

*(島) は(伊)の「一木」を「一葉」と誤読したか。

(祐) からさき うらみ 葉 なり

*(祐) は(島)を受けた。

(書) から うらみ

(三) からさき 誰 を

*(三) 〓 (静)。

(静) からさき 誰 を

*(静) は「へるに」の「へ」にミセケチ「つ」。誤写だろう。

(内) からさき 誰 ー ら

*(内) は末句「成らん」なるらん」と作る。独自本文。

(神1) から 誰 にうらみの

*(神1) は他本「たれを」を「誰に」に作る。独自本文。これもまた不明。

(統) からさき なるら

*(統) は(内)と同じ

(統書) からさき を なるら

(統内) からさき を なるら

(神2) からさき を なるら

*(統) 系は「そひはてを」というのが本来の形か、意味は通らないが。

五十一番左 待恋

(国) 嶺 の松 心 のかたもくれはて、夜ふかき袖 に落 る山かせ

*(国) は他本「心の色」を「心のかた」と作る。但し、「色」のくずし字を誤

って「かた」と書いてしまった可能性が大きい。歌ことばとしては「心の色」が

圧倒的に多いが、「心のかた」も少しはある。

(大) みね 色 おつ 風

(ノ) みね ころ 色 おつ

(彰) 峯 色 をつ

(明) みねの松 心 の色 もくれはて、夜ふかき袖 におつる山風

(伊) みね まつ 色 おつ 風

(島) みね ころ いろ おつ 風

(祐) みね ころ いろ おつ 風

(書) みね ころ いろ おつ 風

(三) みね 色 暮 は おつ 風

*(三) 〓 (静)。

(静) 色 おつ 風

(内) 色 暮 は おつ

(神1) ころ 色 暮 は おつ

(統) 色 暮 は おつ

(統書) 色 に暮 は おつ

*(統書) は「出つ」の「出」にミセケチ「お」と傍書。書き損じただろう。

(統内) 色 に暮 は おつ

*(統内) は「色に」と作る。(統書)と共通本文。共に書き損じたか。

(神2) 色 暮 は おつ

右 野亭鐘【(三)】

(国) われなくは野への篠 ふきかりの世を誰 にいさめむ入 あひのこゑ

(大) 「声」のどにかかりやや判読しにくい 相「声」

(ノ) 我 相

(彰) 我 相

* (彰) は他本「いさめむ(ん)」とあるのに、「いさめて」と作る。書き損じか。

(明) われなくは野へのさゝふきかりの世を誰 にいさめむ入 相のこゑ

(伊) 「誰か」の「か」をミセケチ「に」。 相 声

* (伊) 「誰か」の「か」をミセケチ「に」。 相 声

(島) 我 相

(祐) 我 相

(書) 我 相

* (書) は(三)と同文。 鐘

(三) 我 鐘

* (三) 〓 (静) 初期 〓 (内) 〓 (統) 系。 鐘

(静) 我 声

* (静) は末句「入相の鐘」の「鐘」にミセケチ「声」と傍書 声

(内) 我 かね

* (内) は初句「我ならは」、末句を「入あひのかね」と作る。独自本文。 かね

(神1) 我 相

(統) 我 相

* (統) は(内)と同じ。 鐘

(統書) 我 かね

(続内) 我 鐘

(続内) 我 鐘

(神2) 我 なら 辺 さゝ たれ んいりあひ かね

* (内) と(統) 系は同文。

五十二番左 寄露恨恋【(内)】

(国) もらさしと露の玉まく葛 のはをさのみな吹 そ宿 の秋かせ

* (国) (大) (明) 系「した葛」を「葛のは」と作る。但し、(内) は「葛のは」と作る。「葛」と「葛」は崩すと似ているが、(国) は楷書風に書いてあり、「葛」としか読めない。(内) は「葛」としか読めない。「葛のは」「葛のは」ともに、

正徹・正広語彙。

(大) した葛 風

(ノ) した葛 風

(彰) した葛 風

(明) もらさしと露の玉まくした葛 をさのみな吹 そ宿 の秋風 風

(伊) した葛 風

(島) した葛 風

(祐) した葛 やと 風

(書) した葛 を やと 風

* (書) は「吹な」の「な」にミセケチ「そ」と傍書。同筆か。 風

(三) くすのは 風

* (三) 〓 (静) 初期 〓 (国) 〓 (内) 〓 (神1) 〓 (統) 系。 風

(静) 下葛 風

* (静) は「下葛を」を一旦墨消し、「くすのはを」と傍書してまた墨消し、そして、「下葛を」と傍書。(内)・(統) 系によって、「下葛を」を訂正し、おそらく(大) 系により、元に戻したか。 風

(内) 葛 のは ふき やと 風

(神1) 葛 の葉 やと 風

(統) 葛の葉
 (統書) 葛の葉
 (統内) 葛の葉
 (神2) 葛の葉

右 軒忍草(島)(祐)(内)(彰)
 (国) 萩原 やほなみをかけて軒 の草吹や忍 のうらの秋かせ
 (大) 萩原 やほなみをかけて軒 の草吹や忍 のうらの秋かせ
 (ノ) 萩原 やほなみをかけて軒 の草吹や忍 のうらの秋かせ

(彰) 萩原 やほ浪 をかけて軒 の草吹や忍 の浦 の秋風
 (明) 萩原 やほ浪 をかけて軒 の草吹や忍 の浦 の秋風
 (伊) 萩原 やほ浪 をかけて軒 の草吹や忍 の浦 の秋風
 (島) 萩原 やほ浪 をかけて軒 の草吹や忍 の浦 の秋風
 (書) 萩原 やほ浪 をかけて軒 の草吹や忍 の浦 の秋風
 (祐) 萩原 やほ浪 をかけて軒 の草吹や忍 の浦 の秋風
 (三) 萩原 やほ浪 をかけて軒 の草吹や忍 の浦 の秋風
 (静) 萩原 やほ浪 をかけて軒 の草吹や忍 の浦 の秋風

(内) 萩原 やほ浪 をかけて軒 の草吹や忍 の浦 の秋風
 (神1) 萩原 やほ浪 をかけて軒 の草吹や忍 の浦 の秋風
 (統) 萩原 やほ浪 をかけて軒 の草吹や忍 の浦 の秋風

* (統) は「萩」に「萩イ」と傍書。異本は(内)と同じ。
 (統書) 萩 浦 風
 (統内) 萩 浦 風
 (神2) 萩 浦 風

* (統) 系・(内) は「萩原」でほぼ一致。
 (統) 系・(内) は「萩原」でほぼ一致。
 (統書) 萩 浦 風
 (統内) 萩 浦 風
 (神2) 萩 浦 風

五十三番左 別無書恋(神1)(ノ)

(国) さ夜深 き人は別 て朝 鳥 の跡 のみ残 る庭のうす雪
 * (国) は他本「深く」を「深き」と作る。最終形態か。

(大) 深く のこ

(ノ) 深く のこ

(彰) よふかく あさ のこ

(明) さ夜ふかく人は別 て朝 鳥 の跡 のみのこる庭のうす雪(五八オ)

(伊) 深く のこ

(島) 深く のこ

(書) 深く のこ

(祐) 深く のこ

(三) よふかく のこ

(静) よふかく のこ

(内) よふかく のこ

(神1) 深く のこ

(統) 小 わかれ あと

(統書) 小 わかれ あと

(統内) 小 わかれ あと

(神2) 小 わかれ あと

右 晝眠覚(書)

(国) 我身又 人のね覚 に近 からむ先 立 夢のうかふ涙 に

(大) わか ちかゝらむ

(ノ) わか ちかゝらむ

(彰) わか ちかゝらん たつ なみた

(明) わか身又 人のねさめにちかゝらむ先 立 夢のうかふ涙 に

(伊) わか さめ ちかゝらむ なみた

* (伊) は衍字「ゝ」を書き忘れたか。

(島) わか また さめ ちかゝらむ たつ なみた

(祐) わか また さめ ちかゝらむ たつ なみた

(書) わか また さめ ちかゝらむ たつ なみた

(三) (三) || (静) (三) は「をからん」の「を」にミセケチ「近」を傍書。

(内) (内) は「ちかゝらむ」の「ち」に「し」の傍書。これは別の本文を傍書し

たと思われる。とはいえ、「ねさめにししからむ」では文意不明。

(神1) さめ ちかゝらん 泪

(続) わか また さめ ちかゝらむ ん たつ

(続書) わか また さめ ちかゝらむ ん たつ

(続内) わかみまた さね ちかゝらむ んさきたつ

(神2) わか また さね ちかゝらむ んさきたつ

五十四番左 寄蜻恋

(国) 我 身世にあるかなきかを契 にてなとかけるふのもゆるおもひそ

(大) わか 思 ×

(ノ) わか 思 ×

(彰) 我か 思 ×

(明) わか身世にあるかなきかを契 にてなとかけらふのもゆる思 そ

(伊) わか 思 ×

(島) わか ちきり 「

(祐) わか 契 「

(書) わか 思 ×

(三) わか 思 ×

* (三) || (静) || (書)。

(静) わか 思 ×

* (静) は「もまる」の「まる」にミセケチ「ゆる」、書き損じだろう。

(内) こそ の なれ 蜻 蛉

* (内) は「我身こそ世になるかなきかの契なれ」と作る。独自本文。

(神1) こそ世になるかなきかの契なれ 蜻 ろふ 思 ×

* (神1) は(内)と同文で上句「我身こそあるかなきかの契なれ」と作る。

(続) よ 思 ひ

(続書) よ 思 ひ

(続内) よ 思 ひ

* (続内) は他本と異なり、「思ひを」と作る。書き損じか。

(神2) よ 契 り 思 ひ

右 窓前竹 (国) (静) (三) (彰)

(国) 吹 風 の竹になるよの窓 の夢 我 も世わたる程 そはかなき

(大) かせ 夜 夜 よ渡 る 「

(ノ) われ よ渡 るねや

* (ノ) は(大)他「程」を「ねや」と作る。誤読によるか。「程」を「禰

(ね)」と読んだ可能性が高い。

(彰) 夜 われ よ

(明) 吹 風 の竹になる夜の窓 の夢 われもよ渡 る程 そはかなき

(伊) 夜 夜 われ よ渡

* (伊) は「はかなき」を傍書、「かなしき」をミセケチ、書写時に連想による

勘違いか。

(島) 夜 われよ渡 ほと

(祐) 夜 まと ゆめわれよ ほと

(書) 夜 われよ ほと

(三) 夜 まと よ

(静) 夜 ふく よ

(内) 夜 かせ ほと

(神1) 夜 われ

(統) 夜 われよ

(統書) 夜 かせ よ

(統内) 夜 われよ

* (統内) の「はかなき」の「か」は「め」にも見える。「はめなき」では意味にならないので、「か」と読んでおく。

(神2) 夜 かせ われよ

五十五番左 厭恋

(国) 玉 たすき世はいひしらぬあやにくにそむくを恋る心 成らん

(大) なたすき世はいひしらぬあやにくにそむくを恋る心 成らん

(ノ) たま こふ なる

(彰) たま こふ なる

(明) たまたすき世はいひしらぬあやにくにそむくをこふる心 なるらん

(伊) たま こふ なる

* 「なるらん」喉にあたり判読不明につき推測。

(島) たま こふ こゝろなる

(祐) たま こふ こゝろなる

(書) たま こふ なる

(三) たま なる

(静) なる

(内) なる

(神1) なる

(統) 禊 なる

(統書) たま なる

(統内) たま なる

(神2) たま なる

右 旅宿嵐 (神1)

(国) けさみれば嵐 そあるし松か本 いつれは床の塵 はらふ声

(大) 今朝 ちり ちり ちり ちり ちり ちり

(ノ) 今朝 ちり ちり ちり ちり ちり ちり

(彰) 今朝 ちり ちり ちり ちり ちり ちり

(明) 今朝みれば嵐 そあるし松かもといつれば床のちりはらふこゑ

(伊) 今朝 あらし ちり ちり ちり ちり ちり ちり

(島) 今朝 あらし ちり ちり ちり ちり ちり ちり

(祐) 今朝 あらし ちり ちり ちり ちり ちり ちり

(書) 今朝 あらし ちり ちり ちり ちり ちり ちり

(三) 今朝 あらし ちり ちり ちり ちり ちり ちり

(静) 今朝見 あらし ちり ちり ちり ちり ちり ちり

(内) 今朝 あらし ちり ちり ちり ちり ちり ちり

(神1) 今朝見 ちり ちり ちり ちり ちり ちり

(統) 今朝 ちり ちり ちり ちり ちり ちり

(統書) 今朝 ちり ちり ちり ちり ちり ちり

(続内) 今朝 もと ちり こゑ
 (神2) 今朝 もと ちり こゑ

五十六番左 寄苔恋

(国) さらは人心 岩 木に成 はてよ衣 を苔の色 にかさねん

(大) (ノ) (彰) なり む

(明) さらは人心 岩 木に成りはてよ衣 を苔の色 にかさねむ

(伊) ころも 成り ころも いろ む

(島) ころも 成り ころも いろ む

(祐) ころも 成り ころも いろ む

(書) ころも 成り ころも いろ む

(三) ころも 成り ころも いろ む

(静) ころも 成り ころも いろ む

(内) ころも 成り ころも いろ む

(神1) ころも 成り ころも いろ む

(続) ころも 成り ころも いろ む

(続書) ころも 成り ころも いろ む

* (続書) は「はてに」の「に」にミセケチ「よ」と傍書。「衣」に一字傍書。

この字が「を」ならば、脱字を補う意味があるが、よく分からない。

(続内) いは なり 苔の衣 のいろ ん

* (続内) は「苔の衣のいろ」となっており、独自文。「衣苔」から意味が通る

ように変えたか。

(神2) いは なり × いろ

* (続 系は本来「衣苔」となっていたのではないか。(神2) は「いはき」の「き」に「木」と傍書。

右 夕鐘 (書) (彰)

(国) はかなしいつれの暮 をとちめにてわれ聞 捨 ん入あひの声

(大) (ノ) (彰) きゝすて む 相

(明) はかなしいつれの暮 をとちめにてわれきゝすてん入相 のこゑ

(伊) くれ くれ きゝすて 相

(島) くれ くれ きゝすて 相

(祐) くれ くれ きゝすて 相

(書) くれ くれ きゝすてむ 相

(三) くれ くれ きゝすてむ 相

(静) くれ くれ きゝすてむ 相

* (三) || (静)。

* (静) は末句「入相のかね」の「かね」にミセケチ「こゑ」。(大)・(ノ)系に

よる校訂。

(内) 我 すて 相 こゑ

(神1) 我 すて 相 こゑ

(続) 我 すて 相 こゑ

(続書) 我 すて 相 こゑ

* (続書) ・(神2) の声は「色」に似ている。

(神2) きゝすて 相

相

相

相

相

相

相

相

相

相

相

五十七番左 思不定恋

(国)

* (国)の「思不定恋」が最終形態か。

(大)

言

(ノ)

言

(彰)

言

(明)

言

(伊)

云

(島)

言

(祐)

言

(書)

言

(三)

定

* (三) || (国)。

(静)

言

(内)

言

(神1)

言

(続)

言

(続書)

言

(続内)

言

(神2)

言

(国)

年をへて思

そふかき山吹にせかれてむせふるての下

(大)

年をへて思

そふかき山吹にせかれてむせふるての下

(ノ)

とし

思ひ

(彰)

とし

思ひ

(明)

年をへて思

そふかき山吹にせかれてむせふるての下

(伊)

年をへて思

そふかき山吹にせかれてむせふるての下

(島) おもひ

(祐) おもひ

(書) おもひ

(三) 思ひ

* (三) || (静) 初期。(三)が見た本には「むすぶ」とあったが、(三)の時、

正広がそうしたか。

(静) 思ひ

* (静)は「結ふ」に墨消しで、「むせふ」と傍書。

(内) ひ

(神1) 款冬

(続) おもひ

(続書) おもひ

(続内) おもひ

(神2) おもひ

右 对鶴伴齡(島)(祐)(三)

(国) 天にすむ人のよはひを君にみて雲るの鶴

* 「らん」はのどにつき推測

(大) つる

(ノ) つる

(彰) 天にすむ人のよはひを君にみて雲るのつるや庭にきぬらん

(明) 天にすむ人のよはひを君にみて雲るのつるや庭にきぬらん

(伊) つる

(島) つる

(祐) つる

(書) つる

(三)

* (三) || (静) || (国)。

(静)

(内)

(神1)

(統)

(統書)

(続内)

(神2)

見居

む

┌

┌

五十八番左 寄花祈恋 (神1)

(国)

(大)

(ノ)

(彰)

(明)

祈 てふ神の心

のまゝならば花やはちらんかたき恋 かな

(五九オ)

(伊)

(島)

(祐)

(書)

(三)

* (三) || (静)。

(内)

いのる

こひ

哉

哉

む

(神1)

(統)

(統書)

(続内)

(神2)

こゝろ

む

┌

右 船中夢覚 (ノ) (彰)

(国)

(大)

(ノ)

(彰)

(明)

(伊)

(島)

(祐)

(書)

(三)

* (三) || (内)。

(静)

(内)

(神1)

(統)

* (統) は「ふるさと人の」の「の」に「やイ」と傍書。異本は(内)や他本と同じ。

(続内)

わかるとて故郷 人や袖ぬらすかひの袷 に夢そ覚 ぬる

古 古 しづく

古 古 しづく

古 古 わかるとて古郷 人や袖ぬらすかひのしづくに夢そ覚 ぬる

古 古 しづく

古 古 しづく

古 古 しづく

ふるさと しづく

ふるさと しづく

ふるさと しづく

ふるさと しづく

ふるさと の

ふるさと の

ふるさと の

ふるさと の

ふるさと の

ふるさと の

ふるさと の

(神2) ふるさと の さめ
* (統) 系は「人の袖」と作る。独自本文。

五十九番左 旧事恋 (国) (静)

(国) みちの草いく世の夢に枯 ぬらん古 枕 にかよふ面 かけ

(大) 道 道 かけ 古き 影 影

(ノ) 道 道 かけ ふるき 影

(彰) 道 道 かけ 古き 影

(明) 道 道の草いく世の夢にかけぬらん古き枕 にかよふ面 影

(伊) 道 道 かけ 古き 影

(島) 道 道 かけ 「古きまくら 影

(書) 道 道 かけ ふるき 影

(三) 道 道 かけ ふるき 影

(静) 道 道 かけ ふるき 影

(内) 路 路 かけ ふるき 影

* (内) は「枕」とは読みにくい、枕なのだろう。「梢」にも似ている。存疑。
もしそうならば、独自本文。

(神1) 路 路 かけ ふるき 影

(統) 道 道 かけ ふるき 影

(統書) 道 道 かけ ふるき 影

(統内) 道 道 かけ ふるき 影

(神2) 道 道 かけ ふるき 影

* (神2) は「幾よ」の「よ」に「世か」と傍書。

右 山家木 (書)

(国) 薪とりならばぬわさを椎 の陰 身のおちふるゝはてそかなしき

(大) 薪とりならばぬわさを椎 の陰 身のおちふるゝはてそかなしき

(ノ) 薪とりならばぬわさを椎 の陰 身のおちふるゝはてそかなしき

(彰) 薪とりならばぬわさを椎 の陰 身のおちふるゝはてそかなしき

(明) 薪とりならばぬわさを椎 の陰 身のおちふるゝはてそかなしき

(伊) 薪とりならばぬわさを椎 の陰 身のおちふるゝはてそかなしき

* (伊) は「かなしき」の字体、54番「窓前竹」の書き損じ「かなしき」と同じ。
ある種の目移りか。

(島) 薪とりならばぬわさを椎 の陰 身のおちふるゝはてそかなしき

(書) 薪とりならばぬわさを椎 の陰 身のおちふるゝはてそかなしき

(三) 薪とりならばぬわさを椎 の陰 身のおちふるゝはてそかなしき

* (三) は「薪とる」と作る。書き損じか。

(静) 薪とりならばぬわさを椎 の陰 身のおちふるゝはてそかなしき

(内) 薪とりならばぬわさを椎 の陰 身のおちふるゝはてそかなしき

(神1) 薪とりならばぬわさを椎 の陰 身のおちふるゝはてそかなしき

(統) 薪とりならばぬわさを椎 の陰 身のおちふるゝはてそかなしき

(統書) 薪とりならばぬわさを椎 の陰 身のおちふるゝはてそかなしき

(統内) 薪とりならばぬわさを椎 の陰 身のおちふるゝはてそかなしき

* (統内) は「薪こる」と作る。書き損じか。

(神2) 薪とりならばぬわさを椎 の陰 身のおちふるゝはてそかなしき

* (神2) 「薪とり」の「と」に「こか」と傍書。(統) 系は「薪こり」が通常か。

六十番 左 寄鐘恋 寺古て道 行人のつく鐘に待と別の面 かけそたつ 影

(ノ) ふり おも

* (ノ) は「待と」の「と」に「本ノマヽ」と傍書。「待つと別れ」という表現に違和感を感じたためか。

(彰) ふり わかれ

(明) 寺ふりてみち行 人のつくかねに待 と別 の面影 そたつ

(伊) ふり かね おも

(島) ふり みち かね わかれ おも

(祐) ふり みちゆく かね わかれ おも

(書) ふり みち みち おも

(三) みち 影

(静) 影

(内) ふり かね まつ そふ

* (内) 「そふ」に「たつ」と傍書。いつの段階でされたかが問題。

(神1) ふり みち行き おも影

(続) ふり まつ わかれ 影

(続書) ふり まつ わかれ 影

(続内) ふり まつ わかれ 影

(神2) ふり まつ わかれ 影

右 山旅「(神1) (三) (彰)」

(国) 雲の浪袖 こそぬれねあら磯 や嵐 岩うつ峯のまくらは

(大) なみ 枕

(ノ) なみ あらし

(彰) 波 るれ いそ

* (彰) は「ぬけれ」の「け」にミセケチ「る」と傍書。別筆か。どちらにせよ、
 独自本文。

(明) 雲の浪袖 こそぬれねあら磯 や嵐 岩うつ嶺の枕 は「(五九ウ)

(伊) 嶺枕

(島) あらし

(祐) × いそ あらし

* (祐) は「ぬれね」の「ね」が脱字。

(書) 嶺

(三) 嶺

(静) そて

* (静) は「嵐の」の「の」にミセケチ「岩」。誤写だろう。

(内) なみ あらし

(神1) 嶺枕

(続) 嶺枕

(続書) 嶺枕

(続内) 嶺枕

(神2) 嶺枕

* (神2) は「あら波」の「波」にミセケチ「磯」と傍書。書き損じだろう。

六十一番左 隔物逢恋

(国) 中かきやこなたに開 もひとつにて詞 をかわす宿 の権

* (国) は他本「ことの葉かはす」を「詞をかわす」(仮名遣いは「かはす」がよい)と作る。最終形態か。「詞をかわす」となっている本は(国)のみ。

(大) さく ことのはかはす あさかほ

(ノ) 垣 咲も ことのはかはす 朝顔

(彰) 此方 さく ことのはかはすやと あさかほ

(明) 中かきやこなたにさくもひとつにてことの葉かはす宿 のあさかほ

(伊) さく ことのはかはす あさかほ

右 対月聞鐘

(国) すむ月にむかひの寺 のかねの声 昔 よいかにうちの山 さと

(大) むかし

(ノ) むかし

(彰) 鐘 こゑむかし

(明) すむ月にむかひの寺 の鐘 の声 昔 よいかに宇治の山 さと

(伊) 住 鐘

(島) てら 鐘

(祐) てら 鐘

(書) 鐘

(三) 鐘

* (三) は「むかひて」と作る。書き損じか。

(静) 鐘

(内) は向 の

* (内) は他本「すむ月に」を「すむ月は」と作る。ある種の独自本文か。

(神1) 鐘

(続) 鐘

(続内) 鐘

(神2) 鐘

六十二番左 寄袖窓(内)

わか袖は五月の比 ににふの川袖ひけ浪 の声 おちぬまに

(大) 落ぬ

(ノ) ころ

(彰) ころ

(明) わか袖はさ月の比 ににふの川袖ひけ浪 の声 おちぬまに

(伊) 我袖 さ

(島) ころ

(祐) ころ

(書) 我袖 さ

(三) さ

(静) さ

(内) 我袖 さ

(神1) 我袖 さ

(続) 河

* (続) は末句「おちぬまで」の「て」に「にイ」と傍書。異本は(内)や他本と同じ。

(続書) さ 河 て
 (続内) さ 河 て
 (神2) さ 河 て
 * (続) 系は末句「おちぬまで」。独自本文。

右 山家嵐(島)(祐)(内)(書)(彰)
 (国) いとふ世をしらてかたるや軒の松きけは物 うき山 嵐 の声
 (大) かせ こゑ
 (ノ) かせ こゑ
 (彰) かせ こゑ

いとふ世をしらてかたるや軒の松きけは物 うき山 嵐 のこゑ

(伊) かせ こゑ
 (島) かせ こゑ
 (祐) もの やま かせ こゑ
 (書) かせ こゑ
 (三) かせ こゑ
 (静) かせ こゑ

* (静) Ⅱ (国)。

(内) 聞 は かせ こゑ
 (神1) 聞 はもの こゑ
 (続) 聞 はもの こゑ
 (続書) 聞 はもの こゑ
 (続内) 聞 はもの こゑ
 * (続内) は「山嵐」が見える。
 (神2) 聞 はもの こゑ

六十三番左 秋逢恋(神1)

(国) うき中も秋も外山 になしはてゝあふ坂 こゆる杉の下 みち
 * (国) は他本「秋を外山」を「秋も外山」と作る。最終形態か。

(大) をと 逢 道
 (ノ) をと 逢 道
 (彰) をと 逢 道

(明) うき中も秋をと山 になしはてゝ逢 坂 こゆる杉の下 道(六〇オ)
 * (明) は「うき事」の「事」ミセケチ「中」。

(伊) をと 逢 さか
 (島) をと 逢 さか
 (祐) をとやま 逢 さか

(書) 逢 道
 (三) と 逢 した 道
 (静) と 逢 さか 道
 (内) を 逢 道
 (神1) を 逢 道

(続) をと 逢 道
 (続書) をと 逢 道
 (続内) をと 逢 道
 (神2) をと 逢 道

右 蘭竹(国)(静)(三)

(三) 園

(国) 呉 竹 のそのふの枕 臥 わひぬやすけなき世をつくる嵐 に
 (大) はのどにあたり、「あらしに」はやや判読しづらい。 まくらふし あらし

(ノ) ふし
 (彰) ふし
 (明) 呉竹のそのふの枕 ふしわひぬやすけなき世をつくる風
 (伊) ふし
 (島) ふし
 (祐) くれたけ まくらふし
 (書) ふし 告る
 (三) ふし侘ぬ × 告る 明らか
 * (三) は「そのふ枕」とつくる。脱字か。「あらし」を除いて(三) 〓 (静)。
 (静) ふし侘ぬ
 * (静) は「呉竹」の「呉」にミセケチ「呉」。書き損じであろう。なお、呉も
 呉と同じ。
 (内) 菌生 侘ぬ
 (神1) 菌 ふし
 (統) 苑生 告る
 (統書) 苑生 告る
 (統内) 苑生 告る
 (神2) 苑生 告る
 六十四番左 寄雪恋(ノ)
 (国) 色ふかきみさほの松を君もみよ 時 雨にたへて雪折のこゑ
 (大) 見 え
 (ノ) 見 え
 (彰) 色ふかきみさほの松を君もみよ 時 雨にたへて雪折のこゑ
 (明) 色ふかきみさほの松を君もみよ 時 雨にたへて雪折のこゑ
 (伊) 声

(島) 見 しくれ
 (祐) 見 しくれ
 (書) 〓 (国)。
 (三) 見 見 見
 (静) 見 見 見
 (内) 見 見 見
 (神1) 見 見 見
 (統) 見 見 見
 (統書) 見 見 見
 (統内) 見 見 見
 (神2) 見 見 見
 右 海路遠(彰)
 (国) すみわひぬわれいつくにも送 てよ浪路分行 遠 つ舟人
 (大) 住わ 我 をくり とをつ
 (ノ) 住侘ぬ をくり わけ 津
 (彰) 住侘ぬ我 をくり ゆく 津
 * (彰) は「遠」の字が読みにくい。別の字の可能性がある。
 (明) すみわひぬわれいつくにもをくりてよ浪路わけ行 遠 津舟人
 (伊) をくり わけ 津
 (島) をくり わけ 津
 (祐) をくり わけゆく 津ふな
 (書) をくり ち 津
 (三) 住侘ぬ我 津
 * (三) 〓 (静)。

(静) 侘ぬ我

(内) 波 おきつ 津

* (内) は末句「おきつ舟人」と作る。独自本文か。

(神1) をくり 沖津

* (神1) も(内)と同じく「沖津舟人」と作る。

(統) 侘ぬ 送り 沖

* (統) は「沖つ」が(内)(神1)と同じ。

(統書) 侘ぬ 送り 沖津

(統内) 侘ぬ 送り 沖津

(神2) 侘ぬ 送り 沖津

* (神1)(内)(統)系は「沖津舟人」。

六十五番左 歳暮恋

(国) 春もこはすめる涙 を又 やみん袖の氷 にくるゝとしかな

(大) 春もこはすめる涙 を又 やみん袖の氷 にくるゝとしかな

(ノ) 泪 む 年 哉

(彰) 春もこはすめる涙 を又 やみん袖の氷 にくるゝとしかな

(明) 春もこはすめる涙 を又 やみん袖の氷 にくるゝとしかな

(伊) 春もこはすめる涙 を又 やみん袖の氷 にくるゝとしかな

(島) 春もこはすめる涙 を又 やみん袖の氷 にくるゝとしかな

(祐) 春もこはすめる涙 を又 やみん袖の氷 にくるゝとしかな

(書) 春もこはすめる涙 を又 やみん袖の氷 にくるゝとしかな

(三) 春もこはすめる涙 を又 やみん袖の氷 にくるゝとしかな

* (三) は「涙に」と作る。誤写・書き損じか。

(静) 春もこはすめる涙 を又 やみん袖の氷 にくるゝとしかな

による書き損じか。

(内) 暮る年 哉

(神1) 見 年

(統) 見

(統書) 見

(統内) 見

(神2) 見

右 山家鳥(神1)(書)

(国) 世もうくは行 てをすまむ山鳥 の鳴 声 聞 も二親にして

* (国) は(内)と並んで、(大)・(明)系が二句目「たれすまさらむ」を「行

てをすまむ」と作る。最終形態か。「たれすまさらむ」では、意味がよく通らな

いが、「行てをすまむ」の意味も今ひとつ分からないけれども、山鳥の鳴く声を

両親と受け取っているということだから、それでも住もうという肯定的な意味合

いは伝わってくるか。

(大) 誰 すまさらむ なく きく

(ノ) たれすまさらむ こゑきく

(彰) たれすまさらむ きく

(明) 世もうくはたれすまさらむ山鳥 の鳴 こゑきくも二親にして(六〇ウ)

(伊) たれすまさらむ こゑきく

(島) たれすまさらむ こゑきく

(祐) たれすまさらむ こゑきく

(書) たれすまさらむ こゑきく

(三) 誰 すまさらむ とり こゑきく

* (三) も(国)の前。(三) || (静)。

(静) 誰 すまさらむ

* (静)の本文も「誰すまさらん」となっている。よって、(国)の前。

(内) きく

* (内)は(国)と同じ。(内)・(神1) || (国)。

(神1) きく

(続) たれすまさらん きく

* (続)は「たれすまさらん」に「行てをすまむイ」と傍書。異文は(国)と同じ。そして、(内)と一致しない。(続)の完成は、(国)の後だろう。

(続書) たれすまさらん きく

(続内) たれすまさらん きく

(神2) たれすまさらん きく

六十六番左 寄塩木恋

(国) われにうき君こ ふ人の帯ならぬ塩 木を取 てからき中哉

* (国)は他本「君こまふ人」を「君こふ人」と作る。「こまふ」では意味がよく分からないからか。「こまふ」の用例一つだが、ないに等しい。「こまふ人」は「こまうど || 高麗人」のことだろう。「ま」が脱落した可能性もある。

(大) 我 こま とり かな

(ノ) こま しほ とり かな

(彰) 我 こま とり かな

(明) われにうき君こまふ人の帯ならぬ塩 木をとりてからき中哉

(伊) こま とり

(島) こま とり かな

(祐) こま とり かな

(書) 我 こま とり

(三) 我 こま とり

* (三) || (静)。

(静) 我 こま

* (静)は「我〇うき」の〇に「に」と傍書。書き損じによる。

(内) 我 こま との しほき

* (内)は他本「こまふ人の」を「こまふとの」と作る。高麗人のこと。

(神1) こま との とり

(続) 高麗 人

(続書) 高麗 人

(続内) 高麗 人

(神2) 高麗 人

右 林下幽閑(三)(彰)

(国) はかなくもかたらふ声 よ鳥のきてならふ梢 の夕 暮 のやと

(大) こゑ 宿

(ノ) こゑ 宿

(彰) はかなくもかたらふこゑよ鳥のきてならふ梢 の夕 暮 のやと

(明) くれ くれ

(伊) くれ くれ

(島) こゑ くれ

(祐) こゑ くれ

(書) こゑ くれ

(三) こゑ くれ

* (静)は「かたらぬ」とつくる。誤写だろう。

(内) に くれ

(神1) くれ

(続) 宿

* (統) は「かたらふ声よ」の「よ」に「にイ」と傍書。異文は(内)と同じ。

- (統書) 宿
- (統内) 宿
- (神2) 宿

六十七番左 旅宿恋

- (国) 旅 にけきたれかみかさを侘 ぬらん涙 そへやる床 の山川
- (大) 今朝 わひ む なみた ところ
- (ノ) 今朝 わひ なみた
- (彰) 今朝 わひ
- (明) 旅 に今朝たれかみかさをわひぬらん涙 そへやる床 の山川
- (伊) 今朝 わひ
- (島) 今朝 わひ なみた
- * (島) は「みかを」に「さ」を傍書して「みかさを」とする。
- (祐) 今朝 わひ なみた
- (書) 今朝 わひ
- (三) 侘ぬ
- * (三) は「河」の表記以外は、(三) || (国)。
- (静) 今朝 誰 かはみさを
- (内) 今朝 わひ
- * (内) は他本「たれかみかさを」を「誰かはみさを」と作る。独自本文。
- (神1) 今朝 わひ
- (統) 水 水 水 水
- (統書) 水 水 水 水
- (統内) 水 水 水 水
- (神2) 水 水 水 水

右 古寺松(島)(祐)

- (国) 室ふかく昔 おほえてつゝら折 老かゝまれる松 そのこれる
- (大) 室ふかく昔 おほえてつゝら折 老かゝまれる松 そのこれる
- (ノ) おり おり
- (彰) おり
- (明) 室ふかく昔 おほえてつゝらおり老かゝまれる松 そのこれる
- (伊) おり
- (島) おり
- (祐) おり
- (書) おり
- (三) おり
- (静) おり
- (内) おり
- (神1) おり
- * (神1) || (国)。
- (統) 攀 攀 攀
- (統書) 攀 攀 攀
- (統内) 攀 攀 攀
- (神2) 攀 攀
- * (統内) は「かゝまれる」が「かゝまれる」とも読める。
- (神1) 攀 攀
- 六十八番左 寄鳩恋(国)(静)(神1)
- (国) 我 のみやむなし契 の園 の竹二 ならへる家 鳩 のこゑ
- * (国) は、私家集大成は「園」と読んでいるが、ここは「園」でいいのではな

(大) お そののゝ はと 声

* (大) は他本「むなし」を「おなし」につくる。書き損じか。

(ノ) われ そのゝ

* (ノ) は(大)系だが、「おなし」とはなっていない。(ノ)の見た本は既に変更していたか。それとも他本で校訂したか。

(彰) われ お そのゝ

(明) われのみやむなし契 のそのゝ竹二 ならへる家鳩 のこゑ (六一オ)

(伊) われ のそのゝ はと

(島) われ ちきりのそのゝ 声

(祐) われ ちきりのそのゝ いへはと

(書) われ そのゝ こゑ

(三) そのゝ

* (三) || (静)。

(静) そのゝ

(内) 菌 声

(神1) われ 菌 こゑ

(統) われ 契 りのそのゝ ふたつ 声

(統書) われ 契 りのそのゝ ふたつ 声

(続内) われ 契 りのそのゝ ふたつ 声

(神2) われ 契 りのそのゝ ふたつ 声

右 田家鳥 (書) (彰)

(国) 鳥

* 他本「雨」を「鳥」と作る。但し、歌の内容から「雨」が正しい。雨のくずし字を誤って「鳥」と読んだか。「雨」と「鳥」は似ていないわけではない。もし

くは「鳥」と書いてしまったか。前歌の「鳩」に引かれて「雨」を思わず「鳥」と書いてしまったか。

(大) 雨

(ノ) 雨

(彰) 雨

(明) 雨

(伊) 雨

(島) 雨

(祐) 雨

(書) 雨

(三) 雨

* (内) が「雨」とするのは、底本がそうになっていたからだろう。

(静) 雨

(内) 雨

(神1) 雨

(統) 鹿 のみ「鹿」とするが、これも意味的にはよい。

(統書) 鹿

(続内) 鹿

(神2) 鹿

* (統) 系は「田家鹿」という題

(国) よる鹿のいなはの雲 の色かへて我 を時 雨のもる夢路かな

(大) われ ち哉

(ノ) われ

(彰) よる鹿のいな葉の雲 の色かへてわれを時 雨のもる夢ち哉

(伊)	葉	くも	われ	ち哉
(島)	葉		われ	ち哉
(祐)	葉		われ	ち哉
(書)	稲葉		われ	ち哉
(三)	稲葉		われ	ち哉
(静)	稲葉	しくれ	しくれ	哉
* (静) は「よる浪」にミセケチ「鹿」。連想による書き損じによるものだろう。				
(内)	稲葉		われ	哉
(神1)			われ	哉
(続)			われ	哉
(続書)			われ	哉
(続内)			われ	哉
(神2)			われ	哉
* (続) 系は本来「いなはの雲を」という形態だったのではないか。但し、本文的には「雲の」の方がよい。				
六十九番左 山家恋				
(国)	夕まくれ袖をそほさむさひしさの一方	ならば露	の山風	
(大)	暮袖			かせ
(ノ)	ん			かせ
* (ノ) は「一かたならぬ」と作る。書き損じ、誤写か。				
(彰)	暮袖	ん	かた	かせ
(明)	夕まくれ袖をそほさむさひしさの一方	かたならば露	の山風	
(伊)			かた	かせ
(島)			かた	かせ
(祐)			かた	かせ

(書)	暮袖		かた	かた
(三)		ん		かた
* (三) は「ん」以外は(静)と同一表記。				
(静)	暮袖		かた	かた
(内)	暮袖		かた	かた
(神1)	暮袖		かた	かた
(続)	暮袖	ん	ひとかた	かせ
(続書)	暮袖	ん	ひとかた	かせ
(続内)	暮袖	ん	ひとかた	かせ
(神2)	暮袖	ん	ひとかた	かせ
右 水郷蘆「ノ」(三)				
(国)	ことのはをわか歌	かたにみるもうし蘆	火にそへよ小屋の里	人
* (国) は(内)と共に他本「ことのはにわか歌かたを」を「ことのはをわか歌かたに」と作る。最終形態か。				
(大)	に	うた	を	こや
(ノ)	葉に	うた	を見	こや
(彰)	に我	うた	を	こや
(明)	ことのはにわかうたかたをみるもうし蘆	火にそへよ	こやのさと人	
(伊)	葉に	うた	を	こや
(島)	葉に	うた	を	こや
(祐)	葉に	うた	を	こや
(書)	葉に	うた	を	こや
(三)	葉に	うた	を見	こや
(静)	に	うた	を	こや
* (静) は「哥」にミセケチ「うた」と傍書。(大)系に合わせたか。				

(内) (内) は(国)と同じ。(内)・(神1) || (国) こや

* (内) は(国)と同じ。(内)・(神1) || (国)。

(神1) 葉 我 哥 見 あし

* (神1) は(内)・(国)と同文。

(統) 言の葉に うた を見 芦 こや

(統書) 言の葉に うた を見 あし こや

(統内) 言の葉に うたを 見 あし こや

* (統内) は「うたを」と作る。その理由は不明。書き損じか。

(神2) 言の葉に うた を見 あし こや

* (神2) 「うたかたの」の「の」にミセケチ「を」と傍書。書き損じだろう。

七十番 左 寄藻恋

(国) はかなしな床 のうら風 浪 こえて玉もなひかん底 のくろかみ

(国) は(内)と共に、他本「はかなしや」「浪こえは」を「はかなしな」「浪こえて」と作る。最終形態か。但し、「こえて」の「て」に「は」と傍書。校訂の

痕跡とすると「は」でよい。

(大) やとこ かせ は そこ

(ノ) やとこ 浦 て そこ

* (ノ) は「こえて」と作る。書き損じか。

(彰) やとこ 波 波 そこ

(明) はかなしや床 のうら風 浪 こえは玉もなひかむそのくろかみ

(伊) や なみ は む

(島) や なみ は む

(祐) や なみ は む

(三) やとこ は そこ

(書) や は そこ

(静) やとこ は む

* (静) も(大) (明) 系と同じ。 浦 かせ は そこ

(内) (神1) やとこ 浦 は む

(統) やとこ 浦 は そこ

* (統) は(内) (国) 「はかなしな」を(大) (明) 系と同じく「はかなしや」と作る。

(統書) やとこ 浦 は そこ

(統内) やとこ 浦 は そこ

* (統内) は(統) 系他本「これは」とするのに、「こえて」と作る。ある種の書き損じか。

(神2) やとこ 浦 は そこ

右 曙嶺雲「(神1) (彰) 帰 ゐる雲を戸さしの嶺の庵 あくるかはるゝ山 風 の声

(大) かへり と 峯 明る

(ノ) 帰りぬ 峯 ち

* (ノ) は「帰りぬる」とつくる。「ぬ」を「ぬ」と読み間違っただろう。

(彰) かへり 峯 ち

(明) 帰りゐる雲を戸さしの峯の庵 あくるかはるゝ山 風 のち

(伊) 帰り 峯 ち

(島) 帰り 峯 ち

(祐) 帰り いほ やま ち

(書) 帰り 峯 ち

(三) かへり 峯 ち

声

* (三) 〓 (静)。

(静) かへり

(内) り

(神1) 帰り

(統) かへりい

(統書) かへりい

(統内) かへりい

(神2) かへりい

峯

明る

かせ

かせ

かせ

かせ

声

こゑ

こゑ

七十一番左 顕恋

袖したふ別

を人にみえてけり折 ふし月は空 にくもらて

(大) おり

(ノ) おり

(彰) おり

(明) 見

(伊) おり

(島) おり

(祐) おり

(書) おり

(三) おり

(静) おり

(内) 見

(神1) 見

(統) わかれ

(統書) わかれ

(続内)

* (続内) は「わかれ」の「か」が脱字。

(神2)

わかれ

右

苔為石衣

(国)

竹

(大)

竹

(ノ)

竹

(彰)

竹

(明)

竹

(伊)

竹

(島)

竹

(祐)

竹

(書)

竹

(三)

竹

(静)

竹

(内)

竹

(神1)

竹

(統)

竹

(統書)

竹

(続内)

竹

示す。

* (国) と (内) ・ (統) は他本では、大きく題が異なり、また、下記にあるように歌が異なる。つまり、編纂過程が (内) ・ (国) の段階でこの形になったことを示す。

* (静) は「苔為石衣」に墨消し。

(内) 苔為石衣

* (内) 〓 (国)。

(神1) 苔為石衣

(統) 苔為石衣

(統書) 苔為石衣

(続内) 苔為石衣

(神2) 苔為石衣

(国) 法の道にたれ入 さらん石山や石 も衣 を苔 ふかくして

(松下集には「岸竹 一三一」 人の世もたゞさはかりそ隙をなみ浪におきふす岸のさゝ竹」という和歌を載せる)

* (国) と (内) は「法の道」詠であり、(大)・(明) 系は「いつまてか」詠である。松下集一三二「人の世も」詠も注目する必要がある。但し、どうして「いつまてか」詠から「法の道」詠に変更したのか、はまだ分からない。「法の道」詠を最終形態と考えたことは分かるけれども。

(大) いつまてか人にもみえむ老の浪 我 世かたふく岸 のさゝ竹

(ノ) いつまてか人にもみえん老の浪 わか世かたふくきのさゝ竹

(彰) いつまてか人にも見えん老の浪 我 世かたふくきのさゝ竹

(明) いつまてか人にもみえむ老の浪 わか世かたふく岸 のさゝ竹

(伊) 浪に

* (伊) は「浪に」とする。誤写か。

(島) ぬ わか きし

(祐) ぬ わか きし

* (島) (祐) は「みえむ」と「みえぬ」とする。勘違いか。

(書) いつまてか人にもみえん老の浪 わか世かたふく岸 のさゝ竹

(三) 法×道 いら む こけ

(静) 見 ん よ

* (静) は、墨消しされた「苔為石衣」の題の下に「法の道にたれ入さらん石山や石も衣を苔ふかくして」を記す。おそらく、最終的に(大)系にしたのではないか。しかし、(国)系のテキスト(但し最終形態ではない)に準拠していたことは確か。

(内) 誰 いら

* (内) 〓 (三) 〓 (国)。

(神1) む それも

* (神1) は (国)・(内) が「石も」とあるのに、「それも」と作る。「石」を読み誤ったか。

(続) いら ころも

(続書) ×たれいら ころも

(続内) ×たれいら ころも

(神2) ×たれいら ころも

* (続) 系は本来「法の道たれいらさらん」となっていたのではないか。

七十二番左 寄月顯恋 (内)

(国) 世にめつる月にはあらて秋今 夜われも名にたつ袖の上 かな

(大) こよひ我 も 立袖 哉

(ノ) こよひ 立袖 哉

(彰) こよひ我 も 立袖 哉

(明) 世にめつる月にはあらて秋こよひわれも名に立袖の上 哉

(伊) 今宵 立袖 哉

(島) こよひ 立袖 哉

(祐) こよひ 立袖 哉

(書) こよひ 立袖 哉

(三) 我 も 立袖 哉

(静) 立袖 哉

(内) 立袖 哉

(神1) こよひ我 も 立袖 哉

(続) 今宵 哉

(続書) 今宵 哉

(続内) 今宵 哉

(神2) 今宵 哉

右 谷松年久(国)(島)(祐)(内)(静)(書)(三)(彰)(大)(ノ)(彰)

(統) 苔松年久

* (統) は「谷」を「苔」と翻刻したか。(内) は「谷」

(統書) 谷松年久

(統内) 苔松年久

* (統内) は明確な「苔」である。

(神2) 谷松年久

(国) 谷ふかみ朽 木の上 に生る松 昔 を問 や山 風 のこゑ

* (国) と(内) は他本「おほふ松」を「生る松」と作る。最終形態か。

(大) うへ おほふ

(ノ) おほふ とふ かせ

(彰) くち おほふ とふ

(明) 谷ふかみ朽 木の上 におほふ松 昔 をとふや山 風の 声

(伊) おほふ むかし とふ 声

(島) おほふまつむかし とふ 声

(祐) おほふまつむかし とふ やまかせ 声

(書) うへ むかし とふ こゑ

(三) むかし

* (三) 〓 (静) 初期 〓 (国) 〓 (内) 〓 (書) 〓 (統) 系「生る松」とする。重要な用例。

(静) うへ 声

* (静) は「生る」にミセケチ「おほふ」と傍書。異筆か。とはいえ、(大)系への先祖帰りか。

(内) とふ かせ

(神1) うへ おほふ むかし とふ

(統) くち うへ むかし とふ 声

(統書) くち うへ むかし とふ 声

(統内) 苔 くち うへ むかし とふ 声

* (統内) は明確に「苔」と読める。

(神2) くち うへ むかし とふ 声

七十三番左 面影恋(神1)

(国) いとふ身に人のはそひて人になとわか 面影 の別 はつらん

(大) 我 面 わかれ

(ノ) おもかけ わかれ

(彰) 我 面 わかれ

(明) いとふ身に人のはそひて人になとわか 面影 のわかれはつらん

(伊) おもかけ わかれ

(島) おもかけ わかれ

(祐) おもかけ わかれ

(書) 我

(三) 我

(静) 我

* (静) 〓 (国) 〓

(内) は 我 面

(神1) 我 面 む

* (統) は「そひて」の「ひ」に「はい」と傍書。異文は(内)と同じ。「人のはそはで」と読むのだろう。

(統書) わかれ
 (統内) わかれ
 (神2) わかれ

右 述懐

(国) ことの葉を落 葉の程 も学 えぬに老木の陰 そ更 に恋しき
 *私家集大成は「覚」とするが、「学」のくずし方や他本から「学」と読む。「まなひえぬ」という表現は室町和歌で六首を数える。また、「学えぬに」という字余りになっている。誤記か、書き損じか。

(大) は は ほと まなひえぬ× かけ
 (ノ) ほと まなひえぬ× さら
 (彰) ほと まなひえぬ× かけ さら
 (明) ことの葉を落 葉の程 もまなひえぬ×老木の陰 そさらに恋しき
 (伊) まなひえぬ× さら
 (島) まなひえぬ× さら
 (祐) ほと まなひえぬ× さら
 (書) ななひえぬ× ×
 (三) ほと まなひえぬ× かけ さら
 (静) ほと まなひえぬ× さら
 * (静) は (大) 系と同じ。
 (内) おちは 学 ひえぬ× さら
 (神1) ほと まなひえぬ×
 (統) おちは ほと まなひえぬ×
 (統書) おちは ほと まなひえぬ×
 (統内) おちは ほと まなひえぬ×
 (神2) 言の おちは ほと まなひえぬ×

七十四番左 寄榊恋

(国) 手折 えぬ涙 に臥 てとこやみや神の代つらき嶺 の真榊
 (大) ふし
 (ノ) たをり なみた ふし ×
 (彰) たをり ふし 世
 (明) たをりえぬ涙 にふしてとこやみや神の代つらき嶺 のまさかき
 (伊) たをり ふし
 (島) たをり ふし 世
 (書) たをり ふし 世
 (祐) たをり なみた ふし 世 みね まさかき
 (三) お ふし 世 ×
 * (三) は「ま榊」の「ま」が脱字だが、それ以外は(三) || (静)。
 (内) お なみた ふし 世 ま
 (神1) ふし
 (統) 泪 ふし 峰 まさかき
 (統書) 泪 ふし 峰 まさかき
 (統内) 泪 ふし 峰 まさかき
 (神2) 泪 ふし 峰 まさかき
 右 独述懐「(書)(彰)
 (国) 問ふ人も渚 にたてる一 松はかなやいつの春を待 らん」
 * (国)・(内) は他本「松はつれなや」を「松ははかなや」と作る。最終形態か。用例としては、「松はつれな」の方が多し。「松ははかな」は後撰集に一例のみ。
 (大) なきさ つれな まつ

- (ノ) と なきさ つれな
- (彰) と なきさ つれな
- (明) とふ人もなきさにたてる一 松つれなやいつの春を待らん
- (伊) と なきさ つれな
- (島) と なきさ ひとつ つれな
- (祐) と なきさ ひとつ つれな まつ
- (書) と なきさ つれな まつ
- (三) × なきさ つれな む
- * (三) || (静)。
- (静) なきさ つれな
- * (静) も (大) 系と同じく「つれなや」とする。
- * (内) || (神1) || (国)。
- (内) と や
- (神1) と なきさ ひとつ つれな
- * (統) は (大)・(明) 系と同様に「つれなや」とし、(内) と異なる。
- (統書) と なきさ ひとつ つれな
- (統内) と なきさ ひとつ つれな
- * (統内) は「なきさ」の「さ」の字母が不明。いちおう「さ」と読んでおくが、よく分からない。
- (神2) と なきさ ひとつ つれな
- 七十五番左 隠在所恋」(ノ)
- (国) 杉たてる門 にはあらて三輪の里 市にまきれて人そ帰 し
- (大) 誰 かすむきひの中山行河の水の煙を嶺 のかり庵
- (ノ) 三む

- * (ノ) は歌がない。ノドのところに「哥不足本ノマ、」とあり。つまり、(大) そのものを見ているわけではないことがここからも分かる。(大) 系のこの歌を欠いたある本を見ている。
- (彰) 杉たてる門 にはあらてみわのさと市にまきれて人そかへりし
- (明) 杉たてる門 にはあらてみわのさと市にまきれて人そかへりし
- (伊) と なきさ つれな
- (島) と なきさ つれな
- (書) と なきさ つれな
- (祐) と なきさ つれな
- (三) × なきさ つれな
- * (三) || (静)。
- (静) なきさ つれな
- * (静) も (大) 系と同じく「つれなや」とする。
- * (内) || (神1) || (国)。
- (内) と や
- (神1) と なきさ つれな
- * (内) は他本「かへりし」を「恋しき」と作る。独自本文。
- (神1) と なきさ つれな
- * (統) は末句「こひしき」で(内) と同じ。
- (統書) と なきさ つれな
- (統内) と なきさ つれな
- (神2) と なきさ つれな
- * (統) は他の(統) 系と末句が異なる。活字本(統) に(内) 系の果たした役割は大か。
- 右 山館煙細」(神1) (三)
- (国) 誰 かすむきひの中山行河の水の煙を嶺 のかり庵
- * (国) と(内) と(大) (明) 系では二句目以降の本文が大きく異なる。(内)

Ⅱ (国)

(大) ほそ谷川の帯ならぬ煙 もめくるきひの中山

* (大) で大きく改稿。

(ノ) ほそ谷川の帯ならぬ煙 もめくるきひの中山

* (ノ) は(大)系。

(彰) たれ ほそ谷川の帯ならぬ煙 もめくるきひの中山

(明) 誰 かすむほそ谷川の帯ならぬ煙 もめくるきひの中山 (六二ウ)

* 「のほる」にミセケチ「めくる」と傍書。

(伊) たれ ほそ谷川の帯ならぬ煙 もめくるきひの中山

(島) たれ ほそ谷川の帯ならぬ煙 もめくるきひの中山

(祐) たれ ほそ谷川の帯ならぬ煙 もめくるきひの中山

(書) ほそ谷川の帯ならぬ煙 もめくるきひの中山

(三)

* (三) Ⅱ (静) 初期 Ⅱ (国) Ⅱ (神1)・(内)。

(静) 誰 ほそ谷川の帯ならぬ煙もめくるきひの中山

* (静) は「きひの中山行河の水の煙を峯のかり庵」を墨消して「ほそ谷川の帯ならぬ煙もめくるきひの中山」を傍書。(大)系に戻った。先祖帰り。

(内) みね

(神1) たれ みね

* (神1)・(内) は(国)と同文。

(統) たれ 細 谷川の帯ならぬ煙 もめくるきひの中山

* (統) は「細谷川の帯ならぬ煙もめくるきひの中山」に「きひの中山行河の水の煙をみねのかり庵イ」と傍書。これは、(国)と同じ。(統)は(国)を見ているか。

(統書) たれ 細 谷川の帯ならぬ煙 もめくるきひの中山

(続内) たれ 細 谷川の帯ならぬ煙 もめくるきひの中山

(神2) たれ 細 谷川の帯ならぬ煙 もめくるきひの中山

七十六番左 寄夕恋

(国) 身をせむる恋 のやつこの声 や是 たそかれ時 の宿 の松かせ

(大) これ

(ノ) これ

(彰) これ

(明) 身をせむる恋 のやつこの声 やこれたそかれ時 の宿 の松かせ

(伊) これ

(島) こひ これ

(祐) こひ これ

(書) こゑ これ

(三) これ

(静) これ

(内) 奴 のこゑ これ

(神1) こゑ これ

(統) これ

(統書) これ

(続内) これ

(神2) これ

右 社頭水「(彰) (国) たれもくめやとる月日はあらたなる神の御影 そ宮 川の浪

* (国)・(内)は末句「浪」と作る。(大)(明)系は「水」。

(大) 誰 も

(ノ) 誰 も

水 水

(彰) 誰も

(明) たれもくめやとる月日はあらたなる神の御影 そ宮 川の水

(伊) 水

(島) かけ 水

(祐) かけ みや 水

(書) かけ 水

(三) かけ 水

* (三) || (静)。

(静) 誰も 水

* (静) の末句は (大) 系と同じ。

(内) 誰も の なみ

* (内) は末句が「なみ」(国)と同じ。(内)は「御影の」と作る。(神1)

(内) 共にここがゆれている。 を 河

(神1)

* (神1)は「御影を」と作る。独自本文。

(統) みかけ 河 水

(統書) みかけ 河 水

(統内) みかけ 河 水

(神2) みかけ 河 水

* (統)系は (大)・(明)系と同文。

七十七番左 秋旅恋」(国)(静)

(国) 袖しほる秋の思 ひの野山 にて恋に旅 たつ我を待らん

(大) × を われ

* (大)は「思を」と作る。 われ

(ノ) われ

* (ノ)は「思ひの」として(大)の「思を」と異なる。(大)系自体が変化した結果か。

(彰) を 立 我

* (彰)は「野山えて」の「に」にミセケチ「に」と傍書。但し、「に」と書こ

うとして妙な形になったので、ミセケチをしたのではないか。

(明) 袖しほる秋の思 ひの野山 にて恋にたひたつ我を待らん

(伊) たひ

(島) おもひ たひ

(祐) おもひ たひ

(書) おもひ われ まつ

(三) おもひ やま

(静) × 立

(内) 立

(神1)

* (神1) || (国)。

(統) おもひ われ

(統書) おもひ われ

(統内) おもひ われ

(神2) おもひ われ

右 旅宿灯」(島)(書)

(国) 壁に今朝いかてそむけんたとりきてくらきに憑 む宿の灯

(大) かへ けさ

(ノ) かへ たの

(彰) かへ たの

(明) 壁に今朝いかてそむけんたとりきてくらきにたのむ宿の灯

(伊) 頼
 (島) 頼
 (祐) たの やと ともし火
 (書) たの
 (三) 頼
 (静) けさ
 (内) けさ
 * (静) は「たつむ」の「つ」にミセケチ「の」と傍書。書き損じによるものだらう。

(神1) けさ
 (続) かへ けさ ×
 (続書) かへ けさ
 (続内) かへ けさ
 (神2) かへ けさ
 たのむ
 たのむ
 たのむ
 たのむ
 たのむ
 たのむ
 たのむ
 たのむ

七十八番左 寄書恋 「(ノ)
 (国)

* (国) は(内)・(続)・(静) 共に「追加」の表記がない。(大) 段階で追加され、それが(明)に引き継がれ、(国) 段階では、追加ではなく正規なものとなったということだらう。最終形態か。

(大) 追加
 (ノ) 追加 本ノマ、
 (彰) 追加
 (明) 追加
 (伊) 追加
 (島) 追加

(祐) 追加
 (書) * (書) にも「追加」の表記がない。(明) の後の形であることは確かだらう。
 (三) (三)
 (静) (内) 頼
 (神1) (神2) 形 見とてしけく巻 とく文の文字それさへ薄 くなる契 かな
 (続内) (続) 形 見とてしけく巻 とく文の文字それさへ薄 くなる契 かな
 (大) (大) 形 見とてしけく巻 とく文の文字それさへ薄 くなる契 かな
 (ノ) (ノ) 形 見とてしけく巻 とく文の文字それさへ薄 くなる契 かな
 (彰) (彰) 形 見とてしけく巻 とく文の文字それさへ薄 くなる契 かな
 (明) (明) 形 見とてしけく巻 とく文の文字それさへ薄 くなる契 かな
 (伊) 形 見とてしけく巻 とく文の文字それさへ薄 くなる契 かな
 (島) 形 見とてしけく巻 とく文の文字それさへ薄 くなる契 かな
 (祐) 形 見とてしけく巻 とく文の文字それさへ薄 くなる契 かな
 (書) 形 見とてしけく巻 とく文の文字それさへ薄 くなる契 かな
 (三) 形 見とてしけく巻 とく文の文字それさへ薄 くなる契 かな
 (静) 形 見とてしけく巻 とく文の文字それさへ薄 くなる契 かな
 (内) 形 見とてしけく巻 とく文の文字それさへ薄 くなる契 かな

(神1) かた
 (統) もし
 (統書) もし
 (統内) を もし
 * (統内) は他本「巻とく」を「巻をく」と作る。書き損じか。
 (神2) もし
 うす
 哉

右 浦鶴「(三)(彰)」

(国) 今 はとて昔 いく世を忍 らん我 身ふけるの浦 に鳴鶴
 (大) 忍 ふ わか身吹 飯 うら
 (ノ) 忍 ふ 覧 わか 吹 飯
 (彰) むかし 吹 飯
 (明) 今 はとて昔 いく世を忍 らん我 身吹 飯の浦 になくつる
 (伊) むかし 忍 ふ 吹 飯
 (島) むかし しのふ 吹 飯
 (祐) むかし しのふ 吹 飯 うら
 (書) 忍 ふ む 吹 飯
 (三) むかし わか
 * 「むかし」の表記以外は(三) || (静)。
 (静) わか
 (内) わか 吹 飯 うら
 (神1) 代 ふ わか 吹 飯 うら
 (統) いま むかし 忍 ふ 吹 り うら
 (統書) いま むかし しのふ 吹 り うら
 (統内) いま むかし しのふ 吹 り うら
 (神2) いま むかし しのふ わか 吹 り うら
 なく
 つる

七十九番左 久忍恋
 (国) もえ出 し昔 はいつそ我 みても 庇 の草の軒 の下 露
 * (国) は(内)と同じく(大)・(明)系「もえそめし」を「もえ出し」、「初」を「むかし」と作る。最終形態と見てよいだろう。(大)・(明)では萌え始めた初めはいつだったかという内容だが、(国)・(内)では萌え出した昔はいつだったか、という内容であり、「久忍恋」の題詠では、(国)・(内)の方が題意をよく伝えている。

(大) そめ 初 は ひさし
 (ノ) そめ 初 は われ ひさし
 (彰) そめ 初 は われ ひさし
 * (彰) は「ひかし」の「か」にミセケチ「さ」と傍書。同筆別筆不明。
 (明) もえそめし初 はいつそわれみても ひさしの草の軒 の下 露
 (伊) 初 はしめ われ 久し
 (島) そめ 初 われ ひさし
 (祐) そめ 初 かわれ見 ひさし
 (書) そめ 初 は われ ひさし
 (三) へ初 し始 は ひさし
 * 「もへ」「した」の表記以外、(三) || (静)。
 (静) 初 し始 は ひさし
 * (静) は(大)系と同じ。
 (内) 出 し
 * (神1)・(内)は(国)と同文。(内) || (神1) || (国)。
 (神1) 見
 (統) そめ はしめ ひさし
 * (統) は「はしめ」に「むかしイ」と傍書。異文は(内)・(国)と同じ。

(統書) そめ はしめ ひさし
(統内) そめ はしめ ひさし
(神2) そめ はしめ ひさし

右 暁雲

(国) 別 かねたれとぬる夜そわきもこかつらぎ山 の雲の乱 は

(大) わかれ みたれ

(ノ) わかれ みたれ

(彰) わかれ 子 みたれ

* (彰) は「わかれされ」の「さ」にミセケチ「た」と傍書。同筆・別筆不明。別筆か。

(明) わかれかねたれとぬる夜そわきもこかつらぎ山 の雲のみたれは

(伊) わかれ みたれ

(島) わかれ みたれ

(祐) わかれ やま みたれ

(書) わかれ みたれ

(三) 誰とよ みたれ

* (三) は「よ」の表記、「わきもく」という書き損じがあるが、原則的に(二三) 〓 (静)。

(静) 誰と みたれ

* (静) は「わきもか」の「も」と「か」の間に○で「子」と傍書。書き損じによる。

(内) わかれ 誰と 子

* (内) は「わき子」の「き」と「子」の間に「も」と傍書(同筆)。

(神1) わかれ みたれ

(統) わかれ 誰と 子 乱れ

(統書) わかれ 誰と 子
(統内) わかれ 誰と 子
(神2) わかれ 誰と 子

八十番 左 寄草恋

(国) おり立 て思 のねせり君も見はみかきか原 に身をや捨 まし

(大) 思 ひ み

(ノ) 思 ひ み

(彰) を 思 ひ み みて

(明) おり立 て思 ひのねせり君も見はみかきか原 に身をやすてまし

(伊) 折 思 ひ みて

(島) 思 ひ みて

(祐) おもひ みて

(書) おもひ みて

* (三) 〓 (静)。

(静) × み

* (静) は「君もみよ」の「よ」にミセケチ「は」。書き損じによる。

(内) おもひ 根 み みて

(神1) 思 ひ 根 みて

(統) たち 思 ひ み 御垣

(統書) たち 思 ひ み 御垣

(統内) たち 思 ひ み 御垣

(神2) たち 思 ひ 御垣

右 山家鳥(神1)(書)(彰)

- (国) * (国) は(大)・(明)系に先祖返りしたか。
- (大) (大)
- (ノ) (ノ)
- (彰) (彰)
- (明) (明)
- (書) (書) 寄月祝
- (三) (三) 寄月祝
- (静) (静) 寄月祝
- * (静) はこれに墨消し(ミセケチ)で「山家鳥」とする。つまり、「寄月祝」という本文があったということだ。(静)は、先祖返りしたか。
- (内) (内) 寄月祝
- (神1) (神1) 寄月祝
- (続) (続) 寄月祝
- (続書) (続書) 寄月祝
- (続内) (続内) 寄月祝
- (神2) (神2) 寄月祝
- (国) (国) 夜やふかき嶺 の庵 の明 て後ふもとをきけは初鳥の声
- (大) (大) 峯
- (ノ) (ノ) みね いほり あけ 禁 こゑ
- (彰) (彰) みね いほり あけ 禁 こゑ
- (明) (明) 夜やふかき峯 のいほりのあけて後麓 をきけは初鳥のこゑ〔六三ウ〕
- (伊) (伊) 峯 いほり あけ 麓 聞 は
- (島) (島) 峯 いほり あけ 麓 こゑ
- (祐) (祐) みね いほり 麓 こゑ
- (書) (書) 天照 す神代の鏡 雲の上 にいたすとみるや秋のよの月

* (書) と(明) が題・歌ともに異なる。重要な用例。

(三) 天 てらす神世のかゝみ雲の上 にいたすと見るや秋の夜の月

(静) みね あけ

* (静) は「天てらす神世のかゝみ雲の上」にいたすとみるや秋の夜の月」を墨消しで、「夜やふかきみねの庵のあけて後ふもとをきけは初鳥の声」を題の下に傍書。

* 問題は「寄月祝」「あまてらす」詠は今のところ、どこにも存在しない。題も正徹・正広になし。よって、後から捏造されたものであると考えられる。(静)はそれに気がついて、(大)系に戻ったか。

(内) 天照 す神代の鏡 雲のうへにいたすとみるや秋の夜の月

* (内)・(神1) 〓 (三)。

(神1) 天照 ×神代の鏡 雲の上 にいたすと見るや秋の夜の月

(続) あま照 す神代のかゝみ雲の上 に出 すと見るや秋の夜の月

(続書) あま照 す神代のかゝみ雲の上 に出 すと見るや秋の夜の月

(続内) あま照 す神代のかゝみ雲の上 に出 すと見るや秋の夜の月

(神2) あま照 す神代のかゝみ雲の上 に出 すと見るや秋の夜の月

* (神1)・(内)・(続)系は題・歌ともに別のもの。(静)にも絡む。

八十一番左 不言恨恋

(国) 尋 ても誰れ宿 からむ塩 こえて鳴にかねつく浦 の夕 浪

* 私家集大成は「誰宿」と読むが、(国)には「レ」が傍書されているので、「誰れ宿」とする。

(大) やと うら くれ

* (大)では、末句「夕くれ」と作る。

(ノ) たれやと 鐘 波

* (ノ)は末尾は「夕波」であり、(大)の「夕くれ」になっていない。(大)系

の変容か、それとも(明)系による校訂か。

(彰) たれやと 鐘 ゆふなみ

(明) 尋 てもたれやとからむ塩 こえて鳴に鐘 つく浦の夕浪

(伊) たれやと 鐘 うら 波

(島) たれやと 鐘 うら

(祐) たれやと 鐘 うら ゆふなみ

(書) たれやと 鐘 うら

(三) たれ 鐘 ゑ

* (三) || (静) たれ 鐘 ゑ

(静) たれ やと 鐘 ゆふなみ

(内) たれやと 鐘 なみ

(神1) たれやと 鐘 なみ

(統) 尋ね たれ 鐘 なみ

(統書) 尋ね たれ 鐘 なみ

* (統内) は(神2) 同様に「すえて」と作る。「こ」が「す」に読み間違えられたか。

(統内) 尋ね たれ 鐘 なみ

(神2) 尋ね たれ 鐘 なみ

* (統書)・(神2) は「しほすえて」と作る。独自本文。但し、もともとの誤読に基づくか。

右 山寺隠雲(国)(静)(三) 大ひえやわかたつ柚の山口につくや雲の林 なるらん

(国) 大ひえやわかたつ柚の山口につくや雲の林 なるらん

(大) 我 た はやし

(ノ) 立 柚 はやし

(彰) 立 柚 はやし

(明) 大ひえやわかたつ柚の山口につくや雲の林 なるらん

(伊) はやし成ら

(島) やま

(祐) はやし

(書) 鐘

(三) 鐘

* (三) || (国) 鐘

(内) 立 柚

(神1) 我 立 柚

(統) はやし

(統書) はやし

(統内) はやし成ら

(神2) はやし

八十番 左 寄衣恋(内)

(国) 八十番

* (国) は「八十番」とするが、次が「八十三番」と正しくなっているので、書き損じであろう。

(大) 八十二番

(ノ) 八十二番

(彰) 八十二番

(明) 八十二番

(伊) 八十二番

(島) 八十二番

(祐) 八十二番

(書)	八十二番						
(三)	八十二番						
(静)	八十二番						
(内)	番号なし						
(神1)	八十二番						
(統)	八十二番						
(統書)	八十二番						
(続内)	八十二番						
(神2)	八十二番						
(国)	心	して夜はの衣をぬきをくに猶	も人香のとまる袖	哉			
(大)							
(ノ)							
(彰)	半						
(明)	心	して夜はの衣をぬきをくに猶	も人かのとまる袖	かな			
(伊)							
(島)	こゝろ						
(祐)	こゝろ						
(書)							
(三)							
(静)	半						
(内)							
(神1)		お					
(統)	半						
(統書)	半						
(続内)	半						
(神2)	半						

右 古郷草(島)(祐)(内)(彰)

(国) 敷嶋や昔 はさそな道の草色に花 さく古郷の霜

* (国) は、(内)と同じく、(大)・(明)系は「花さけ」とするに「花さく」と作る。最終形態か。

(大) しき むかし

(ノ) け けふるさと

(彰) むかし

(明) 敷嶋や昔 はさそな道の草色に花 さけ古郷の霜

(伊) むかし

(島) むかし

(祐) むかし

(書) みち はな けふるさと しも

(三) むかし ふるさと

* (三) || (静) || (国) と思われる。なお、(神1)・(内)も「さく」。

(静) 開ふ

* (静) は「色に花開ふる郷の霜」であるから、「開」が「さく」なのか、「さけ」なのか、不明であるが、これまでの用例を見れば、「さく」だろうが、「さけ」の可能性も完全には否定できない。

(内) しきしまの

* (内) は他本「敷嶋や」とするの、「しきしまの」と作る。独自本文。(神1)も同文。

(神1) の くさ

(統) むかし 故

(続書) むかし 故

(続内) むかし 故

(神2) むかし

故

八十三番左 秋逢恋(神1)

(国) ならはすも初 とや出しの朝 風に心 やすめて向 ふ窓 哉

(大) 鳥 あさ むか こひ

* (大) の「初」の次の字は「鳥」である。「鳥や」とあるが、「鳥屋」で「とや」と読む

(ノ) た むか かな

(彰) た あさ むか かな

* (彰) は「ならはすは」の「は」にミセケチ「も」と傍書。同筆か。
(明) ならはすも初 とやたしの朝 風に心 やすめてむかふ窓 哉

(六四オ)

* (明) の「初とやたし」の字は「こし」とも読める。

(伊) こ むか かな

* (伊) は(明)の「たし」||「こし」を「こし」と読んだのだから。

(島) た こゝろ むか かな

* (島) は(明)の「こし」を「たし」と読んだのだから。

(祐) た こゝろ むか かな

* (祐) は(島)を写したのだから「たし」となる。

(書) よはつ た むか

* (書) と(明)が事なり、(書)が(三)と一致する。

(三) よ 鳥屋た かな

* (三) || (静) 初期 || (内)。(国)の直前で「ならはすよ」という本文があっ

たということだろう。

(静) 鳥屋た かな

* (静) は「ならはすよ」に「よ」にミセケチ「も」と傍書。書き損じではなく、

(内) 系の本文を持つ底本を見て、それから(大)系で校訂したか。

(内) よ 鳥屋た

(神1) よ 鳥やた むか 窓

* (神1) は「ならはすよ」で(内)と同文。「向かふ窓」は「窓」の誤読によるものだろう。

(統) はつ た むか

* (統) は「ならはずも」の「も」に「よイ」と傍書。異文は(内)と同じ。

(統書) はつ た むか

(統内) はつ た むか

(神2) はつ た むか

* この歌の二句と三句は「はつとやだしの／朝風に」と読む。そうなると、二句目の意味は、鷹狩がらみで、鳥屋が「鷹の羽が夏の末に抜け落ち、冬になって生え揃うこと」もしくは、「その回数によって鷹の年齢を数え、三歳あるいは四歳

以上の鷹、また、四歳秋から五歳までの鷹を特に称する」(日国)らしいので、ここは「とやだし」で四歳秋の鷹を比喻に使っているか。「とやだし」は9首

(正治百首他)数える。
玄玉和歌集 卷七 草樹下
かるかやを 皇太后宮大夫俊成

六七一 はし鷹やはつとやだしの秋風にまだきしほれぬ野路のかるかや
この歌が本歌だろう。

右 古砌逢(ノ)(書)

(国) 所うる庭のよもきふ秋 もこはいとゝさし入 月そなからむ

* (国) は他本末句「月もなからむ」とするに「月そなからむ」と作る。「秋も」

との「も」の重複を避けたか。最終形態か。

(ノ) も
 (彰) ん
 (明) 所うる庭のよもきふ秋 もこはいと、さし入 月もなからむ
 (伊) いるも ん
 (島) も ん
 (祐) あき も
 (書) も ん
 (三) や ん
 *(三) || (静)、「月やなからん」。
 (静) や ん
 *(静) は「月やなからん」という独自文。但し、「や」に「もイ」と傍書。
 (内) も
 *(内) || (神1) は、(大) (明) 系と同様に、「も」とすれば、「月も」↓「月や」↓「月も」↓「月そ」という変化か。(大) ↓(明) ↓(国) と言えば、「月も」↓「月そ」だけだろう。
 (神1) も
 (統) 蓬 生 いるも ん
 (統書) 蓬 生 いるも ん
 (統内) 蓬 生 いるも ん
 (神2) 蓬 生 いるも ん
 八十四番左 寄橋恋
 (国) 神代よりいく世の人の思 川 かけしそつらきあまの浮橋
 *(国) は、(大)・(明) 系が「あめのうきはし」とするに「あまの浮橋」と作る。「あめのうきはし」の用例はない。「あまの浮橋」は30例以上あるから、通例に合わせたか。最終形態か。

(大) よ 天 うきはし
 (ノ) 思 ひ 天 橋
 (彰) ん
 (明) 神代よりいく世の人の思 川 かけしそつらきあめのうきはし
 (伊) 思 ひ ん
 (島) おもひ 「め 浮 はし
 (祐) おもひ かは 「め うきはし
 (書) おもひ かは 「め うきはし
 (三) く天 うき
 *(三) は「つらく」と作る。誤写・書き損じによるか。
 (静) 世 河 天 うき
 (内) ひ 天 うき橋
 (神1) おもひ 天 うきはし
 (統) おもひ河
 (統書) おもひ河
 (統内) おもひ河
 (神2) おもひ河
 右 晝更灯「(三) (彰)
 (国) 高野山 後の仏 に石の室ひらくを見はや法の灯
 (大) たかの み ともし火「
 (ノ) ほとけ ともし火
 (彰) ほとけ
 (明) 高野山 後の仏 に石の室ひらくを見はや法の灯
 (伊) ほとけ ともし火
 (島) ほとけ ともし火

(祐) やま ほとけ ともしひ
 (書) のち
 (三) のち
 *(三) || (静)。のち
 (静) のち
 (内) のち
 (神1) ともし火
 (統) ともし火
 (統書) ともし火
 (続内) ともし火
 (神2) ともし火
 *(神2) は「宝」にミセケチ「室」と傍書。書き損じだろう。

八十五番左 尋縁窓

(国) ことのねにかよは、行て嶺の松風のしらへを先や問はまし
 (大) 琴音 みね 問まし
 (ノ) 琴音 ゆき 峯 と
 (彰) 琴音 ゆき と
 (明) ことのねにかよは、ゆきて嶺の松風のしらべを先やとはまし
 (伊) 音 ゆき と
 (島) ゆき と
 (祐) はゆき と
 (書) ゆき と
 *(書) は「ゆきの」の「の」にミセケチ「て」。同筆。
 (三) 音 かせ まつ と
 (静) 音 と

(内) かせ と
 (神1) と
 (続) 琴音 松 と
 (続書) 琴音 雪の 松 と
 (続内) 琴音 雪の 松 と
 (神2) 琴音 雪の 松 と
 *(続書)・(神2) は他本「行て」を「雪の」と作る。独自本文。
 右 巖頭苔「(神1)」
 (国) 巖頭苔
 *(国) は(内)(大)と同じく「頭」と作る(内)も同じ。これは(内)・
 (大) 段階に最終的に戻ったことを示していよう。「巖頭苔」は草根集にある。
 「巖上苔」は草根集にはない。これが決定打か。
 (大) 巖頭苔
 (ノ) 巖頭苔
 *(ノ) || (大) || (国) || (神1) || (内)
 (彰) 巖頭苔
 (明) 巖上苔
 *(明) は「頭」を消して「上」
 (伊) 巖上苔
 (島) 巖上苔
 (祐) 巖上苔
 (書) 岸頭苔
 *(書) と(明) が異なる。(書) || (三)。
 (三) 岸頭苔
 *(三) || (静) || (統)系。

(静) 岸頭苔

* (統) 系と(静)だけが「岸頭苔」と作る。理由はまだ分からない。意味的には「巖」の方がよい。誤読か。

(内) 巖頭苔

* (国)・(大)・(神1)・(内)は「巖頭声」。

(神1) 巖頭苔

(統) 岸頭苔

(統書) 岸頭苔

(続内) 岸頭苔

(神2) 岸頭苔

(国) 苔の上 にな又 そかさぬるさむしとは誰 かいはほの鶴 の毛衣

* (国)は「さむしろは」の「ろ」に「と」と傍書。但し、「ろ」にはミセケチはない。(内)はこれを受けたのか、「さむしとは」と作る。これは何を示しているか。他本同様に「さむしとは」でいきたいのか。それとも、「さむしろは」としたいのか。決定不能状態を示しているか。ともに意味は通るものの、「さむしろ」の方が自然な感じがする。他本を見て、決めたい。

(大) さひし 岩 ほ

(ノ) たれ 岩 ほ

(彰) うへ な さひし たれ 岩 ほ

* (彰)は他本「かさぬる」を「かさなる」、「さむし」ではなく、(大)と同じく「さひし」

(明) 苔の上 にな又そかさぬるさむしとはたれか巖 の鶴 の毛衣

(伊) こけ たれ 岩 ほ (六四ウ)

(島) また たれ 岩 ほ

(祐) こけ また たれ 岩 ほ

(書) たれ 岩 ほ つる

(三) 巖

* (三) 〓 (静)。

(静) 巖

(内) 巖

* (内) 〓 (国)。

(神1) たれ

(統) たれ つる

(統書) たれ つる

(続内) たれ つる 羽

* (続内)は他本「毛衣」を「毛羽」と作る。連想による書き損じか。

(神2) たれ つる

* (神2)は「け衣」の「け」にミセケチ「毛」と傍書。書き損じだろう。

八十六番左 寄花見恋(国)(静)

(国) 心 をは人にうつして山 桜 みるに向 はぬ花 のかけかな

(大) さくら むか はな 哉

(ノ) むか 陰

(彰) やまさくら見 むか

(明) 心 をは人にうつして山 桜 みるにむかはぬ花 のかけかな

(伊) さくら むか

(島) さくら むか

(祐) こころ やまさくら見 むか はな

(書) むか

(三) はな

* (三)は「はな」以外(国)と同一表記。

(静) 橘 さくら 陰 哉
 (内) 橘 見 哉
 (神1) 橘 見 哉
 (統) 橘 さくら 陰
 (続書) 橘 さくら 陰
 (続内) 橘 さくら 陰
 (神2) 橘 さくら 陰

右 披書知昔(書)(彰)
 (国) たち花にあらぬ昔 を知 文のかほる思 やうち山さと
 (大) 橘 むかし しる
 (ノ) 橘 むかし しる人 思ひ 宇治 里
 * (ノ) は「しる人」と作る。「文」を誤記したか。他本に「人」はない。
 (彰) 橘 しる おもひ 里
 * (彰) は「柏カ」にミセケチ「橘」と傍書。同筆か。
 (明) 橘 にあらぬ昔 を知る文 のかほる思 ひや宇治の山 さと
 (伊) 橘 むかし 知る 思ひ 宇治
 (島) 橘 むかし 知る おもひ 宇治
 (祐) たちはな むかし 知る おもひ 宇治 やま
 (書) 橘 むかし しる 思ひ 宇治 里
 (三) 橘 むかし しる
 * (三) 〓 (静)。
 (静) 橘 むかし しる
 (内) 橘 しる 思ひ 宇治 里
 (神1) 橘 しる 思ひ 宇治 里
 (統) 橘 むかし しるふみ おもひ 里

(続書) 橘 むかし しるふみ おもひ
 (続内) 橘 むかし しるふみ おもひ
 (神2) 橘 むかし しるふみ おもひ
 八十七番左 等思兩人恋
 (国) 等思兩人恋
 * (国) は他本と異なり、「思」を「兩人」の前に置く。こちらの方が漢文としてはよい。最終形態か。
 (大) 等兩人思恋
 (ノ) 等兩人思恋
 (彰) 等兩人思恋
 (明) 等兩人思恋
 (伊) 等兩人思恋
 (島) 等兩人思恋
 (祐) 等兩人思恋
 (書) 等兩人思恋
 (三) 等思兩人恋
 * (三) 〓 (静) 〓 (国)。
 (静) 等思兩人恋
 * (静) は(国)と同じ。
 (内) 等兩人思恋
 * (内) の表記が(大)・(明)系に踏襲され、(三)で改められたと見てよいだろう。
 (神1) 等兩人思恋
 (続) 等兩人思恋
 (続書) 等兩人思恋

(続内) 等兩人思恋

(神2) 等兩人思恋

(国) 袖の露もいつれのかたかふかゝらむ面影 分るふるの中道

(大) ん おもかけ

(ノ) ん かほる

* (ノ) は他本「わくる(分る)」を「かほる」と作る。誤読か。「分」を「かほ」と読んだか。

(彰) ん かけ

(明) 袖の露もいつれのかたかふかゝらむ面影 わくるふるの中道

* (明) は「かたに」の「に」ミセケチ「か」

(伊) ん わく

(島) ん かけわく

(祐) ん かけわく

(書) ん わく

(三) ん

* (三) 〓 (静)、「む」以外は(国)も同一表記。

(静) ん

(内) ん わく

(神1) ん わく

(続) ん おもかけ

(続書) ん おもかけ

(続内) ん おもかけ

(神2) ん おもかけ

* (神2) は「いつれのかたに」の「に」にミセケチ「か」と傍書。書き損じだろ。

右 春秋野遊(島)(祐)(三)

(国) さくらかり秋は小鷹に立 鳥の毛花 ものへにちる嵐 哉

(大) 桜

(ノ) 桜 たつ

(彰) 桜 かり秋は小鷹に立 鳥の毛花 も野へにちる嵐 哉

(明) 桜

(伊) 桜

(島) たつ

(祐) たつ

(書) 桜

(三) 桜

(静) 桜

(内) 桜

(神1) 桜

(続) 桜

(続書) 桜

(続内) 桜

(神2) 桜

八十八番左 寄草別恋(神1)

(国) おきて行涙 や染る道 の草名さへちのはの色に枯ぬる

(大) 桜

(ノ) 泪

(彰) 起て

(明) おきて行涙 やそむる道 の草名さへちの葉の色に枯ぬる(六五オ)

(伊) 起て

(島) そむ 葉 かれ
 (祐) なみた そむ 葉 かん
 (書) そむ みち 葉 かん
 (三) そむ かん
 * (三) || (静) || (国)。
 (静) かん

右 心静延寿(彰)
 (国) すましみる心 の水ののとけさに老の浪よる身とおほえず
 (大) 見 かん
 (ノ) 見 かん
 (彰) 見 かん
 (明) すましみる心 の水ののとけさに老の浪よる身とおほえず
 (伊) かん
 (島) かん
 (祐) 見 こゝろ かん
 (書) かん
 (三) かん
 * (三) || (静) || (国)。
 (静) かん

* (静) は「身をもおほえず」の「をも」にミセケチ「とも」と傍書。書き損じか。
 (内) かん 波 かん
 (神1) かん
 (続) かん
 (続書) かん
 (続内) かん
 * (続内) の「おほえず」の「え」は「へ」に似ているが、「え」だろう。
 (神2) かん 閑さ

八十九番左 恨身恋(ノ)
 (国) 千世もとは人やは祈る長岡 やさのみ命 の我 そつれなき
 (大) 祈 長 をか
 (ノ) 祈 長 かん
 * (ノ) は(大)と「祈長」で同一表記。
 (彰) 祈 なか
 (明) 千世もとは人やは祈 長岡 やさのみ命 のわれそつれなき
 (伊) かん
 (島) をか かん
 (祐) いのるなかをか かん いのち かん
 (書) 祈 × かん われ
 (三) いのる かん
 * (三) || (静)。
 (静) いのる かん
 (内) とせ × いのる かん
 * (内)・(神1) は他本「千世もとは」を「千とせもと」と作る。独自本文。

(神1) ちとせ ×
 (統) いのる いのち われ
 (統書) いのる いのち
 (統内) いのる いのち
 (神2) いのる いのち

右 幽栖「書」

(国) あらすなよわれすみ捨 は松の声 ひとりそもらん宿の秋風
 * (国) の「捨は」は「はては」と訓むのか。「すみすて」では意味が通らない
 が、(統) も同じ。最終形態の可能性はある。

(大) 我 す はて む かせ
 (ノ) はて
 (彰) はて 独 そ かせ
 (明) あらすなよわれすみはては松の声 ひとりそもらん宿の秋風
 (伊) はて む
 (島) はて む かせ
 (祐) はて む かせ
 (書) すて む
 * (書) と(明) が異なり、(書) 〓 (三)。
 (三) 我 すて 独 ん
 * (三) 〓 (静)。
 (静) 我 はて 独 ん
 * (静) は「みすて」の「す」にミセケチ「は」と傍書。とすれば、先祖返りか。
 (内) 終は こゑ独 そ かせ
 (神1) はて こゑ独 そ む かせ
 (統) 我 すて ん かせ

(統書) 我 すて ん かせ
 (統内) 我 すて ん かせ
 (神2) 我 すて ん かせ
 * (統) 系は「すみすては」と作る。(国) と同文か。

九十番 左 寄煙窓

(国) 胸 にたつ煙 をとは、引 いる、袖の火取 と人にこたへん
 (大) むね
 (ノ) むね 立 煙 けふり ひき とる
 (彰) むね けふり ひき
 (明) むねに立 煙 をとは、引 いる、袖の火取 と人にこたへん
 (伊) むね 立 けむり
 (島) むね 立 ひき
 (祐) むね 立 ひき
 (書) むね 立 ひき
 (三) むね 立 ひき
 * (三) 〓 (静)。
 (静) とり
 (内) 立 立
 (神1) 立 立
 (統) 立 立
 (統書) むね 煙 ひとり
 (統内) むね 煙 ひとり
 (神2) むね 煙 ひとり
 右 晚鐘「国」(静) (神1) (三) (彰)

(国) 山本に臥とてさばく村 鳥をしつめて暮る 鐘の声 哉
 (大) もと ふす むら
 (ノ) ふす くるゝ
 (彰) ふす かな
 (明) 山本にふすとてさばく村 鳥をしつめて暮る 鐘の声 哉 (六五ウ)
 (伊) ふす 暮ゝ
 (島) もと ふす 暮ゝ かな
 (祐) もと ふす むら 暮ゝ かな
 (書) ふす くるゝ ころゝ かな
 (三) ふす くるゝ ころゝ かな
 (静) ふす くるゝ ころゝ かな
 (内) くるゝ ころゝ かな
 * (内) は「しめて」の「し」と「め」の間に「つ」を傍書。
 (神1) ふす 暮ゝ かな
 (統) もと ふす くるゝ かな
 (統書) もと ふす くるゝ かな
 (続内) もと ふす くるゝ かな
 (神2) もと ふす くるゝ かな

九十一番左 馴不逢恋

(国) おきふしもおなしまかきの竹 のよをむなし契となに憑 けん
 * (国) と (内) は末句を「むなし契となに憑けん」と作る。(大)・(明)系は「なとてむなしき中と成けん」である。但し、(大)の「なしけん」を(明)は「なりけん」と改訂している。(国)と(明)の意味上の違いは、(国)では、「空虚な約束なのはどうしてあてにしたのだろう」というもの(「たのめ」だとあてにさせたのだろうとなる)であり、(明)の「どうしてむなししい関係になったの

だろう」とは異なる。ここで、題の「馴不逢恋」との関係を見ると、逢わない意味合いは(国)の方が強い。よって、これが最終形態かと思われる。

(大) 籙 かな
 * (大) は「中となしけん」と作る。推敲の一過程か。

(ノ) 籙 かな
 * (ノ) は(大)「なしけん」なのに、(明)と同じく「成けん」と作る。理由は今のところ不明。どこかで校訂されたか。否、これで「なしけん」と読ませているのだろう。おそらく(明)も。

(彰) 籙 かな
 を 籙 かな
 (明) おきふしもおなし籙 の竹 のよをなとてむなしき中と成 けん
 (伊) 籙 かな
 なとてむなしき中と成 けん
 (島) 籙 かな
 なとてむなしき中と成 けん
 * (島) は勝手に「なりけん」と読んだか。

(祐) 籙 かな
 なとてむなしき中となりけん
 (書) 籙 かな
 なとてむなしき中となりけん
 * (書) と(明) が異なり、(書) 〓 (三)。
 (三) 籙 世 何 たのめ
 * (三) 〓 (静) 初期 〓 (国)。
 (静) 籙 世 何 たのめ
 * (静) は「おきふすも」の「す」にミセケチ「し」。これは書き損じに拠るの

だろうが、その後、「むなし契に何たのめけん」を墨消しして「なとてむなしき中と成けん」を傍書する。先祖返りか。
 (内) 籙 世 何 たのめ
 * (内) は「たのめ」と作る。
 (神1) 籙 世 何 たのめ
 * (神1) は(国)と同文。

(統) 籬 たけ 何 たのめ
 (統書) たけ 契りに何 たのめ
 (統内) たけ 契に何 たのめ
 (神2) たけ 契りに何 たのめ
 * (神2) は「まかきに」の「に」にミセケチ「の」と傍書。(統)系は「契りに」と作る。

右 老後述懐

(国) うきたひに心 によする老のなみこえてあまるや涙なるらん
 * (国)・(内) は末句「涙なるらん」である。(大) (明) 系は「袖ぬらすらん」と作っている。この両者を比較すると、老の浪が越えて袖をぬらすという(大)・(明) 系の方が、自然の感じもするが、敢えて、浪が越えて、あまるのは、涙ということと、「老後述懐」の題意に沿おうとしたのではないか。最終形態か。

(大) 浪 袖ぬらすらん
 (ノ) 浪 袖ぬらすらん
 (彰) 浪 袖ぬらすらん
 (明) うきたひに心 によする老の浪 こえてあまるや袖ぬらすらん
 (伊) 浪 袖ぬらすらん
 (島) 浪 袖ぬらすらん
 (祐) こゝろ 浪 袖ぬらすらん
 (書) 浪 袖ぬらすらん
 (三) 浪 袖ぬらすらん
 * (静) 浪 袖ぬらすらん
 * (静) 浪 袖ぬらすらん
 (内) * (静) は「袖ぬらすらん」であり、(大)・(明) と同じ。

* (内) 〓 (神1) 〓 (国)。
 (神1) 浪
 * (神1) は(内)・(国) と同文。
 (統) 度 に 浪 袖ぬらすらん
 * (統) は末句「袖ぬらす」に「涙なるイ」と傍書。異文は(内) (国) と同じ。
 (内)・(統) は(国) の後の成立だろう。
 (統書) 度 に 浪
 (統内) 度 に 浪
 (神2) 度 に 浪 袖ぬらすらん

九十二番左 寄楨恋(内)

(国) 日数 のみつもる思 ひを雪 に見は楨立 山も色 そなひかん
 * (大) 段階で「なひかん」と改稿。 ×
 (ノ) たつ いろ
 (彰) いろ
 (明) 日数 のみつもる思 ひを雪 に見は楨立 山も色 そなひかん
 (伊) いろ
 (島) いろ
 (祐) おもひ いろ
 (書) おもひ いろ
 (三) いろ
 * (静) いろ
 (内) * (静) は「山の」の「の」にミセケチ「も」。書き損じによる。
 * (内) は末句を「色そなからむ」と作る。恋であるから、「なひかん」の方が

よい。独自本文。

(神1) なからん

* (神1) は(内)と同文。末句「色そなからん」。

(統) よそ たつ に

* (統) は「よそに」(他本「雪に」)、「色になひかん」(他本「色そなひかん」)

など、独自本文が多い。「よそに」は「雪に」の誤読か。

(統書) よそ たつ に

(続内) よそ たつ 「

(神2) よそ たつ に

* (統) 系は「よそに」「色になひかん」が独自本文。

右 懷薰(島)(祐)(内)(書)(彰)

(国) 旧

* (国) は私家集大成は「薰」と読んでいるが、「旧」である。

(大) 旧

(ノ) 旧

(彰) 旧

(明) 旧

(伊) 薰(「旧歟」と傍書)

* (明) の旧のくずし字が薰と似ていたためだろう。

(島) 旧

* (明) の旧のくずし字に似た形である。そのまま見て写したのだろう。

(祐) 旧

(書) 旧

(三) 旧

(静) 旧

(内) 旧

(神1) 旧

(統) 旧

(続書) 旧

(続内) 題なし

(神2) 旧

(国) よしや袖昔 を遠 くみちのくの月物 いはて忍 もちすり

* (国) は他本「みちのくや」とあるのに、(内)と同じく「みちのくの」と作る。最終形態か。

(大) 忍ふ

(ノ) むかし とを や や

(彰) むかし とを や や 忍ふ

(明) よしや袖昔 を遠 くみちのくや月物 いはて忍 もちすり

(伊) むかし とを や

(島) むかし とを や

(祐) むかし とを や

(書) むかし とを や

(三) むかし とを や

(静) むかし とを 道のくや しのふ

* (静) は「道のくや」となっており、(大)系と同じ。

(内) むかし とを

* (内) は「みちのくの」となっている。(内) || (神1) || (国)。

(神1) とを

(統) むかし 陸 奥や もの しのふ

(続書) むかし 陸 奥や もの しのふ

(続内) むかし 陸 奥や もの しのふ

(神2) むかし 陸 奥やもの しのお 「

九十三番左 従門帰恋

(国) 三輪の山や杉たつ門の夕嵐 やとりもとらて帰る雲かな

(大) わ かと 哉

(ノ) 立門 あらし

(彰) 立門 ゆふ かへる

(明) 三輪の山や杉立門の夕嵐 やとりもとらて帰る雲哉
(六六オ)

(伊) 立 かへ

(島) 立 あらし かへくも哉

(祐) × 立 ふゆあらし かへくも

* (祐) は他本「三輪の山」とあるところを「三輪山」と作る。(島)の「ノ」

字を無視した結果か。もしくは、意味で「三輪山や」と読んだ方がよいと判断し

たか。

(書) 立門 哉

(三) × あらし かへ 哉

* (三) も「三輪の山杉」となり、「や」がない。脱字か。

(静) かへ 哉

* (静) は「三輪の山」と「杉」の間にミセケチで「や」と傍書。書き損じによ

る。

(内) 立門 哉

(神1) 立門

(統) × かと

(続書) × たつかと

(続内) たつかと かへ

(神2) × たつかと かへ

* (統) 系は「三輪の山杉」となり「や」がない。字余りを気にして「や」をと

ったか。

右 深山狩獵(三)

(国) かり人の太山ち暮て弓張の月の兎の出るをそまつ

(大) 狩み路 はり

(ノ) 狩み路 はり

(彰) 狩み路 はり

(明) 狩人の太山路かれて弓はりの月のうさぎの出るをそまつ

* (明) は「月の兎」の「の」は傍書

(伊) 狩み路 はり

(島) 狩み路 はり

(祐) 狩み路 はり

(書) 路 はり

(三) 路 はり

(静) 路 はり

* (静) は「いつるをそみる」の「みる」にミセケチ「まつ」と傍書。書き損じ

による。

(内) 狩み路 はり

(神1) 狩み路 はり

(統) 狩み路 はり

(続書) 狩み路 はり

(続内) 狩み路 はり

(神2) 狩み路 はり

九十四番左 寄秋山恋

(国) わか袖も中く 染 よまき檜原 さりとて秋にもれん山 かは
 (大) それ 槓
 (ノ) それ 槓
 (彰) 我袖 それ 槓 ひ 河
 (明) わか袖も中く 〱 それよ槓 檜原 さりとて秋にもれん山 かは
 (伊) 我袖 それ 槓
 (島) それ 槓 はら
 (祐) それ 槓 ひはら 〱 むやま 物
 (書) それ 槓
 * (書) がどうして最後に「物かは」としたのは不明。書き損じだろう。
 (三) 我袖 それ 槓 ひはら
 * (三) 〱 (静)。
 (静) 我袖 それ 槓 ひはら
 (内) 槓
 (神1) 我袖 槓
 (続) 我袖 それ 槓
 (続書) 我袖 それ 槓
 (続内) 我袖 それ 槓
 (神2) 我袖 それ 槓

右 岸頭待舟 (ノ) (彰)

* (国) は「右 岸頭待舟」が前の歌「わか袖も中く」とこの歌「旅の空われ彼岸」の間に強引に入っている。よって、後段にしるしているように、ここで、ここまで完全に一致していた行数・丁数が(静)とずれてしまった。この原因は、親本がそうになっていたか。それとも、紙がずれるなりで書き忘れたかに

なるが、「旅の空われ彼岸」がなんとか題に干渉しないで記されているところを見ると、親本自体がこうなっていた可能性が高い。

(国) 旅の空われ彼岸 の舟ならて此 世にいそく浪そはかなき
 (大) 我 かの この
 (ノ) かの 波
 (彰) かの
 (明) 旅の空われかの岸 の船ならて此 世にいそく浪そはかなき
 (伊) かの
 (島) かの 船 この
 (祐) たひ かの この
 (書) かの
 (三) かの
 * (三) 〱 (静) 〱 (国)。
 (静) きのし 船 この 波
 (内) きのし 船 この 波
 (神1) かの
 (続) たひ かの この
 (続書) たひ かのきし この
 * (続書) は「声」にミセケチ「世」と傍書。書き損じだろう。
 (続内) たひ かのきし この
 (神2) たひ かのきし この

九十五番左 白地恋 (静)

* (静) はここで(国)と行数とがずれた。それまでは全く同じ丁数と行数だった。原因は、一丁九行を守っていたのに、(国)がここにかぎって、十行にした

ことによる。おそらく「岸頭待舟」を書き忘れて、後で狭い間に強引に入れたことに拠る。

(国)	雨やとり立	そふ程	を契	にてはかなや袖	を引	こゝろかな
(大)					ひく心	哉
(ノ)					ほと	
(彰)					ほと	
(明)	雨やとり立	そふほどを契		にてはかなや袖	を引	こゝろ哉
(伊)					ほと	
(島)					ほと	ちきり
(祐)					ほと	ちきり
(書)					ほと	ちきり
(三)					ほと	
* (三) 〓 (静)					ほと	
(静)					ほと	
(内)					ほと	
(神1)					ほと	
(統)					ほと	契り
(統書)					ほと	契り
(統内)					ほと	契り
(神2)					ほと	契り

右 松風〔神1〕(書)

(国) 万 木に松は一本 音 たかし嵐 いかなる契 なりけむ

* (国) は(大)・(明)系が二句目「たゝ一本も」を「松は一本」、四・五句目「嵐や松を初なりけん」を「嵐いかなる契なりけむ」と作る。最終形態か。

* (神1) は(内)と同文。末句が「契なるらむ」となる。

(大)	たゝ一もとも	嵐	や松	を初	なりけん
* (大) 段階で「なりけん」と改稿。					
(ノ)	たゝ一本	もをと	嵐	や松	をはしめなりけん
(彰)	たゝ一本	もをと	嵐	や松	をはしめなりけん
(明)	万	木にたゝ一本	もをと	たかし嵐	や松
				を初	なりけむ
(伊)	たゝ	もをと	嵐	やまつ	を初しめ成
(島)	たゝ	もをと	嵐	やまつ	を初しめ成
(祐)	たゝ	もをと	嵐	やまつ	を初しめ成
(書)	たゝ	もをと	嵐	やまつ	を初しめ成
(三)	たゝ一本	も	あらしや松	をはしめ成	らん
* (三) は(大)・(明)系だが末尾が「成らん」となる。					
* (内)・(神1) は末尾は(三)と同一だが、それ以外は(国)と同一表記。					
(静)	たゝ一	も	嵐	や松	をはしめなりけむ
* (静) は(大)と同じ。					
(内)			あらし		なるらむ
* (内) は、末句(国)を含めた他本「なりけむ」を「なるらむ」と作る。独自本文。					
(神1)					なるらむ
(統)	よろつ	たゝ一もとも	あらしや松	をはしめなるらむ	
* (統) は「たゝ一も」と「に「松は一もとい」、「や松をはしめ」に「いかなる契」と傍書。異文は(内)(国)と同じ。末句は(内)同様独自本文。					
(統書)	よろつ	たゝ一もとも	あらしや松	をはしめなるらむ	
(統内)	よろつ	たゝ一もとも	あらしや松	をはしめなるらむ	
(神2)	よろつ	たゝ一もとも	あらしや松	をはしめなるらむ	
* (統) 系は(大)・(明)系とほぼ同じだが、末尾「なるらむ」は(神1)・					

(内) と同文。

九十六番左 寄月恨恋

(国) とはぬ夜を袖に恨 て吹 飯かたおほくの浪をしのく月哉

(大) うらみ 深る

(ノ) うらみ 深る

(彰) うらみ 深る 波 かな

(明) とはぬ夜を袖にうらみて深るかたおほくの浪をしのく月哉

(伊) うらみ 深る

(島) うらみ 深る

(祐) うらみ 深る かな

(書) うらみ 深る かな

(三) うらみ 深る

(静) うらみ 深る かな

* (静) は「深る」をミセケチ「ふける」と傍書。「ふけ」と読ませたかったか
らか。

(内) うらみ 波 かな

(神1) うらみ

(統) うらみ ふける

(統書) うらみ ふける

(続内) うらみ ふける

(神2) うらみ ふける

右 閑居松風「(三)(彰)

(国) 風

* (大)・(明) 系は「嵐」とするが、(国)・(内) は「風」と作る。歌から言っ

て、「松風」がよい。

(大) 嵐

(ノ) 風

* (ノ) は、(大) が「嵐」とするのにな、どうして「風」としたのか、不明。

(三) 系を見たか。

(彰) 嵐

(明) 嵐

(伊) 嵐

(島) 嵐

(祐) 嵐

(書) 風

* (書) は(明) と異なり「風」

(三) 風

* (三) も「風」。これをそのまま受けたかな。

(静) 嵐

(内) 風

* (内) は風。

(神1) 風

(統) 風

(統書) 嵐

(続内) 嵐

(神2) 嵐

(国) 人すまぬ池辺にたてるそなれ松 風 のなひかすまゝにふりつゝ

* (国)・(内) は「人すまぬ」と作る。最終形態か。他本は「人すまて」。

(大) て

(ノ) て

* (ノ) は「池辺た」の「辺」と「た」の間に「に歟」、「そな松」の「な」と「松」の間に「れ歟」と傍書。校訂の跡か。

(彰) て

(明) 人すまで池辺にたてるそなれ松 風のなひかすまゝにふりつゝ

(伊) て まつ

(島) て

(祐) て

(書) て

(三) てへ

* (三) 〓 (静)、但し「かせ」以外。

(静) てへ

* (静) は(大)と同文。

(内) かせ

* (内) 〓 (神1) 〓 (国) となつたか。

(神1)

* (統) の末句「ふりけり」の「けり」に「つゝイ」と傍書。異文は(内)と同文。

(統)

(統書) て

(統内) て

(神2) て

* (統書)・(神2) は「人すまで」で(大)・(明)系と同文。(統)系の末尾「けり」は独自本文。

(国)

九十七番左 臥無実恋

いかにせむ枕 ならへて臥待 の月も涙 のへたてある身を

* (国) (内) は、(明)系の初句「こよひ人」を「いかにせむ」、末句「つらき世の雨」を「へたてある身を」と作る。最終形態か。恋の歌らしく変えたか。

(大) こよひ人 ふし

* (大) のみ末句が「つらき雨哉」となる。(内)の改訂。

(ノ) こよひ人 泪 つらき夜のあめ

* (ノ) は(大)系だが、この末尾は(明)系。校訂の結果か。

(彰) こよひ人 ふし つらき雨かな

(明) こよひ人 枕 ならへて臥待 の月も涙 のつらき夜の雨

* (大) の「つらき雨哉」を「つらき夜の雨」と改訂。

(伊) 今宵人 つらき夜の雨

(島) こよひ人 まつ なみた つらき夜の雨

(祐) こよひ人 まくら まつ なみた つらき夜の雨

(書) いかにせん へたてある身を

* (書) は「こよひ人」にミセケチ「いかにせん」、「つらき夜の雨」にミセケチ「へたてある身を」と傍書。同筆か。訂正後は(三)と同文。もしくは、(内)による校訂か。

(三) ふしまち 隔

* (三) 〓 (静)初期〓 (国) 〓 (神1) 〓 (内)。

(静) こよひ人 枕 ならへて臥待 の月も涙 のつらき夜の雨

* (静) はこの前に「いかにせむ枕ならへてふしまちの月に涙の隔ある身を」を記して、墨消す。これは「月に」となっているが、(国)系本文。先祖帰りか。

(内) * (神1)・(内) は(国)と同文。

(神1) こよひ人 ふし

* (統) は「こよひ人」に「いかにせんイ」、「つらき夜のあめ」に「へたてある

つらき夜のあめ

つらき夜のあめ

つらき夜のあめ

つらき夜のあめ

つらき夜のあめ

つらき夜のあめ

つらき夜のあめ

つらき夜のあめ

つらき夜のあめ

つらき夜のあめ

身をイ」と傍書。異文は(内)(国)と同文。

(統書) こよひ人

ふし つらき夜のあめ

(続内) こよひ人

ふし つらき夜のあめ

(神2) こよひ人

ふし つらき夜のあめ

右 寄水釈教「七四(国)(島)(祐)

(国) あかの水うつしもて行 花皿 につたふる法のふかきをぞ知

(大) さら 深き しる

* (大) 段階で「深きをそしる」と改訂。

(ノ) あ伽 深き しる

* (ノ) は「深き」の「き」に「さ敷」と傍書。校訂か。(静)・(三)は「さ」とする。

(彰) しる

(明) あかの水うつしもて行 花皿 につたふる法の深きをそしる

(伊) 深き しる

(島) 深き しる

(祐) ゆく さら 深き しる

(書) 深き しる

(三) さら 深き しる

* (三) || (静) 初期。

(静) しる

* (静) は「血」にミセケチ「皿」、「ふかさ」の「さ」にミセケチ「き」と傍書。

(内) さら 伝ふ 心 をそしる

* (内) は末句「心をそしる」と作る。独自本文。

(神1) さら 伝る 心 をそしる

* (神1) は(内)と同文。

(統) しる

* (統) は「ふかき」に「心イ」と傍書。異文は(内)と同文。

(続書) しる

* (続書) は歌の上部に「花皿」と記す。

(続内) しる

(神2) しる

九十八番左 寄鸞恋

(国) はれかたき涙 の雨に蓑 毛風 袖は江 川を鷺 の一つれ

(大) 涙 みの かせ

(ノ) 涙 みの かせ

(彰) みの かせ

(明) はれかたき涙 の雨にみの毛かせ袖は江 川を鷺 の一つれ (六七オ)

(伊) みの かせ

(島) なみた みの かせ

(祐) なみた みの かせ

(書) 晴か みの かせ

(三) 晴か みの かせ

* (三) || (静)。

(静) 晴か みの かせ

(内) 晴か みの かせ

(神1) 涙 みのけかせ えかは

(続) 涙 みのけかせ えかは

(続書) 涙 みのけかせ えかは

* (続書) は「雨よ」の「よ」にミセケチ「に」と傍書。勘違いを恐れて敢えて傍書したか。

(続内) 泪 みのけかせ えかは
 (神2) 泪 みのけかせ えかは

右 田家奥〔書〕(彰)

(国) 湊 田や冬の日よりとまふ鶴 におくてかる男もうたふ声 こゑ

(大) つる つる おお こゑ

(ノ) つる つる を を

(彰) 湊 田や冬の日よりとまふつるにおくてかる男もうたふこゑ

(明) つる つる 声

(伊) つる つる こゑ

(島) つる つる こゑ

(祐) つる つる こゑ

(書) つる つる こゑ

(三) みなと

* (三) 〓 (静)

(静) みなと

* (静) は「鶴の」の「の」にミセケチ「に」書き損じによる。

(内) 鶴 こゑ

(神1) つる つる 刈 おの

(統) つる つる 刈 おの

(統書) つる つる 刈 おの

(続内) つる つる 刈 おの

(神2) つる つる 刈 おの

* (統書)・(神2) は「おくて刈おの」とする。「の」が独自本文。

九十九番左 欲別恋

(国) 今 はとて車をよする人のきてうちこはつくる明かたの空

*私集大成は「うちこえ」と読むが、他本同様「うちこは」でよい。

(大) いま

(ノ) いま

(彰) いまはとて車をよする人のきてうちこはつくる明かたの空

(明) いま

(伊) いま

(島) いま

(祐) いま

(書) いま

* (書) は「うちと」の「と」にミセケチ「こ」と傍書。同筆。

(三) そら

* (静) 〓 (国) 〓 (内)。

(内) 方

(神1) いま

(統) いま

(統書) いま

(続内) いま

(神2) いま

右 述懐言尽〔静〕(三)

(国) 我 身世に恨 は秋を限 にて冬に真 葛の枯 葉たになし

(大) わか わか うらみ かきり ま は

(ノ) わか わか うらみ かきり ま

(彰) うらみ うらみ かきり まくす

(明) 我が身世にうらみは秋をかきりにて冬にま 葛の枯 葉たになし

*「秋の」の「の」ミセケチ「を」と傍書。

(伊) 我が うらみ かきり ま かれは

(島) 我が うらみ かきり ま 葉

(祐) 我が うらみ かきり ま 葉

(書) うらみ かきり まくす

(三) まくす くれ

* (三) || (静)、但し「かれ」以外。

(静) まくす

(内) わか かきり ま くれは

(神1) わか よ ま

(統) わか よ

(統書) わか よ

(統内) わか よ

(神2) わか よ

百番 左 寄草恋「ノ」

(国) いひよれはいなとてかほをふるもうし水かけ草の風 ならねとも

(大) いひよれはいなとてかほをふるもうし水かけ草の風 ならねとも

(ノ) いひよれはいなとてかほをふるもうし水かけ草の風 ならねとも

(彰) いひよれはいなとてかほをふるもうし水かけ草の風 ならねとも 共

(明) いひよれはいなとてかほをふるもうし水かけ草の風 ならねとも

(伊) いひよれはいなとてかほをふるもうし水かけ草の風 ならねとも (六七ウ)

(島) いひよれはいなとてかほをふるもうし水かけ草の風 ならねとも

(祐) いひよれはいなとてかほをふるもうし水かけ草の風 ならねとも

(書) いひよれはいなとてかほをふるもうし水かけ草の風 ならねとも

(三) は「かほる」と作る。連想による書き損じか。 かせ

* (三) は「かほる」と作る。連想による書き損じか。

(静) 橋 ひめ 鏡 鳥 と成 てそ影 うつすらん

(内) 橋 ひめ 鏡 鳥 と成 てそ影 うつすらん

(神1) 橋 ひめ 鏡 鳥 と成 てそ影 うつすらん

(統) 橋 ひめ 鏡 鳥 と成 てそ影 うつすらん 共

(統書) 橋 ひめ 鏡 鳥 と成 てそ影 うつすらん

(統内) 橋 ひめ 鏡 鳥 と成 てそ影 うつすらん

(神2) 橋 ひめ 鏡 鳥 と成 てそ影 うつすらん

右 水郷鳥「神1」(彰)

(国) はし姫の水のかゝみやかほよ鳥 とりと成 てや影 うつすらん

* (国) は (明) が一旦「鏡や」を「鏡に」と変えたのに、「かゝみや」に戻す。

(内) は「鏡に」であるから、「かゝみや」が最終形態か。

(大) 橋 ひめ 鏡 鳥 と成 てそ影 うつすらん

* (大) は「鳥と成りそ」と改稿。明星本も「なりてそ」を「や」に変えている

から、推敲の過程がそのまま出たと言ってよい。

(ノ) 橋 鏡 鳥 と成りてそかけ

* (ノ) は「なりてそ」と作る。(大) は「なりてや」。「そ」をもつ本文は、

(三)・(静)系。

(彰) 橋 や なりてそかけ

(明) 橋 姫の水の鏡 にかほよ鳥 鳥 と成りてやかかけうつすらん

(伊) 橋 や とりとなりて かけ

* 「鏡や」の「や」ミセケチ「に」、「鳥となりてそ」の「そ」ミセケチ「や」と

改稿。

(伊) 橋 や とりとなりて かけ

*「鏡や」の「や」に「に」と傍書小書き。

(島) 橋 鳥 となりて かけ

(祐) 橋 鏡 にとり鳥 となりて かけ

(書) 橋 鏡 にとり鳥 となりて かけ

* (書) は「鏡や」の「や」にミセケチ「に」、「成てや」の「や」にミセケチ

「そ」。但し別筆か。

(三) 橋 とりともに そかけ

* (三) 〓 (静) 初期。「なりてそ」とあるから、(国) 段階で初期形態に戻した

か。

(静) 橋 鳥 そ

* (静) は(大)と同文。「ともに」にミセケチ「鳥と」。書き損じによるか。

(静) が(大)系で校訂していることは確実。この(大)系とは(ノ)系か。

(内) 橋 鏡 にとり鳥 かけ かけ

* (内) は「鏡に」と作る。

(神1) 橋 鏡 にとり鳥 かけ かけ

(続) 橋 鏡 にとり鳥 かけ かけ

(続書) 橋 鏡 にとり鳥 かけ かけ

(続内) 橋 鏡 にとり鳥 かけ かけ

(神2) 橋 鏡 にとり鳥 かけ かけ

* (神2) は「かほよはな」の「はな」をミセケチ「鳥」と傍書。書き損じだろ

う。だが、(続書) (神2) は「とりてなりてそ」と作る。独自本文。(続) はす

で(内)系によって校訂されているか。

百一番左 片恋

(国) 秋のはを一 も染ぬときは木にこかれてならふ色そはかなき

* (国) は(内)と共に「秋のはを」と作る。(大)・(明)系は「秋のはの」。最

終形態か。「を」の場合、「そめ」を明確な他動詞とする。

(大) のひとつ そめ

(ノ) 葉のひとつ そめ の

* (ノ) は「ときは木の」とつくる。書き損じか。

(彰) 葉のひとつ そめ

(明) 秋の葉のひとつもそめぬときは木にこかれてならふ色そはかなき

(伊) 葉のひとつ そめ

(島) 葉のひとつ そめ

(祐) 葉のひとつ そめ

(書) 葉のひとつ そめ

(三) のひとつ そめ

* (三) 〓 (静)。

(静) のひとつ そめ

* (静) は(大)と同文。

(内) のひとつ そめ

* (内) 〓 (国)。

(神1) 葉よ そめ 常は

* (神1) は「秋の葉よ」と作る。独自本文。この理由は不明。

(続) 葉の一つ そめ 常磐

(続書) 葉のひとつ そめ 常磐

(続内) 葉のひとつ そめ 常磐

(神2) 葉のひとつ そめ 常磐

右 嶋松「書」

(続) 嶋 所なれ松昔 をしらはやとりかせ身は老つるのよる嶋もなし

(国) 所なれ松昔 をしらはやとりかせ身は老つるのよる嶋もなし

(大) むかし 鶴
 (ノ) むかし 鶴
 (彰) そなれ松昔 をしらはやとりかせ身は老つるのよる嶋もなし
 (明) むかし
 (伊) むかし
 (島) むかし
 (祐) むかし
 (書) むかし 鶴
 (三) つる
 * (三) 〓 (国)。
 (静) 鶴
 (内) 鶴
 (神1) 鶴
 (続) むかし 鶴
 (続書) むかし 鶴
 (続内) むかし 鶴
 (神2) むかし 鶴
 百二番左 寄枕忍恋〔(国) (内)〕
 (国) 寄枕忍恋
 * (国) は恋だけではなく、「忍恋」と作る。
 (大) 寄枕×恋
 (ノ) 寄枕×恋
 (彰) 寄枕×恋
 (明) 寄枕×恋
 (伊) 寄枕×恋

(島) 寄枕×恋
 (祐) 寄枕×恋
 (書) 寄枕×恋
 (三) 寄枕忍恋
 (静) 寄枕忍恋
 * (静) は「忍」に墨消し。完全には消えていないが。(大) に合わせたか。
 (内) 寄枕忍恋
 * (内) 〓 (国)。
 (神1) 寄枕忍恋
 (続) 寄枕忍恋
 (続書) 寄枕忍恋
 (続内) 寄枕忍恋
 (神) 寄枕忍恋
 (国) 上の衣 をしやる程 におとろくや枕ひとつそ跡に残れる
 * (国) は(大)「ひとつそ跡にのこれる」を(明)が「ひとつそ跡にのこして」と変えたのを元に戻した。これが最終形態だろう。
 (大) うへきぬ そ のこ
 * (大) は「ひとつそ」とする。改稿だろうが、最終形態にもなった。末尾を「跡にのこれる」と改稿。
 (ノ) うへきぬ ほと そ のこ
 * (ノ) 〓 (大)
 (彰) うへきぬ ほとを のこ
 (明) うへのきぬをしやるほどにおどろくや枕ひとつそ跡にのこして
 * 「ひとつそ」の「そ」にミセケチ「を」、「のこれる」の「れる」にミセケチ「して」と改稿。
 (伊) うへきぬ ほと を して

(島) うへ きぬ ほと を のこして

(祐) うへ きぬ ほと をあと のこして

(書) うへ きぬ ほと のこれる

* (書) と (明) は異なる。(大) のままである。

(三) お を ならへし中川の宿

* (三) 〓 (神1) 〓 (内)。再び (内) 系に戻す。

(静) きぬ

* (静) は「ひとつそ跡ににこれる」を一旦消してまた復活させた。そして、

「ならへし中川のやと」を傍書し、それを墨消しにした。(静) が (内)・(統) を

見て、それから、改めて (大) 系に戻したのだろう。この時の (大) は (ノ) 系

か。

(内) きぬ 驚 枕ならへし中川の宿

* (内) は下句が「枕ならへし中川の宿」と独自本文。

(神1) うへ きぬ ほと ならへし中川の宿

* (神1) と (内)・(統) 系は同文。

(統) うへ きぬ ほと 枕ならへし中川の宿

* (統) は下句が (内) と同文。

(統書) うへ きぬ ほと 枕ならへし中川の宿

(統内) うへ きぬ ほと 枕ならへし中川の宿

(神2) うへ きぬ ほと 枕ならへし中川の宿

右 旅宿嵐(島)(祐)(内)(三)(彰)

(国) 隔 なよ月とふたりの中山に雲の衣 を嵐 たつこゑ

(大) へたつ 声

* (大) は「たつ」と改稿。

(ノ) へたつ ころも

(彰) へたつ あらし

(明) へたつなよ月とふたりの中山に雲の衣 を嵐 たつこゑ

(伊) へたつ 声

(島) へたつ ころも

(祐) へたつ ころも あらし

(書) へたつ ころも

(三) へたつ ころも あらし

(静) へたつ 声

(内) へたつ あらしうつ

* (内) は「あらしうつこゑ」の「うつ」が独自本文。「衣」↓「うつ」の連想。

凝った表現。

(神1) へたつ 二人 あらし立 こゑ

* (神1) 「あらし立こゑ」とする。「嵐」の語感でそうだったか。不明。

(統) へたつ あらしうつ

* (統) は (内) と独自本文が同文。

(統書) へたつ あらしうつ

(統内) へたつ あらしうつ

(神2) へたつ あらしうつ

* (統書)・(神2) は「あらしうつこゑ」とある。(統) は (内) 系を見て校訂

したか。

百三番左 不逢恋(神1)

(国) 逢 かたみさてこそかゝる浮 世にはわか身生 れ袖なしほりそ

(大) うき 我身 るれ

(ノ) あひ うき うまるれ

* (ノ) は「我身うまれ」の「う」に「む敷」と傍書。仮名遣いからの注記か。

(彰) あひ うき 我 身むまれる

* (彰) は「むまれる」と作る。意味は同じ。

(明) あひかたみさてこそかゝるうき世にはわか身うまれる袖なしほりそ

(六八オ)

(伊) あひ うき 我 身

(島) あひ うき うまれる

(祐) あひ うき うまれる

(書) あひ うき 我 身生るれ

(三) うき 我 身生るれ

* (三) 〓 (静)。

(静) うき 我 身生るれ

* (静) は(大)・(国)と同文。

(内) あひ うき 我 身 〓

(神1) あひ うき 我 身生るれ

(統) あひ 憂世 我 身生るれ

* (統) は「生かれ」に「生るゝイ」と傍書。異文は(内)と同文。

(続書) あひ 憂世 我 身生るれ

(続内) あひ 憂世 我 身生るれ

(神2) あひ 憂世 我 身生るれ

* (続書)・(神2) は「生かれ」とあるが、どう読んだのだろう。独自本文。

右 躡中嵐

(国) 立 かへりみれば嵐 の峯の松 したはぬ雲そひとりわかるゝ

(大) 嶺

(ノ) たち

(彰) あらし

* (彰) は「雲も」の「も」にミセケチ「そ」と傍書。同筆か。

(明) たちかへりみれば嵐 の嶺の松 したはぬ雲そひとりわかるゝ

(伊) たち 嶺 まつ

(島) たち あらし 嶺

(祐) たち あらし みね

(書) たち 嶺

(三) あらし 嶺 袖 独り

* (三) は他本「雲」を「袖」に作る。但し、(静)の初期も「袖」。ここは「雲」の方がよいが、「袖」とする本文が一時期あったのだろう。(三)と(静)はかなり近いところにあったと思われる。

(静) * (静) は「袖」にミセケチ「雲」と傍書。他本(ノ)系によって校訂。

(内) 帰り あらし

(神1) たち 見 嶺

(統) 見 嶺

(続書) 嶺

(続内) 嶺

(神2) 嶺

百四番左 寄坂恋(静)

(国) 人心 秋たつ風 になら坂 やうら吹 のみのかしは木の露

(大) ころ 立×風

(ノ) ころ 立×風

(彰) 人心 秋たつ風 になら坂 やうら吹 のみのかしは木の露

(明) 人心 秋たつ風 になら坂 やうら吹 のみのかしは木の露

(伊) つゆ

(島)	ころろ								
(祐)	ころろ	かせ	さか	」					
(書)	立								
(三)									
(静)		かせ							
(内)									
(神1)		立×風							
(続)									
(続書)									
(続内)									
(神2)									
(大)									
(ノ)	×								
(彰)									
(明)	ときはなる花の都	の天	津風	にははぬかたもなきめぐみ哉					
(伊)									
(島)	みやこ								
(祐)	みやこ	あま							
(書)									
(三)	みやこ								
(静)									
(内)									

(神1)	常磐								
(続)	常磐								
(続書)	常磐								
(続内)	常磐								
(神2)	常磐								
(大)	枯	ねたゝしらぬ花	さく藤	かつらわれもなげきの庭の松かえ					
(ノ)	かれ								
(彰)	かれ								
(明)	かれ	かねたゝしらぬ花	さく藤	かつらわれもなげきの庭の松かえ					
(伊)	かれ								
(島)	かれ								
(祐)	かれ	はな							
(書)	かれ								
(三)									
(静)									
(内)	かれ		開×藤	我も					
(神1)	かれ								
(祐)	かれ								
(書)	かれ								
(続)	かれ								
(神1)	かれ								
(内)	かれ								
(神2)	かれ								

右 海上夕雲「(神1)(ノ)(三)

(国) 浪の上 には人は帰 てあまのうけ夕ゐる雲そあまたならへる

(大) うへ

(ノ) 帰 り

(彰) うへ かへり

(明) 浪のうへに人はかへりてあまのうけ夕ゐる雲そあまたならへる「(六八ウ)

(伊) うへ かへり

(島) うへ かへり

(祐) うへ かへり

(書) 帰 り

(三) かへり

* (三) || (静)。

(静) かへり

(内) 波

(神1) 帰 り

(統) かへり

(統書) かへり

(統内) かへり

(神2) かへり

百六番左 寄原恋

(国) さしもわれしめちとたのむ露の身を真 葛にくたく原 の秋かせ

(大) 我 し 憑 む ま

(ノ) 憑 露 ま

(彰) 頼 む まくす

(明) さしもわれしめちと憑 露の身をま 葛にくたく原 の秋風

(伊) 憑 み まくす

(島) ま ま 風

(祐) 憑 露 ま はら

(書) 憑 露 まくす

(三) 憑 露 まくす

(静) 憑 露 まくす

(内) 憑 露 まくす

* (内) || (国)。

(神1) 憑 露 風

(統) わか 憑 露 風

* (統) 系は「わか」が独自本文。

(統書) わか 風

(統内) わか 風

(神2) わか 風

右 冬懐旧「(国)(彰)

(統内) 題なし

(国) 身ひとつに世々を忍 の種 とめていつれの草もかるゝ比哉

* (国)・(内) は末句を「かるゝ比哉」と作る。(大)・(明) 系は「枯る野へ哉」

「かるゝ比」の方が冬を明確に指していると思われ。最終形態か。

(大) 忍 ふ のへかな

* (大) 段階で「のへかな」と改稿。

(ノ) 忍 たね 野へ

(彰) 忍 ふ たね 野へ

(明) 身ひとつに世々を忍 のたねとめていつれの草も枯る野へ哉

(伊) たね 枯る野へ

(島)

たね

野へかな

(祐)

たね

野へかな

(書)

たね

野へ

(三)

の

野へ

* (三)は「世々の」とある。(三) || (静)初期。このような本文に改稿したか。

(静)

しのふ

枯ゝのへ

* (静)は、「世々の」の「の」にミセケチ「を」と傍書。「草もかるゝ」の「かるゝ」にミセケチ「枯し」と傍書。但し、「枯ゝ」と読んだ可能性は残る。今はそのように読んでおく。「かるゝ」の表記は(大)と同じ。「枯ゝ」であれば、意味を明確にし、「刈」との混同を避けたか。本文は(大) || (ノ)と同文。

(内)

忍ふ

* (内) || (神1) || (国)。

(神1)

かな

* (神1)は(国)と同文。

(統)

一つ々忍ふ たね

野へかな

* (統)は、「野へ」に「比イ」と傍書。異文は、(内)・(国)と同文。

(統書)

しのふ たね

野へ

(統内)

しのふ たね

野へ

(神2)

しのふ たね

野へ

百七番左 別恋

(国)

すゝめつる恨

そはるゝ別

てもな心

なき鳥

の八声に

(大)

(ノ)

(彰)

×××わかれ

こゝろ

こゑ

* (彰)は他本「はるゝ」に相当する三字分欠字。

(明) すゝめつる恨 そはるゝ別 てもな心 なき鳥 の八こゑに

* (明)は「八こゑ」の「こゑ」が消した跡があり、読み取りにくい。

(伊)

わかれ

こゝろ

こゑ

(島)

わかれ

こゝろ

こゑ

(祐)

うらみ

わかれ

こゝろ

こゑ

(書)

わかれ

こゝろ

こゑ

(三)

* (三) || (国)、「とり」以外、(静)も同一表記。

(静)

こゝろ

とり

(内)

こゝろ

とり

(神1)

とり

(統)

わかれ

こゑ

(統書)

わかれ

こゑ

(統内)

わかれ

こゑ

(神2)

わかれ

こゑ

右 山家水「(島) (祐) (書)

(国) 今 はわれ水を吞 てもこゆるきのいそかてなとか世には住 けん

(大)

我 水 のみ

き

すみ

(ノ)

いま

き

すみ

* (ノ)は「いそきて」と作る。連想による書き損じか。

(彰)

のみ

すみ

(明) いまはわれ水をのみてもこゆるきのいそかてなとか世にはすみけん

(伊)

いま

のみ

木

すみ

(島)

いま

のみ

すみ

(祐) いま のみ すみ
 (書) いま のみ
 (三) のみ
 (静) * (静) 〓 (国) 〓 (内)。「のみ」以外は(三)も同一表記。
 (内) のみ
 (神1) のみ
 (統) のみ 劍
 (統書) いま のみ すみ
 (続内) いま のみ すみ
 (神2) いま のみ すみ
 百八番左 寄車恋(神1)
 (国) つるに我 身をうち川の空 車煙 たてゝも誰 か問はまし
 (大) 河 むな 立 とてたれ と
 * (大) は他本「たてゝも」とするのに「立とて」と作る。(大)の改稿か。
 (ノ) われ 宇治 むな と
 * (ノ) は(大)の「立とて」に従っていない。
 (彰) われ 宇治 立 とてたれ と
 (明) つるにわれ身をうち川のむな車煙 たてゝもたれかとはまし(六九オ)
 * (明) 段階で(内)に戻る。
 (伊) 終 にわれ むな けふり たれ と
 (島) われ むな けふり たれ と
 (祐) われ むな けふり たれ と
 (書) われ 宇治 むな たれ と
 (三) むな と

* (三) 〓 (静)、但し「われ」以外。
 (静) われ むな と
 * (静) は(国)と同じで、(大)の「立とて」に従っていない。理由は同じ
 (大) でも(ノ)系に基づくからか。
 (内) われ 宇治 むな
 * 「むなくるま」は歌語。正徹語彙。
 (神1) われ 宇治 むな は
 (統) わか 河 むな けふり と
 * (統) 系は「わか」とする。
 (続書) わか 河 むな けふり と
 (続内) わか 河 むな けふり と
 (神2) わか 河 むな けふり たれ と
 右 嶺上雲(静)(三)(彰)
 (国) ふもとよりつもるはしらす雲 のちり峯いや高くみゆる空 哉
 (大) 塵 たか かな
 (ノ) 塵 たか 見 かな
 (彰) 麓 塵 嶺 たか 見 かな
 (明) ふもとよりつもるはしらす雲 の塵 嶺 いやたかくみゆる空 哉
 (伊) 塵 嶺 たか
 (島) くも 塵 嶺 たか そらかな
 (祐) くも 塵 嶺 たか 見 そらかな
 (書) 嶺 たか 見
 (三) 嶺 かな
 * (三) 〓 (静)。
 (静) 嶺 かな

* (静) は「はや」の「は」にミセケチ「い」と傍書。書き損じによるか。「ハ」に見られるからもしれないから、わざわざミセケチにした方がここでの説明になるか。これでよい。

(内) 麓 積る 知ら 塵 嶺 たか 見
 (神1) 麓 積る 嶺 たか 見
 (統) 麓 積る 嶺 かな
 (統書) 麓 積る 嶺 かな
 (統内) 麓 積る 嶺 かな
 (神2) 麓 積る 嶺 かな

百九番左 尽恋

(国) 思 わひいねつる程 の夢路とへ我 身朽 たる木にたとふとも

(大) 侘 い ほと

* (大) 段階で「たとふとも」と改稿か。

(ノ) おもひ侘 い ほと

(彰) 思 ひ侘 い ほと

(明) おもひわひいねつるほどの夢ちとへ我 身朽 たる木にたとふとも

(伊) おもひ ほと ち

(島) おもひ ほと ち

(祐) おもひ ほと ち

(書) おもひ ほと ち

(三) おもひ ほと ち

* (三) Ⅱ (静) 初期。「夢路さへ」という本文を持つ。(三) は他本で校訂して
 いない。(三) 段階で一旦「さへ」にしたか。

(静) ほと

* (静) は「夢路さへ」の「さ」にミセケチ「と」と傍書。

(内) おもひ かな

* (内) は末句が他本「たとふとも」を「たとふとて」と作る。独自本文。て

(神1) 思 ひは ほと ち

* (神1) は「思ひはひ」の「は」が独自文。書き損じか。

(統) 思 ひ侘 い ほと ち

* (統) は末句「たとふとも」に「たとれとてイ」と傍書。おそらく「たとふとて」の間違いではないかと思われるが、そうであれば、異文は(内)と同文。

(統書) 思 ひ侘 い ほと ち

(統内) 思 ひ侘 い ほと ち

(神2) 思 ひ侘 い ほと ち

右 名所橋

(国) 道 ありてみはやなからの浪の上 山かつらきにくめの岩 はし

(大) うへ

(ノ) みち 見

(彰) みち 見

(明) みちありてみはやなからの浪の上 山かつらきのくめの岩 はし

(伊) みち

(島) みち

(祐) みち

(書) みち 見

(三) みち

(静) 見 波

(神1) 見

(統) 橋

(統書) 橋
 (統内) いは
 (神2) 橋

百十番左 寄月忍恋

(国) 灯 はあれとも月のかたはらに出 てかつみる露の玉 章

(大) いて、

(ノ) いて、

(彰) いて、 見 つさ

(明) 灯 はあれとも月のかたはらに出 てかつみる露の玉 つさ

(伊) つさ

(島) つさ

(祐) 見 つさ

* (内) は「かつみる」の「み」が脱字。「玉章」に小書きで「別本」と傍書。

(書) いて、 たま

(三) いて、 たま

* (三) 〓 (静)。

(静) いて、 たま

(内) ×

(神1) いて、 見

(統) ともし火

(統書) ともし火

(統内) ともし火

(神2) ともし火

右 松戸夕嵐 (神1) (書) (彰)

(国) 誰 世をかわれ松 の戸の夕嵐 にかたふく陰 と成 身に
 * (国) と (内) は末句、(大)・(明) 系「かけそつれなき」とするのには、「陰と成身に」と作る。述懐の意味合いを帯びさせるのには、(明)・(内) の方がよい。最終形態か。

(大) たか まつ 嵐 かけそつれなき

* (大) 段階で「かけそつれなき」と改稿したか。

(ノ) たか 嵐 そつれなき

(彰) たか まつ 嵐 かけそつれなき

(明) たか世をかわれ松 の戸の夕嵐 霜 にかたふく陰 そつれなき (六九ウ)

(伊) たか 嵐 影 そつれなき

(島) たか 嵐 そつれなき

(祐) たか 嵐 かけそつれなき

(書) たか 嵐 かけそつれなき

(三) たか 嵐 そつれなき

* (三) 〓 (静)。

(静) たか 嵐 そつれなき

* (静) は(大)・(ノ) と同文。

(内) 嵐 なる

* (内) 〓 (神1) 〓 (国)。

(神1) たか 嵐

* (神1) と (内) は(国) と同文。

(統) たか 嵐 かけそつれなき

* (統) は「そつれなき」に「となる身にイ」と傍書。異文は(内) (国) と同文。

(統書) たか 嵐 かけそつれなき

(続内) たか 嵐 かけそつれなき
(神2) たか 嵐 しも かけそつれなき

百十一番左 詞和不逢恋(国)(ノ)

(国) 山風 に向へはにほふ声 なからおられぬ花や滝津岩なみ

* (国) と (内) は末句、(大)・(明) 系が「花の滝津岩なみ」とするの、「花や滝津岩なみ」と作る。最終形態か。

(大) むか 句 ふ の つ
(ノ) むか 句 ふ の つ

(彰) むか 句 ふ の つ
(明) 山風 にむかへはにほふ声 なからおられぬ花の滝津岩なみ

(伊) むか 句 ふ の つ
(島) むか 句 ふ の つ

(祐) むか 句 ふ の つ
(書) むか 句 ふ の つ

(三) かせ 句 ふ の つ
(三) かせ 句 ふ の つ

(静) むか 句 ふ の 浪
* (静) は (大)・(ノ) と同文。

(内) かせ 句 ふ の つ
* (内) 〓 (神1) 〓 (国)。

(神1) むか 句 ふ の つ
* (神1)・(内) は (国) と同文。

(続) むか 句 ふ の つ
* (続) は「花の」の「の」に「やイ」と傍書。異文は (内)・(国) と同文。

(続書) むか 句 ふ の つ

(続内) むか 句 ふ の なみ
(神2) むか 句 ふ の の
* (神2) は「滝の」の「の」にミセケチ「津」と傍書。

右 山家待友(三)

(国) 今さらになにと夕の松の風 我も一木そ声 ないさめそ
* (国)・(内) は (明) 系が「一木と」とするのを「一木そ」と作った。最終形態だろう。

(大) 更 なたれをか松の夕嵐 と
* (大) は (明) でミセケチで変更される前の初期形態を示している。

(ノ) いま たれをか松の夕嵐 われ と
* (ノ) 〓 (大) 〓 (彰)。

(彰) いま 誰をか松の夕嵐 われ とこゑ
(明) いまさらになにと夕の松の風 われも一木と声 ないさめそ

* (明) は「たれをか」ミセケチ「なにと夕の」、「夕嵐」ミセケチ「風」と改稿。(明) によって、(大) の改稿が改訂された。

(伊) いま なにと夕の われ と
(島) いま なにと夕の われ と

(祐) いま なにと夕のまつのかせわれ と
(書) いま なにと夕の松の風 われ とこゑ

* (書) は「たれをか」ミセケチ「なにと夕の」、「夕嵐」ミセケチ「風」と訂正。この訂正は (明) と同じだが、本文は (内) であり、おそらく他筆ではないか。

(三) 誰をか松の夕あらし と
* (三) 〓 (静)、(三) は (書) の訂正前を受けているのではないか。

(静) 誰をか松の夕あらし と
* (静) は (大)・(ノ) と同文。(大)・(ノ) 系を見てそうしたのは存疑。

(三) がそうなっているため。

(内) 更 何 かせわれ

* (内) 〓 (神1) 〓 (国)。

(神1) 更 たれをか松の夕嵐 われ こゑ

(続) 更 たれをか松の夕嵐 と み

* (続) は(大)と同文の「たれをか松の夕嵐」に「何と夕の松の風イ」を傍書、「一木と」の「と」に「そイ」と傍書。異文は、(内)・(国)と同文。

(続書) 更 たれをか松の夕嵐 われ と

(続内) 更 たれをか松の夕嵐 われ と

* (続書)・(続内) は「いさみそ」と作る。独自本文。書き損じか。

(神2) 更 たれをか松の夕嵐 われ と

* (続) 系は(大) (ノ) と同文。

百十二番左 寄獣恋 (内)

(国) さらはわれうつともさらし招 くにもよらぬならひを中 そはるけき

(大) 我 う まね

* (大) 段階で最終形態に改訂か。

(ノ) つ まね

* (ノ) は「つらし」の「つ」に「さ歟」と傍書。校訂した跡か。

(彰) まね
(明) さらはわれうつともさらしまねくにもよらぬならひを中 そはるけき

(伊) まね

(島) まね

(祐) まね

(書) まね

(三) まね

かなき

* (三) 〓 (静) 初期。(三) 段階で「はかなき」と改訂したか。

(静) 習 を

* (静) は末句「かなき」にミセケチ「るけき」

(内) 打 と まね と かせきの

* (内) は「まねくとも」「よらぬかせきの」が独自本文。かせき〓鹿は「寄獣恋」にはふさわしいか。

(神1) まね かせきの

* (神1) は(内)と「まねくにも」を除いて同文。「かせきの」では(続)とも同文

(続) 更 に 打 と と かせきの

* (続) は「更に」に「さらはイ」と傍書。異文および独自本文は(内)と同文。「かせきの」は(内)系との校訂によるか。

(続書) に 打 と まね と なか

(続内) に 打 と まね と なか 春 け

(神2) に 打 と まね と なか

* (続書)・(神2) は「ならひを」とする。(続) 系は「さらに」が独自本文。「まねくとも」は(内)と同文。

右 嶺樹猿 (島) (祐) (内) (彰)

(国) さひしさは峯 たつ鹿 の声 よりも冬にましろの椎の下 かせ

(大) 立 しか

(ノ) みね立 こゑ ぬ

* (ノ) は「ましらぬ」と作る。連想による書き損じか。

(彰) 嶺 風

(明) さひしさはみね立 鹿 のこゑよりも冬にましろの椎の下 風

(伊) みね立 風

(島) みね立 こゑ 風
 (祐) みね立 こゑ した風
 (書) 嶺立 鹿 こゑ
 (三) 嶺 こゑ ぬ
 * (三) も「ましらぬ」と作る。同じく連想による書き損じか。
 (静) 嶺 風
 (内) 立 こゑ
 (神1) 嶺立 鹿 こゑ 風
 (統) みね しか 風
 (統書) みね しか
 (続内) 脱文(百十二右から百十六左までは百廿番左以降に移る。落丁の一種か)
 (神2) みね しか 風
 みね しか
 百十三番左 俄変約恋(静)(神1)
 (国) 沖津かせまほ吹 かへていかり縄 浪 のたゝちにとまる舟 哉
 (大) 奥 風 ふねかな
 (ノ) 奥 風 に かな
 * (ノ) は「にほ吹」とつくる。書き損じか。
 (彰) 奥 風 かな
 (明) 奥 津風 まほ吹 かへていかり縄 浪 のたゝちにとまる舟 哉
 (伊) 奥 風 なみ
 (島) 奥 風 ふねかな
 (祐) 奥 風 ふねかな
 (書) 奥 風 かな

(三) 奥 風 かな
 * (三) 〓 (静)。
 (静) 奥 風 かな
 (内) おきつ 碇 なは波 かな
 (神1) 仲 風 碇 縄 かな
 * (神1) 「仲」は「沖」の書き損じか。
 (統) つ 風 かな
 (統書) 風 ふき かな
 (続内) 風 ふき かな
 (神2) 風 ふき かな
 右 浦鶴鳴月(書)
 (国) いにしへの道はなにはの都 鳥 月には有 てたつそ鳴 なる
 * (国・内) は(大)・(明)「いにしへの道」とするのを「いにしへの跡」と作る。「なにはの都」と連関させると、「跡」の方がよいか。最終段階だろう。
 (大) 跡 あり
 (ノ) 跡 難波 あり
 (彰) 跡 難波 なく
 (明) いにしへの跡は難波の都 鳥 月にはありてたつそ鳴 なる
 (伊) 跡 あり なく
 (島) 跡 あり
 (祐) 跡 難波 あり
 (書) 跡 難波 あり
 (三) 古 の跡 あり
 * (三) 〓 (静) は同一本文。
 (静) 古 の跡 あり

* (静) は (大)・(ノ) と同文。
 (内) 古 の あり なく
 * (内) 〓 (神1) 〓 (国)。
 (神1) 跡 難 波 みやこ あかて田鶴
 (続) 跡 難 波 みやこ あかて田鶴
 * (続) 系は「あかて」が独自本文。
 (続書) 跡 難 波 みやこ あかて田鶴
 (続内) 跡 難 波 みやこ 嶋 あかて田鶴
 * (続内) は他本「みやこ鳥」を「みやこ嶋」と作る。書き損じか。
 (神2) 跡 難 波 みやこ あかて田鶴
 百十四番左 寄秋露恋
 (国) 露はらふ袖をやすめぬ秋のきて恋のはて知 夕 まくれ哉
 (大) しる 暮 かな
 (ノ) しる 暮 かな
 (彰) しる 暮 かな
 (明) 露はらふ袖をやすめぬ秋のきて恋のはてしる夕 まくれかな
 (伊) しる 暮 かな
 (島) しる かな
 (祐) しるゆふ かな
 (書) しる かな
 (三) 来 暮
 (静) 来 暮
 (内) 暮
 (神1) 暮
 (続) 来 間暮

(続書) 来 間暮
 (続内) 来 間暮
 (神2) 来 間暮
 右 山家惜花「(三) (彰)」
 (国) 花 よりもわれそ嵐 の松か本 さそはれやすき露の身にして
 (大) 我 そ もと 安 き
 (ノ) 我 そ もと
 (彰) 我 そ もと
 (明) 花 よりもわれそ嵐 の松かもとさそはれやすき露の身にして
 (伊) あらし もと み
 (島) あらし もと
 (祐) はな あらし もと
 (書) あらし もと
 (三) 我 そあらし
 * (三) 〓 (静)、但し「あらし」以外。
 (静) 我 そ
 (内) 我 そあらし
 * (内) 〓 (三)、但し「み」以外。
 (神1) 我 そあらし
 * (神1) 〓 (国)。
 (続) 我 そあらし もと
 (続書) 我 そあらし もと
 (続内) 我 そあらし もと
 (神2) 我 そあらし もと

百十五番左 深夜逢恋

- (国) 深 にけりいかにと問へはよひのまは人しつめてとうちそかたふく
 - (大) ふけ
 - (ノ) ふけ
 - (彰) ふけ と
 - (明) ふけにけりいかにとへはよひのまは人しつめてとうちそかたふく
 - (伊) ふけ と
 - (島) ふけ
 - (祐) ふけ と
 - (書) ふけ と
 - (三) と
 - * (三) 〓 (静) 〓 (神1) 〓 (内)、「と」以外は(国)も同一表記。
 - (静) と
 - (内) と
 - (神1) と
 - (統) 更 に と 宵の間 鎮め
 - (統書) 更 に と 宵の間
 - (統内) 更 に と 宵の間
 - (神2) 更 に と 宵の間
- 右 閑居松「七八(国)(神1)
閑居松
- (国) 閑居松
- * (国)・(内)は「閑居松」、(大)・(明)は「閑居待友」である。但し、歌も大きく異なるので、歌確定後、題も改めたとみてよいか。
- (大) 閑居待友
- (ノ) 閑居待友

- (彰) 閑居待友
- (明) 閑居待友
- (伊) 閑居待友
- (島) 閑居待友
- (祐) 閑居待友
- (書) 閑居待友
- (三) 閑居松
- * (三) 〓 (静) 〓 (内) 〓 (国)。
- (静) 閑居松
- * (静) は「閑居待友」とあったものをその上に「友」を墨消し。これはかなり消している。そして、「待」の上に「松」と書き、改めて「松」と傍書している。どうして(大)・(ノ)ではなく、(国)にしたのか、歌によるか。歌は(大)をとっているので、混乱が原因ではないか。
- (内) 閑居松
- * (内) 〓 (国) 〓 (三)。
- (神1) 閑居松友
- (統) 閑居松友
- (統書) 閑居松友
- (統内) 閑居松友
- (神2) 閑居松友
- (国) 露の身よわれきえはては宿の松 誰とともにか年を送らん
- * (国)・(内)は(大)・(明)「いつまてとわれすみはては」を「露の身よわれきえはては」と作る。つまり、「松」に目が注がれている。これが題と対応しているのは明らか。最終形態だろう。
- (大) いつまてと我住 すてはやと たれ
- (ノ) いつまてとわれ住 すては たれ友 をく

(彰) いつまてとわれすみはてはやと たれ 友

* (彰) は(明)と同一表記。「すみはては」

(明) いつまてとわれすみはてはやとの松 たれと友 にか年 をくらん

(七〇ウ)

(伊) いつまてとわれすみすては まつたれ 友

(島) いつまてとわれすみすてはやと たれ 友

(祐) いつまてとわれすみすてはやと たれ 友

(書) いつまてとわれすみすては たれ 友

* (書) は(明)と同文。

(三) 我 たれ

(三) || (静) || (神1) || (内) || (統) 系 || (国)。

(静) いつまてと我 すみすては たれ

* (静) は「いつまてか我すみすて」が一旦、墨消しされ、復活している。その横に「露の身よわれきえはては」が傍書され、墨で消されている。最終的に

(大)・(ノ)に戻ったのだろう。

(内) 消は 友

(神1) 消は 友

* (神1) は(内)・(国)・(統) 系と同文。

(統) 我 たれ

* (統) は(内)・(国)と同文。

(統書) 我 たれ

(統内) あれ たれ

(神2) 我 たれ

百十六番左 寄花恋

(国) 紫 の色 にはあらてかは桜 なにをゆかりに匂 来ぬらむ

(大) さくら と き

* (大) は他本「ゆかりに」を「ゆかり」と作る。(大) による改編か。但し、

(ノ) には継承されていない。

(ノ) にほひき

(彰) 紫 の色 にはあらてかは桜 なにをゆかりににほひきぬらん

(明) 紫 の色 にはあらてかは桜 なにをゆかりににほひきぬらん

(伊) 紫 の色 にはあらてかは桜 なにをゆかりににほひきぬらん

(島) 紫 の色 にはあらてかは桜 なにをゆかりににほひきぬらん

(祐) 紫 の色 にはあらてかは桜 なにをゆかりににほひきぬらん

(書) 紫 の色 にはあらてかは桜 なにをゆかりににほひきぬらん

(三) うへ え き

* (三) は「は」を書き損じて「え」としたか。「うへ」は共通。(三) || (静)。

(静) うへ き

* (静) は他本「色」を「うへ」とする。

(内) にほひき

(神1) 何 匂 ひき

(統) 何 匂 ひき

(統書) 何 匂 ひき

(統内) 何 匂 ひき

(神2) 何 匂 ひき

右 旅宿月(ノ)(書)(彰)

(国) くるしくはうちねよとてや曇 らん山路を宿 に送 夜の月

(大) くる くと 送 るよ

(ノ) くる くと 送 るよ

(彰) くる くと 送 るよ

(明) くるしくはうちねよとてやくもるらむ山ちをやとにをくる夜の月

(伊) くもる やとをくる

(島) くもる ちやとをくる

(祐) くもる むちやとをくる

(書) くもる むをくる

(三) くもる むよ

(静) くもる よ

(内) 曇る よ

(神1) 曇る む

(統) 苦し に曇る やとおくる

* (統) は他本「うちねよ」の「よ」を「に」に作る。誤読によるものか。

(統書) に曇る やとおくる

(統内) に曇る やとおくる

* (統書)・(統内) は「うちねに」と作る。理由は「よ」と「に」の誤読だろう。

(神2) 曇る やとおくる

百十七番左 押涙悔恋

(国) よる浪 にさすかおもひをけたしとの身のわさつらきあまのたく繩

(大) 思 × なは

(ノ) 波 思 ひ

(彰) 思 ひ

(明) よる浪 にさすか思 ひをけたしとの身のわさつらきあまのたく繩

(伊) 思 海士

(島) なみ

(祐) 思 ひ

(書) 思 ひ

(三) 思 ひ

(静) ×

* (静) は(大)・(ノ)と同文。

(内) 波 思 ひ

(神1) 思 ひ

(統) 思 ひ 業

(統書) 思 ひ

(統内) 思 ひ

(神2) 思 ひ

* (統) 系は「けたしとて」と作る。独自本文。

右 野旅宿「(島) (祐) (静) (三)

(国) 明 ぬとてはかなの夢や枕 には月を残してゐなの篠原

* (国) は(内)を含めて「いな」とするのを「ゐな」と作る。こちらの方が仮

名遣いはよい。最終形態か。

(大) のこ さゝ原

(ノ) あけ のこ 笹

(彰) あけぬとてはかなの夢や枕 には月をのこしていななさゝはら

(明) あけ のこ い さゝはら

(伊) あけ のこ い さゝはら

(島) あけ のこ い さゝはら

(祐) あけ まくら のこ さゝはら

* (島) は「いな」とし、(祐) は「ゐな」とする。猪名だから「ゐな」が正し

い。

(書) あけ のこ い さゝ

(三) のこ い さゝ

(神2)	のこ	さゝはら	右	峯雲「(彰)	
(続内)	のこ	さゝはら	(国)	峯	
(続書)	のこ	さゝはら	(大)	嶺	
(神1)	のこ	さゝ	(ノ)	峯	
(内)	のこ	い	(彰)	嶺	
(静)	のこ	い	(明)	嶺	
* (三) (内)、「さゝ」以外は(静)も同一表記。					
百十八番左 寄石恋「(神1)	の硯	の石	(大)	嶺	
(国)	いかにして筆をも染	のかたきこゝろは	(ノ)	峯	
(大)	すゝり	心	(彰)	嶺	
* (大) 段階で「心は」と改編したか。					
(ノ)	いし	を	(伊)	嶺	
(彰)	を		(島)	嶺	
* (彰) は末尾が(内)と同じく「を」と作る。					
(明)	いかにして筆をもそめん紫	のかたき心	(書)	嶺	
の硯 　　の石					
(七一オ)					
(伊)	そめ		(三)	嶺	
(島)	そめむむらさき		(静)	嶺	
(祐)	そめむむらさき		(内)	嶺	
(書)	そめ	心	(神1)	嶺	
(三)	そめ		(続書)	嶺	
* (三) (静)。					
(静)	そめ	心	(続内)	嶺	
(内)	そめ	こゝろを	(神2)	嶺	
	いしの		(国)	雨となり朝	
				に契	
				行	
				ゑにや今	
				も別	
				るゝ嶺	
				のよこ雲	

* (国) は他本 (内) も含む。「行ゑとや」を「行ゑにや」と作る。最終形態か。他本に一切ない、とりわけ、(国) 以降の伝本である (内) も「と」とするので、書き損じの可能性も否定できない。

(大)	契る	と	わか	峯	
(ノ)	契る	と	わか	峯	横
(彰)	契る	ゆくゑと	わか	峯	
(明)	雨となり朝	に契る	行ゑとや今	もわかる、嶺	のよこ雲
(伊)	成朝	契る	と	わか	くも
(島)	あした	契る	と	わか	くも
(祐)	あした	ちきる	と	わか	みね
(書)		ゆく	と	わか	
(三)	契る	と	わか		
(静)	ちきる	と	わか		横
* (静)	は (大)・(ノ) と同文。				
(内)		と			┌
(神1)		と	わか		横
(統)	あした	契る	と	わか	横
(統書)	あした	契る	と	わか	横
(統内)	あした	契る	と	わか	横
(神2)	あした	契る	と	わか	横

百十九番左 非心離恋

(国) おもひつく浪の巖 の蛸 貝 あまの手にとる中そ成ぬる
 * (国) は他本「中と」を「中そ」と作る。「なりぬる」との係り結びでは「そ」がいいので、こうしたか。しかも (内) は「と」となっているから、やや微妙ではある。

(大)	思つ	岩ほ			と
(ノ)	思ひ	岩ほ	あはひかひ蟹		と
(彰)	思ひ	岩ほ	あはひかひ蟹		と也
(明)	おもひつく浪の岩	ほの蛸	貝	あまの手にとる中となりぬる	
(伊)	思ひ	岩ほ			と
(島)	思ひ	岩ほ			と
(祐)	思ひ	岩ほ			と
(書)	思×つ	岩ほ			と
(三)	思×つ	岩ほ			と
* (三) (静)	但し、「なり」以外。				
(静)	思×つ	岩ほ			と
* (静)	は (大)・(ノ) と同文。				
(内)	波	いはほ			と
* (内)	は末句「成かな」の「かな」を消して「ぬる」と傍書。				
(神1)	思ひ				と
(統)	いはほ	あはひ			と
(統書)	いはほ	あはひ			と
(統内)	いはほ	あはひ			となり
(神2)	いはほ	あはひ			と

右 旅泊夢 (書)

(国) 空 蟬 のわか世むなしきから泊 さてそはかなき夢通 らん
 (大) 空 蟬 のわか世むなしきから泊 さてそはかなき夢通 らん
 * (大) 「とふり」にミセケチ「泊」。
 (ノ) うつせみ とまり 通ふ
 (彰) うつせみ とまり かよふ

(明) うつせみのわか世むなしきからとまりさてそはかなき夢かよふらん
 (伊) 空しき とまり かよふ
 (島) うつせみ とまり かよふ
 (祐) うつせみ とまり かよふ
 (書) うつせみ とまり かよふ
 (三) うつせみ とまり かよふ
 * (三) は「わか世を」の「を」にミセケチ。
 (静) 静
 * (静) Ⅱ (国)、(三) も「かよふ」以外同一表記。
 (内) うつせみ とまり も かよふ
 (神1) うつせみ とまり も かよふ
 * (神1) は (内) と同様に「さても」と作る。
 (統) とまり 通ふ
 (統書) とまり かよふ
 (続内) とまり かよふ
 (神2) とまり かよふ

(書) 鳴 こゑ からす哉
 (三) こゑ 哉
 * (三) Ⅱ (静)、但し「こゑ」以外。
 (静) こゑ 哉
 (内) こゑ からす哉
 (神1) 鳴 こゑ からす
 (統) 鳴 声 きぬ
 (統書) 鳴 声 きぬ
 (続内) 鳴 声 きぬ
 (神2) 鳴 声 きぬ
 右 貴賤祝言「(神1) (三) (彰)
 (国) 宮 人の日影 の糸 も時 つ風 とき世になひく賤 の小田巻」
 (大) みや かせ をた
 (ノ) 津 時 をたまき
 (彰) 津 時 をたまき
 (明) 宮 人の日影 の糸 も時 津風 時 世になひく賤 士のをた巻」 (七一ウ)
 (伊) 津 時 士 をた
 (島) 津 時 士 をた
 (祐) いと とき津 時 賤 士 をた
 (書) 津 時代 時 代 をた
 (三) かけ 津 時 代 をたまき
 (静) かけ 津 時 代 をたまき
 (内) かけ 津 時 代 をたまき
 (神1) かけ 津 時 代 をたまき

* (神1) は他本「糸も」とするところを「糸え」と作る。「も」のつもりだったか。

(統)	みや	かけ	かせ	手
(統書)	みや	かけ	かせ	手
(統内)	みや	かけ	かせ	手
(神2)	みや	かけ	かせ	手

(明) あふけとも清 き巖 の松 か本
はかなやつゐにふる葉をそかく

(国) なし

(大)

(伊) いはほ まつ もと

(島)

(祐) いはほ

(書)

(三) いはほ 古 もと

(内) は もと

(続) きよ いはほのまつ もと

(統書) きよ いはほ もと

(統内) きよ いはほ もと

(神2) きよ いはほ もと

書写目付

(国) なし

(神1) なし

(ノ) なし

(彰) なし

(明) 文明八年七月日

正広(花押)

(七二〇)

おわりに

書誌的問題や正広自身による改訂の過程についての推測は前稿で検討したので、ここでは繰り返さない⁽²⁾。今後の課題だけを挙げて本稿を閉じたく思う。

第一に、正広の和歌の特性に関する注釈的研究である。むろん、それらを行うに際しては、和歌の校異においても何度か触れてはいるが、師匠である正徹の和歌との比較(題・語彙・表現特性・姿)は最初に行わねばならない作業過程となるだろう。なんとと言っても、師正徹の家集『草根集』を編纂し、招(松)月庵正徹には及ばないという意味をもつ

私家集『松下集』をもつ正広である。正徹との徹底的比較を行ってこそ、正広の独自性も浮かび上がってくるのではないだろうか。それに加えて、正広にとって過去の和歌（とりわけ正徹が範に仰いだ定家他新古今時代の詠歌群、古典中の古典である『古今集』・『伊勢物語』・『源氏物語』さらに『狭衣物語』も入るか）との比較、および、同時代和歌（三条西実隆、冷泉政為、後柏原天皇、『新統古今集』）との比較も落とせないだろう。

第二に、「自歌合」というありようの変遷に関する和歌史的研究である。自歌合は、新古今時代（西行『御裳灌河歌合』・『宮河歌合』、『慈鎮和尚自歌合』、『後京極殿自歌合』、『定家卿百番自歌合』、『家隆卿百番自歌合』、『後鳥羽院自歌合』、それに『隆祐朝臣百番自歌合』）に生まれて、鎌倉後期には永福門院によって一度復活したものの（『永福門院百番自歌合』）、その後、途絶えてしまう。だが、室町に至って突如復活するのである（『堯孝法印自歌合』、『慈照院殿（足利義政）御自歌合』、『道堅法師自歌合』、『豊原統秋自歌合』、『十市遠忠自歌合』（五十番・百番・百五十番）、『細川右京大夫（高国）自歌合』、『素純自歌合』、『貞徳自歌合』（五十番・十五番））。その中で一等規模が大きいのが『正広自歌合』（二百六十番）である。何故に室町期でかかる規模で復活したのか、また、正徹が行っていない「自歌合」（时期的にやや早いと推測されるもの）を敢えて正広が行った意味は何なのか。「自歌合」の和歌史的意味を踏まえた正広の企てを当時の歌壇史・和歌が詠まれる状況を絡みながら、検討していくのは価値のある作業となるだろう。

第三に、正広と『正広自歌合』を含んだ『松下集』の後代における享史的的研究である。前稿において、稲葉正通―伊達吉村、稲葉正通―林鷲峰―松平忠房、松平忠房―鍋島直条の関係を通して、明星本『正広自

歌合』が貸与・書写されていった過程を論述したが、改めて、大名間ネットワークにおける古典籍に移動の問題を探る必要性を感じている。というのも、近世において古典的書物を蒐集・収蔵していた代表格が全国の大名たちであったからである。しかも、島原松平文庫（忠房の蔵書が中心）や伊達文庫（吉村の蔵書が中心）を調査すれば、集積された古典的書物は、決して平安・鎌倉の諸テクストばかりではないことが容易に判明する。言い換えれば、室町期の歌人たちのテクストも同程度度蒐集されていたのである。その中に正徹・正広も入るというわけだ。

それでは、彼ら大名にとって、かかる歌人やかかる家集・歌書・歌合といったテクストはいかなる意味を持ったのであろうか。これはかなり大事な問題である。我々は、江戸期において、類題集（版本）が作られた歌人として、頓阿・正徹・三玉集（実隆・政為・後柏原）があったことを知っている。類題集とは、和歌が題ごとに再編されているので実際に和歌を詠むときの手本となり、また、役立つものである。こうした南北朝～室町の歌人たちが近世における手本となっている事実と、大名文庫における室町歌人の歌書蒐集とはどこかで関係しているのではないだろうか。これも大きな課題となるだろう。

なお、大名の文庫形成については、今年度から科研（基盤B）をとり、島原松平文庫を中核に据えて忠房蒐集本のありようから調査・研究を開始したところである。

以上三点が今後残された問題である。いずれも重いものばかりだが、どうして和歌や古典が消えずに近世に伝授され、ある意味で「古典の王国」とも呼ぶことが可能な近世において、大名を中心に古典復興が起きたのか、これは、「古典」なるものを考究する研究者なら誰しもが考えねばならない第一級の問題であることは疑いを入れない。本稿がその

第一歩となればと願っている。

とまれ、『正広自歌合』というマイナーな作品ではあるが、管見の及ぶ範囲内ではあるが、本文と校異を一応完成した。これを存分に利用して、上記の問題に迫る研究者が後に続くことも期待している。

最後に、本稿をまとめるに当たり、諸本調査のため、大谷大学図書館・宮城県図書館（伊達文庫）・島原市立図書館（松平文庫）・国会図書館・国立公文書館（内閣文庫）・宮内庁書陵部・静嘉堂文庫・国文学研究資料館・明星大学図書館にはさまざまのご配慮に預かった。さらに、稲田利徳先生は、筆者にご架蔵本『正広自歌合』（大谷大本系統）を貸与されたばかりか、古典ライブラリーの新企画に『正広自歌合』担当者として筆者を推してくださいました。既に感謝の言葉を失っている。共々衷心よりお礼申し上げます。難有うございました。

註

- (1) 奥書等については、前稿「明星本『正広自歌合』の本文と校異（一）」（『明星大学研究紀要【人文学部・日本文化学科】』二二号、二〇一四年）で詳細に論じているので、ここでは、明星本のみ記した。
- (2) 前掲論文。